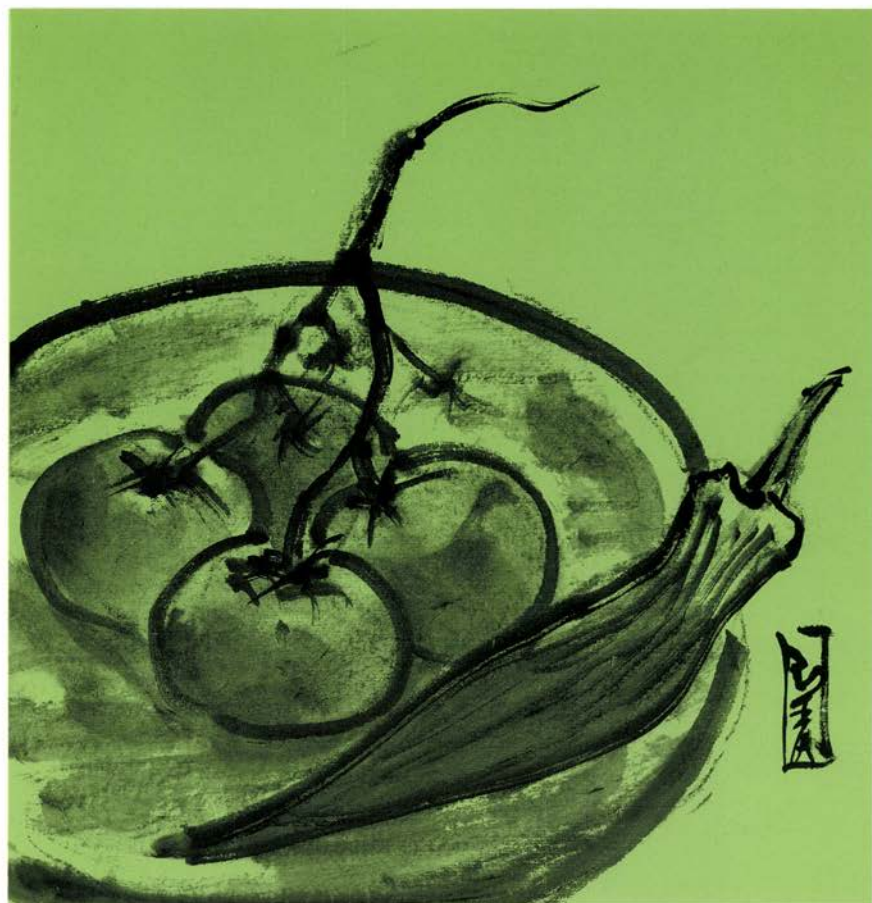


川柳塔

創刊大正十三年 通卷八三〇号
（毎月一日発行）



日川協加盟

No. 830

七月号

第二回 川柳塔まつり

川柳塔社の恒例行事として昨年につづいて「川柳塔まつり」を実施します。要項は次のとおりです。

と き 10月19日(土) 午前10時～午後8時

ところ ホテル・アウイナ大阪(なにわ会館)

同人総会 午前10時開会(以下、会場は同じ)

記念句会 午後1時半投句締切・表彰式に続いて開会

懇親会 午後6時～8時 宿泊(同ホテル)

定本 西尾 栞句集

橘高薫風・東野大八序文

B6判・248頁・布装上製本

頒価 30000円(〒340円)

柳歴六十五年 西尾 栞川柳の決定版

発行 川柳塔社

第20回 茗人賞(忌)川柳大会

と き 8月25日(日) 午前10時半開会
ところ ホテル・モナーク鳥取

(旧ホテル・ニューいなば)
鳥取市末広温泉町403

おはなし 黒川 紫香氏

兼題と選者(各題2句・午前11時半締切)

「二重」 橘高薫風選

「二句」 西口いわゑ選

「日本海」 恒松町紅選

「健やか」 小林妻子選

「手紙」 八木千代選

「ほくろ」 但見石花菜選

「エネルギー」 小林由多香選

会 費 20000円(作品集呈)

昼食は各自でお願いします

懇親会 30000円(希望者のみ)

投 句 投句料10000円(作品集呈)を

同封、8月15日までに左記へ

鳥取市相生町3丁目204 森田 熊生方

(電話 085712314672)

うみなり川柳会

恩徳讃

橘高 薫風

五月二十五日土曜日、たのしみなNHKの川柳選評がラジオから流れる。今日の課題は「煙草」、河内天笑君の声だ。

民主主義マッカーサーのパイプから

浅沼 清五

日本が負けたその月の三十日にマッカーサー元帥はパイプを咥えた軍服姿で、はやくも厚木飛行場に降り立った。その頃私は秋田の連隊にいた。

もう一個買ひ足して行く会議室

川口 俊定

ああ路郎先生はヘビースモーカーだったなあ、白い髭が黄色くなっていた。

そう思いながら私は家を出た。路郎先生の三十三回忌、霞乃先生の十七回忌法要をご遺族が一年繰り上げて営まれるので、四女梨里さんの嫁ぎ先の浄福寺へ行

くのである。両先生を知る近在の門下生十一名が集まり定期的に読経がはじまる。

導師はお孫さんの西村哲夫大師である。阿弥陀如来をまつる本堂正面には路郎先生の筆になる浄福寺の山号「天王山」の額が掛かる。一同は厳肅に焼香して両先生の恩徳を謝した。恩徳讃には「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報すべし」師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」とある。

席を替えて、ご馳走をよばれながらくつろいだ懐旧談に移り、おのずから小句会の趣へと変っていった。

麻生アート氏は、今なお父母に深い支持をして下さる参会者に謝辞を述べられる。氏とは五十年ぶりかと言ふ人もいて、タイムトンネルを抜けたにしている古い記憶も鮮明で、しめやかな中にもたのしい半日を頂いた。集句は私が選をすることになり、次の句を披露した。(掲載一句)

鬼灯のみどりは霞乃朱は路郎

橘高 薫風

雲の峰早くも三十三回忌

宮口 笛生

吉岡 美房
弱い者いじめ政府のお墨付き
小池しげお

春爛漫河内三山渡る鐘

藤村 女

いのちある句いのちある句と八十路坂

森下 愛論

掌のひらで折り畳まれて恙なし

西田柳宏子

汚れきる日本見下ろす雲の峰

阿萬 萬的

政治家を一喝しそなた師を思ふ

黒川 紫香

高速を出て山藤が美しい

大坂 形水

足踏みの背中へ鋭い師の叱咤

西尾美与子

待たされた頃の恋しい一周忌

西村 梨里

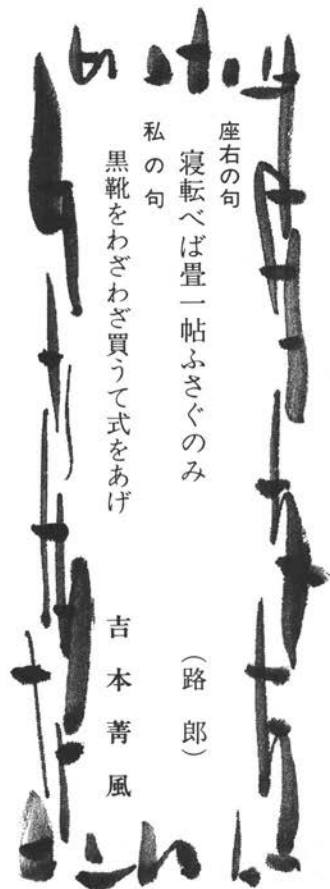
緞帳が下りずもたまたま生きている

麻生アート

尚富を地に積まんとすもんじゅの爐

西村 哲夫

寿無量を人間陶冶と言ひにけり



座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

私の句

黒靴をわざわざ買うて式をあげ

(路郎)

吉本 菁風

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 恩徳讃

橋

川柳塔 (同人吟)

自選集

川柳の群像 蛭子省一

古川柳 柳籠裏二篇研究 (三十二丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

大空のころろ (66)

渺湖抄

橋 高 薫風 … (1)

小 出 智子 … (2)

橋 高 薫風 選 … (4)

東 野 大 八 … (43)

西 田 柳 宏 子 選 … (48)

安 藤 寿 美 子 … (52)

木 村 あ き ら … (50)

橋 高 薫 風 … (75)

小 出 智 子 選 … (76)

橋

小 出 智 子

昭和五十年一月十五日、その頃としては画期的なカタチで、薫風主幹が「橋の会」を創られました。革新派の方々を毎月招かれて、川柳とはどうあるべきかというお話と、選をされました。その選者は月順に、時実新子・中尾藻介・定金冬二・森中恵美子・室田千尋・田中好啓・墨作二郎・伊東静夢・窪田久美子・寺尾俊平・堀豊次・海士天樹・前田美巳代の諸氏でした。当時はまだ三要素を踏まえた句でなければ、川柳でないように言われていた時代ですから、外部の柳社との交流は少なく川柳塔に新風を入れたいとお考えて、「橋の会」と名付けられたのだそうですが、その頃の薫風主幹の川柳への情熱を窺い知ることができます。

さて、その第一回の当日は、何時もの句会の雰囲気とは違っ中で、席題などできるはずもなく、こっそり会場を出て作句したのでしたが、正直言って怖かったという印象です。他社の方もかなりお顔が見えましたが、川柳塔からは、今は亡き牧人さん、酔々さんも出席されて、鬼遊・美幸・岳人・幸生・君子・夕花のみなさんの顔触れでした。緊張して出

茴香の花

「砂」

一路集「泳ぐ」

「入門」

初歩教室「煙」

各地柳壇(佳句地十選／柳葉鶴丸)

西尾 栗先生一周忌句会

六月本社句会

いずも70周年大会に参加して

三輪通彦さんを悼む

柳界展望

七月各地句会案内

■編集後記

八木千代選

田中 叶選

木村貴代子選

田口虹汀選

吐田 公一

宮崎シマ子

芳地 狸村

古川 喜美子

座右の句

氷囊の下から見てる好きな人

私の句

風鈴が見るな言うなと月光に

古川 喜美子

(132)

(131)

(110)

(109)

(108)

(104)

(98)

(86)

(84)

(83)

(82)

(82)

(80)

席した当時の句会を思い出しますと、胸の熱くなるのを覚えます。

「橋の会」の会報を繰りてみますと、当日の選者の話されたことを、よくこれまでにと
思つほどきつちりまとめられています。

時実新子氏は、人の話を聞くことは万冊の
書物に優る、会つて話せば誰方でも宝石を持
っている。これを盗まずして終るのは損であ
り、自分の持つてゐるものを皆さんに貰つて頂
かねば宝の持ちぐされだと話されています。

中尾藻介氏は、川柳の結論について「川柳
が一番むつかしいから三十四年間でやつて来
たのだ」と結ばれています。

定金冬二氏は、川柳は大衆のものだから、
庶民のものだから、かつこいことを言う前
に、自分のものだと言えるようにしたい。そ
して、自分の川柳に対して合掌ができるかど
うか、と話されています。

十五回きりの会で、私は七回しか出席して
いませんが、みんなが一生懸命であったこと
を記憶しています。どれだけのものを盗み取
ることができたかはさておき、普通の句会の
何倍もの勉強をさせて頂き、最も大切な人と
の出会いを頂きました。

先日、川柳大阪の句会で、昔体験したこと
を少しお話させて頂きましたが、編集部から
それをまとめるようにということで、その一
端を書かせて頂きました。



橘 高 薫 風 選

弘前市 肥 後 和香子

うわつと笑ってる 椿集團つてこわい

嘘ついた少年おたべ苺飴

酔い方に楷行草がある如く

おだやかな構図 そらまめ 缶ビール

感情を透き通らせる桜シャワー

じやれ合えば猫の眼となる君が好き

寝屋川市 北 岡 波留吉

出不精でよいの私の貯金帳

恵まれぬ人と明るいニュース聞く

えらいこつちや悪妻に嫁味方する

始発待つ客が水まく無人駅

何かある妻が黙って紅を引く

人間の資格を取ってボランティア

弘前市 高 瀬 霜 石

二死満塁ベテラン二人睨みあう

裏表なくて損する得をする

中の下が父に精一杯である

いい人に会った日 酒がうますぎる

八の字の眉に見事に敵が無い

万歳は絶対しない老母である

大阪市 板 東 倫 子

観光団にラクタイささかおかんむり (オマーン)

箒星消え紅海は砂嵐 (紅 海)

シシカバブー齧り洋上盆おどり (地中海)

スエズ静かすべては神の思召し (スエズ運河)

しがらみを解き残照の道を行く

呉市 榎田英詩

平和続く鳩よ甘えが過ぎないか
わつと夏 静々と秋 季は巡る

湯豆腐が奴に変わる季は巡る

丸い背に体験談が詰めてある

職退いた今日から妻の部下になる

コーヒーはございませんと言う茶室

島根県 堀江正朗

失敗も愉快に人生双六か

冗談を交え一役買っている

疲れても必死に闇と戦って

握手してこの温かき大切に

コシヒカリの艶が浮かばず噛んでいる

見えた日に戻してくれる伊勢神楽

出雲市 伊藤寿美

折り返し点まで虹が見えていた

苦勞した掌がふところに入れてある

バラ真つ赤 不倫の恋が煮こぼれる

母上様とある就職の子の手紙

助手席の妻が少々やかましい

風見鶏ハーフメイドの服を着る

京都府 稲葉冬葉

忘れたい誕生日だが祝ってくれる

少し太って初恋の人に会う

それは初夏 十年前の泣き笑い

婆の注意へ大人になれば直るとき

憎みきれない人から貰うシャボン玉

超越をしなされたのか座りだこ

大阪市 稲本凡子

一言を飲めば飲みこむことばかり

一人居で常に気合をかけている

年寄りに無理だと言うて怒られる

晩ごはん一番うまい午後十時

人間のあまさを見抜く蟻の列

貧乏な時は親類みな無口

和歌山市 堀端三男

生きている証のようにもめている

清々しい笑顔に秘めているフアイト

垣根越し寿命の話風薫る

真つ直ぐに歩く牛歩を恥とせず

哀しみを隠す爆笑だと知らず

鏡を磨く邪心が透けて見えるまで

藤井寺市 吉岡美房

声だけで若い美人と決めている

いい事がつづくふんざりつけてから

国民にくれる短い縄梯子

蘭鑄の悩み和金にあるスリム

迷ったらす眼薬を持って出る

不美人に痴漢のように睨まれる

富山市

酒井

輝

荒廃を確かに見てるカラスの眼

こんなにも質素に食べて越す白寿

ポケ電が戻れば冷えた椅子が待つ

過疎に来て働く汗を子と学ぶ

女の子だけにあぶないアンケート

孫と住み鳴らぬ時計に掛け替える

鳥取市

小谷

美ツ千

挑発に乗らないように上を向く

可愛いと言われ可愛くなる私

とても寒くてうっかり首を回せない

ささやきの森に聖書が落ちている

大切な貴男のために爪を切る

たんぼの綿毛に乗って師が逝くよ

大阪市

井上

白峰

繰り返す日々人生の砂時計

老いの夢はかなく消えた不況風

能力の過信 重荷を背負いこむ

言い出した口へ突刺す白羽の矢

根性と共に薄らぐ記憶力

備忘録書いて何処かへ置き忘れ

寝屋川市 堀江光子

メリーゴーラウンド古いワルツで回り出す

ワープロできれいに打った申し訳

父の手の温みを知った迷子の日

思い出に生きて静かな母の日々

足並みの中のわが足音を聞く

富山市

舟渡杏花

勘違いのまんま涅槃の蓮の上

万華鏡の中で老婆のコケティッシュ

うたかたの世や晩学の手暗がり

落花しきり そろそろ答え捜さねば

苦界とや螺旋の祖母の物語

砂川市

大橋政良

さくらさくらリュックに酒を入れてくる

どの指も自分の夢を持っている

ポケットは空っぽ貝にでもなろう

ピエロ死す遺産は笑いだけでした

極楽へつづく水平線がある

弘前市

蒔苗果林

野の花の清楚に悲し名も知らず

匂という顔した社員駆けて来る

言い訳がなくなり吾に返るだけ

この涙千金の味人知らず

友が逝き命貴くなるばかり

弘前市 斉藤 効

蕎麦の実を持って雀に逢いに行く

花時計一本ずつの善意です

復元の弥生人なり男前

蕾に送られて花に迎えられ

白無垢の父で静かに目を閉じる

弘前市 小寺 花峯

暑中見舞届いて北の虫が鳴く

古里で流す涙は溜れるまで

妻と子の喧嘩飛び出す換気扇

散り急ぐ桜に梅の苦笑い

極楽へ行けそうもない罪の数

黒石市 相馬 一花

一合の酒で一升分しゃべり

パチンコに勝っても妻に叱られる

鉛筆が珍しくなる講義室

乱れない酒に閉口する時計

心電図室から出ると不整脈

弘前市 佐治 千加子

雄子の肉いささかなれど旅の味

まだ咲かぬさくらの下の一気飲み

手櫛にて風ゆかしめて待つ言葉

低血圧ひらめの如く部屋の底

逝く春やごとりと山の水を飲む

弘前市 相馬 銀波

新食法 減反だけは網の中

足腰の強さを泥に試される

深呼吸 下手な言訳だと思ふ

並以下の答弁ゆえに騒がれる

にやりと笑い無責任ぶる無精髭

十和田市 阿部 進

やせ我慢そんなに続くはずがない

農継いだ子に恋人がやつと出来

眠れる夜 返して欲しい基地の街

駅弁を食べる楽しみフルムーン

山愛し山を尊ぶ山男

青森県 諏訪 柳々

女断ち それが仏というならば

ぐうたらが職場のうさに本気出し

竹割った心にもあるわだかまり

にわとりよ飛べない羽根でさみしいネ

知恵の輪を解いて無学が知れわたり

青森県 田中 叶

階段の下で一本ネジを抜く

紳士用トイレの前の未成年

手を振って少女中年別れたり

昼の月ビデオ屋にいる23人

鳩の糞乾いて過去のものとなり

青森県 西谷大吾

新緑の森は血潮を滾らせる

花散つて桜大樹が背伸びする

母の日の亡母の墓前に花林檎

水芭蕉吐くその息は夕霧か

衣替えてどの子もみんな優秀児

町田市 竹内紫鏑

マイクごと僧は合掌して結ぶ

銃もたぬ派と射ち方を説きたい派

電子レンジ ストレスはすぐ消えますよ

幾何三角より面白く詰め将棋

ワープロの故障で自適狂わされ

横浜市 菱田満秋

お天気を誉めて機嫌をとりむすぶ

猫の子の父は生れてからわかり

神様に頼った分は怠けとく

長生きを平均寿命の所為にする

鴉来ぬ日の静かさへ落着かず

静岡市 安本晃授

父老いて書齋でひとり句をひねる

深追いはよそうグルメのパンの耳

美しく生きよう鯉の滝のぼり

ニューモード所詮女の包装紙

仕合わせと書けば素足へ初夏の風

富士宮市 渥美弧秀

梅雨さ中 刻の流れに老いを置き

逝った友偲びしんみり独り酌む

味噌和えの蔀の臺よし老夫婦

梅雨晴れの男バツハに背を押され

わらべ歌も妻も茜の色となる

富山市 島ひかる

飛び石にされて石白 耐えている

動け動けと踏んだヤモリをじつと見る

沈黙へ蠅一匹が来てとまる

ひと握り撒いて雀にカメラアイ

置手紙 帰宅時間も書いておく

大阪市 津守柳伸

住専補填 数字にすれば読めぬ嵩

海老根蘭六本咲いている孤独

鯉のぼりドレスアップの山つつじ

確実に自分本位の使い捨て

ああショック診察中のポケバイ

大阪市 寺井東雲

私好きなら煙草と妥協しなさんな

客よりも店員多い宝石屋

結婚も離婚も近い顔に見え

楽勝をする時仲間入れてほし

商品の効能客に教えられ

大阪市 上田 柳影

大阪市 本間 満津子

母化粧 今日娘のお見合日
競馬場また携帯電話かかつてる

春愁や肌寒うしてひとり居り

吞めもせぬビール思わず舌鼓

吾が部屋でおのれひとりの罪の句座

大阪市 榎本 落児

連れ合いと言う言葉ありしみじみと

埴輪からミステリアスな旅に出る

ピアノスト自分の音に陶醉す

年寄二人 時計はいつも十二時だ

居酒屋へ総理よ顔を出してみろ

大阪市 西出 楓楽

考古学学び浮世を軽んじる

夏近し自縛の縄を太くする

妻の打つ釘が近頃効きすぎる

耳掃除 若葉の息吹き聞きたくて

負の遺産 親がいっぱいくれました

大阪市 河井 庸佑

横槍へ筋を通して渡り合う

信頼をしてると重荷背負わされ

安泰に慣れ気が付かぬ落とし穴

難題に即答したを悔いる日々

誠心誠意 努めて道を切り開く

立ち止まり今居る場所を考える

あんただけやと言われても揺るがない

強い人いつでも孤独かも知れぬ

まる裸だというてもタオル持っている

リラの葉のハート小さく晚い春

大阪市 神夏磯 典子

雨も良し忙しい友とキタで会う

税務署で頓智が動き叱られる

桜には勝てぬ写真をまたも見る

百度石 深い祈りに触れた艶

帽子掛け父の威厳が休んでる

大阪市 渡部 さと美

連休も孫にふられたまま終り

ミニスカート可愛いひざを見せてくれ

転ぶたび見えない石を拾て来た

母さんはゴメンネ輪ゴムほど便利

五十で入れた喝が六十入らない

大阪市 大塚 節子

思いとどけよ女の指が豆を剥く

猫の昼寝 蜆のように舌を出し

うたた寝の胸に句集がのつていた

黙念と描鉢の貝砂はかず

今日の幸 花と芝居と京の味

大阪市 玉置英子

わたしにはビールは薬かりん酒も

亡夫を見た合わせ鏡の奥の方

青い鳥近づいてきた羽音きく

老いて父 大和の茶粥こいしがり

赤銀黄みんな緑になる若葉

大阪市 清水絹子

人生の旅に喜寿あり雪月花

春うらら断わりなしに納税書

西瓜送るわたしもとても好きだから

車輪の下いつの間にやら孫の書架

旅気分最寄りの駅のモーニング

堺市 板尾岳人

好き なひと 一ぱい書いてある砂地

森の中かけ込み寺は見つからず

笑うのはいいが刃物を研いでいる

母になる覚悟が出来たカーネーション

湖の底に沈んだわらべ唄

堺市 中野樺子

十年日記そつと添えてる母の日に

寂しさも少しずつ過去 彩うすれ

一寸先ばら色なれと欲を持つ

思い出を掌にころがして夜は更ける

老化防止 緑茶 ココアといそがしい

堺市 桑原道夫

飛行機雲白し五月の空甘し

ベンチの乙女 風に颯られつつ読書

泉ありここより先の暗き道

鍵穴をさぐりぬ己が影の中

若者や胸に海草ぶつけ合う

堺市 吉本菁風

土ついた野菜のような所に惚れ

プライドが揺るぎ始めたリクルート

キッチンで家風を盾に小競合い

嘘つきへ化けて取付け薬害者

板長がテレビに出だし無沙汰する

豊中市 田中正坊

花みずき昔別れたひとは今

年金で一人あそびをしています

北国慕情 路面電車の走る街 (函館)

夜景眺めコーヒーを飲むテレビ塔 (札幌)

文学館 小林多喜二のデスマスク (小樽)

豊中市 安藤寿美子

左右 足前へ出るありがたし

何べんもかぶって見ながら帽子編む

折たたみステッキこつそり入れて行く

ぬるい湯にばんやり浸っている安堵

のがれ得ず帽子目深にかぶっても

豊中市 三宅 つえ子

池田市 岡本 吉太郎

春なればラガールを買う車椅子
春帽子少し気どった車椅子

桃さくら花にいのちの炎をもらう

額ずけばあふれる遠い日の想い

春の寺 手もち無沙汰の車椅子

豊中市 滝北博史

ちよっと一言言わせてが一時間

出したもの全部食べてるまじめそう

柏餅ちまき筆太に書く老舗

憎い雨 牡丹に傘をさしかける

まだ少し萌えるものあり初夏の月

豊中市 井上直次

往時茫々 万朶の桜未だ枯れず

結局は向いの桜一番だ

記憶にはないが思い出よみがえり

ゆつくりと咲きたい花を待つてやる

新しい紙に黒ぐる空と書く

箕面市 椎江清芳

土の香の好きな娘が嫁に来る

金婚に過去振り返る長い道

玉葱の芽が土間で伸び妻が病む

音もなく椿が落ちる計の知らせ

売れ残るりんご故郷へ帰りたい

足るを知りつましく暮す年金で

テレビ討論 上祐ばりの人ばかり

何時までもゆらゆらゆれる日本国

のびのびと育てた割にちやっかりや

長生きし何でこんなにしんどいの

吹田市 瀬戸 まさよ

友の逝く老父涙を隠さない

寅さんもさくらも年はあらそえず

保守的な男の妻の反抗期

子は無いが柏餅好きちまき好き

頼みごとあると灯明絶やさない

吹田市 茂見 よ志子

咲けば散る無常にこころ囚われず

あれからの事は問うまいもう若葉

酒飲めば息子饒舌楽しい灯

慕つてる医師は教授に御栄転

歳とって澄んでゆくのは上澄みか

吹田市 栗谷 春子

花の風お客となって待たされる

村人の頬の上気や壬生狂言

竿に降る雨もみどりのあたたかさ

コルセットにもなれて旅行をひたに待ち

折角の五月が寒い我も鯉も

吹田市 古川 喜美子

大切にされて一人の広い部屋

この帯を締め美しい過去がある

面影を追えば桜の五六片

鈍行にしましよ雨風強いから

金持ちに飼われた犬は忙しい

吹田市 山本 希久子

母の小川にもう帰らない笹の舟

進退へまず一杯の水を呑む

男なりこの盃は断れぬ

直線ばかり書いて年輪刻めない

野良犬も等身大の夢をみる

茨木市 井上 森生

若葉風お腹いっぱい吸い込んで(Nさん懐妊)

難聴の母 夏場所を大画面

老いの意気パソコンでやる「超」仕事

昇る陽に燃えてイオンの風薫る(T先生受勲)

風雪に耐えて二人の若葉浴

茨木市 藤井 正雄

山焼きの煙の先の塔を指す

手短に話し終って酒にする

価値観の相違か耳を貸しもせず

先生の病室手紙束でくる

代理出席 重い靴履く午後の雨

高槻市 川島 諷云児

友送るいずれ我が身の余命表

常識の程度疑う言葉尻

無為徒食こんなに辛いものだとは

金は魔物 男も女も狂わせる

ロボットもやがて過労死するだろう

守口市 結城 君子

「お早う」と天気をもてる旅の窓

熊楠の旧家 外からのぞかれる

きょうだいの旅に杖の数がふえ

思い出いっぱい入れてつぶれた古かばん

晴天なり二泊三日を祝ってくれ

寝屋川市 柴田 英千子

母の日は鈴蘭咲いて満ち足りる

白樺の絵を買うお手頃な値段

甘夏の里の絆に癒される

黙祷の目が一分で開かない

ボランティア キラキラ星の唄おぼえ

寝屋川市 江口 度

てくてくマップめくってる五月晴

黒髪ふさふさコーヒーはアメリカン

大都会だんだん星に見放され

早起きの息子朝シャンするため

くもの巣を張りめぐらせている教祖

寝屋川市 平松 かすみ

マイカーは苦手 大地で深呼吸

花の首チョッキン お料理出来ました

大根が憎いわけではありません

雨の日の対話 鏡の中に亡母

そよ風を送ろう寝たきりの背中

枚方市 八田 敏

時計などなくて困らぬ日が続く

隣席が東京駅までしゃべり詰め

旅疲れすぐには取れぬ年齢となる

意地張って弱音は吐かぬ妻の世話

構われぬ犬いじらしく芸をする

枚方市 前 たもつ

菜園を横切る猫に夏の影

眠れぬ夜 恩を数えて指を折る

いじめ対策まずは教師と言うてはる

意気地なし薬を飲んで呑みに行く

ボランティアの汗はさらっと乾き出す

枚方市 海老池 洋

老いるとは悲し 私のフロッピ―

埴輪らもまどろむ春の考古館

白檀の風半分をくれた女

風止んで頭を冷やす鯉のぼり

桃さくら菖蒲と移り行く平和

交野市 福崎 しげお

参観日 孫の外面 垣間みる

皿洗う若者夢は果てしなく

洗濯機言うこと聞かぬ妻の旅

傘の陰 情眠食る大八洲

それからの一語に耳をそばだてる

東大阪市 森下 愛論

春の恋飛んで来いよと窓を開け

生きているリズム変わらぬわが掟

丙午 事務所の隅にツンと居る

思い切り羽目を外して美酒に酔い

ひとり旅 酒とビールは三人前

藤井寺市 田中 透太

父の貨車だんだん軌道狭くなる

時々力んで見せるあばら骨

またしても うかつなことで途中下車

うしろ姿は男ざかりを過ぎている

いい時に来たと荷物を持たされる

藤井寺市 高田 美代子

乗り物酔いが続いてわたしらしくない

ふり向くとだあれもない午後の夢

少し太ったねと水着が囁いた

猫抱いて男を信じないことに

涙腺の弱い悪女と飲んでいる

藤井寺市 福元みのる

人偏にすべきでないか狡いの字
ライバルが彼だと分かる熱い視線
国どうし手を結ぶにも餌が要り
亡母の日記 落丁もありカナ混じる
買い替え得が修理節約嘲笑う

松原市 小池しげお

戦陣訓 忘れたいけど覚えてる
白黒は女が決めることでない
嘘ついて母を安心させている
仁王さんの素足のあたりから卯月
老人の本音 飴玉なめながら

松原市 玉置重人

余命いくばく靴音を高めんか
此の国も満更でない燕来る
数え唄やがて私も地に還る
聞く耳を持たぬと血圧が上がる
来年も元気で会おう合言葉

羽曳野市 吉川寿美

藁ひと筋 明日の命と真向き合う
効き過ぎる鎮痛剤が恐くなる
梨の芯 女が泣くとかぎらない
眸を閉じて罪の一つを唇に
無言劇 母の涙をみてしまふ

羽曳野市 榎本吐来

諦めの妻の素顔に惚れ直す
表札の文字プライドを臭わせる
自慢話の一つに年金所得税
飽きもせぬ古稀のど法螺に脱帽す
そのうちの話に妻は乗って来ず

八尾市 宮西弥生

火にもなれず水にもなれずひとりいる
元気の気うまくつかっている多忙
さわやかな五月 土に生き人と会う
のんびりと津軽三味聞く北に春
トップの座おりてゆっくりした笑い

八尾市 高杉千歩

昼の風呂 泡と遊んで愛燦々
七十と書いて見直すパスポート
迷うてるうちに半額セールすみ
うちの娘に限ってという終電車
プレゼントなんでなんとしつこいな

岸和田市 古野ひで

会える時 会っておきたい同窓会
ほどほどの摩擦があつて仲がよい
飽きもせず毎日お米研いでます
雑音は世の常のこと聞き流す
どの花も優しすぎます気の弱り

岸和田市 寺田 甚一

岸和田市 田中文時

子が赴任してアメリカが近くなり
子の電話ときどき時差を忘れさせ

砂を噛む政治 住専無責任

携帯電話大流行でばくも持ち

いまラジオ聞きながら族しています

岸和田市 芳地 狸村

常夏の国に暖炉が生きている (ハワイ島)

バンヤンの木陰で競うアーティスト (マウイ島)

ハワイアンソングで陽気な舟遊び (カウアイ島)

潮吹き穴に魔物が住んでいる (")

甘い香が街に満ちてる蘭の島 (ハワイ島)

岸和田市 高須賀 金太

墓参すませて何となく落ち着いた

パズル解くあなたに好かれようとして

ちぐはぐな夫婦で離婚考えず

夕刊を読む三時のおやつ食べながら

遠くから見ているだけの富士でよい

岸和田市 岩佐 ダン吉

バランスに気配り僕が消えていた

二回だけコール母さん元気だな

飽食の列島餓死の記事はしる

誤ちというけど基地のある限り

九条よ光れと僕は叫びたい

盲腸のような存在定年後
年齢の割には酒税納め過ぎ

旅帰り大阪弁の柔らかさ

死ぬことも話題に入れて茶を啜る

あつさりと初心くずれる万歩計

和泉市 西岡 洛醉

一日の思案に画布は白いまま

静寂を我が物顔に昼の月

三寒四温 制服の胸ひるまない

四季巡る男の顔にある余熱

水温む母の心は青に溶け

富田林市 池 森子

母は原点たとえ鬼神であろうとも

比べると泣き出しそうな青林檎

キーマンは放浪癖のある男

太陽の死角で転ぶことばかり

花びらを散らして花の子を宿す

富田林市 片岡 智恵子

髪型を変えると弾む妻の毬

詫びにきて正座くずせぬまま帰る

冬と春 夏も同居の日本国

不利になる情勢 言葉数ふえる

男と女きれいな嘘に酔わされる

大阪府 八十田 洞庵

生き残るための缶詰置いてある
まっ白な紙にまさかが書いてある
茅葺きの里せせらぎに沿うくらし
おみくじの凶を二人は笑い捨て
先祖には一揆の塚に一人居る

尼崎市 春城 武庫坊

時計屋百年亡父に見せたい黄の褒賞(舎弟欣二 黄綬褒賞を受く)
桜吹雪の絵を並べたら夏が来る
モネの絵を飾って蝶を待っている
眼鏡外して緑の風を確かめる
風に乗るこつを憶えたブーメラン

尼崎市 春城 年代

足の指 手の指 老いが潜むなり
青嵐ぞんざいに茶をつぎこぼす
里の茶摘みで亡母は新茶をおみやげに
亡き友の才能惜しみさみだるる
庭古りて みつばつつじの明るさよ

尼崎市 田中 薫

薫風や放置自転車トラックに
川流れいちにち夢の風船
わたしが先に死ねばと言う五月の林道
蝶の死や笑い仏の膝下に
壊れそうな球形 海を見ている

西宮市 門谷 たず子

身近すぎて古い宝を見過しに
仏壇をあげて亡母にも見て貰う(新居)
昨日までの眼鏡は捨てて子と暮す
二世帯で住んで吠えない犬を飼う
二人三脚だんだん歩幅せまくなり

西宮市 亀岡 哲子

まだ知らぬ子の住む街を見るテレビ
あさひ色に開く初咲き芥子の花
誰も知らぬ滝でだあれも見えない虹
水族館の蛙 月夜も唄えない
いよかんを剥く親指にある若さ

西宮市 奥田 みつ子

そぞろ歩く仁川 武庫川 水ゆたか
友来る 扉をみんな開け放つ
大胆に見えてもわたし女です
梅雨晴れ間 あまりカリカリするでない
シャボン玉はじけて自閉児が笑う

西宮市 牧 富喜子

北窓に一瞬の赤 春の暮れ
取るに足らぬ事だったのかけつまずく
まだ何かわからぬ中の夕日かな
わたくしにもう一人いた兄と会う
思いがけぬ人から電話世は楽し

新築のエレベーターは新車の香
西宮市 刈田泰司

新米へ値段と味の食べくらべ

新雪のような新米届けられ

新築へ詫びて据え置く古簞笥

手術の日 快晴だった日記帳

西宮市 秋元てる

人見知り北の桜は未だつぼみ(帰郷して3句)

郷の川 河童の噂もう聞かぬ

離婚歴 手を焼いた娘が取りしきる

大声で泣く赤ちゃんを見なくなり

子は宝だった昔がなつかしい

伊丹市 榎谷寿馬

腹黒い鯉など居らぬ五月晴れ

紅い鯉ばかりで元氣母子の家

終戦後いくさが増えて来た地球

台湾は昔日本の領土なり

桜から緑へ変る同じ窓

宝塚市 吉田笑女

同居して声にはならぬ老いの愚痴

なつかしのメロデーー老母も口ずさむ

季がわりに又引きそえる姑の風邪

嫁姑 愚痴もお互いひかえ目に

もう八十まだ八十の意気盛ん

平凡な道は好まぬトーションズ

捨てられぬ片方なくすイヤリング

居るだけでキラリと光る人だった

スイッチオン 融通利かぬ全自動

自らに課した掟の中で住む

宝塚市 中田純次

函館港 船に身体を張った父

水葬の渦へ汽笛を引揚船

宇宙海羅針盤なき地球船

お見合いは妻の実家の池と鯉

嫁ぐ子の支度にとつと般若経

宝塚市 嵯峨根保子

ひざ許が淋しくなつて猫を飼ひ

妖しさに夜ざくらの道さけて行く

悩みある顔とは見えぬ花の下

団塊の世代が威張り出してくる

手の土を払つて春の風と会う

加古川市 吐田公一

子の話 三方に聞く母の耳

正面を切つて正論弾かれる

再縁の話切り出すタイミング

ばあさんと呼ばれ言いたいことを言い

救われる注射と思うたのにエイズ

相生市 中塚礎石

寝返れば枕ひとつの夜は闇
修羅くぐり抜けて羅漢になった顔
縄のれんくぐればみんな別の顔
寝たきりの肩にしつこい借り一つ
暇人がゆっくり手間をかけた味

京都市 都倉求芽

資本主義脱皮 大資本主義日本
預金証書 隸書の重みなくなった
絆少し緩めたい 喪服脱ぐ

野花摘んでさて包むものがなし
どんな名で呼ばれても野良犬尾を振って

奈良市 天正千梢

気持たしかめるために消すランプ
新しい芽出ました穀つけたまま
国病めど春には桜咲きほこり
病む国と思いたくなしピアスの男
胸張って言えるものなし七十五

生駒市 北山悟郎

前向きに心は常に燃やしてる
心に剛がのさばりて困らせる
人生は悲喜の鎖に縛られる
ベテランの背なにその他がおんぶされ
白鳥が日本の心とらげる

大和高田市 岸本豊平次

今のままでは今のまんまで七十歳
定退がやつと吾が家に座る場所
怒られたママを離れぬ泣きじやくり
自慢ではないかと断わり孫のこと
五月晴れ緑に映える花の色

奈良県 上田翠光

南京虐殺 虚妄のままに過ぎてゆく
早よ死ななあかんか医療費きびしそう
夫婦別姓 家庭破壊の事始め
夫婦別姓いやな日本になってゆく
いつか子もいらぬ女になってゆく

和歌山市 牛尾緑良

水音が絶えない故郷の便り
終着駅まだまだ海も山もある
黙々と行く雲の下ただ明日へ
ペンペン草だったと知らずなずな咲く
優しさもわかってほしい鬼あざみ

和歌山市 山田高夫

見納めと毎年言っているさくら
潮騒の音ひく後のひとりぼち
ふくよかな菩薩に女ふと匂う
先ず値踏みされて団体様お着き
真ん中で写真を撮ったことがない

和歌山市 池 永 正 雄

元気ねと声掛けられて年思う

こんな夜は慰めになる通り雨

ビル街に意地だけ残す古のれん

タバコ屋の角を曲がれば旅となる

忘憂とはまこと結構酒を酌む

和歌山市 青 枝 鉄 治

政治家に法の抜け道教えられ

政界の謎ときさせぬ多数決

失速のピンチもあつた夫婦独楽

情熱家などと言われて手が抜けず

若い娘に三枝の札が通じない

和歌山市 福 本 英 子

春や春 石の腕輪も出る古墳

心青天わたしも花も水不足

尖らせたペンで書いては疵がつく

仏壇の夫へ銀行百年史

愛しさがつのる一周忌の集い

和歌山市 桜 井 千 秀

入試就職子から孫へと続く絵馬

好きなこと問われおしゃべり止まらない

一步譲ると野良犬胡散臭くみる

絵に描いた餅を過小評価する

効能書き通りにゆかぬ痒み止め

和歌山市 宮 口 克 子

信じれば赤が黒にもみえてくる

ひねひねやお尻ペンペン懐かしい

風雪を越えた男の渋い笑み

考える余裕をくれた庭の石

庭石もしつとり濡れて差し向かい

和歌山市 田 中 輝 子

鎮めるものしずめ滑らか筆の先

夏へなつへとわが人生は膨張す

雨上がり女の眉も澄んでくる

ようやくに山坂越えたらしい文

風風ぎの浜で心底淋しかり

和歌山市 細 川 稚 代

恩師の忌バラ一輪が咲きました

もめごとが嫌いで甘酒飲んでいる

他人から見ればなんとかわわれそう

黙っていよう青い螢が飛ぶ季節

ブランドを買うて高鳴り静めてる

和歌山市 木 本 朱 夏

指さびし忘れな草の青よりも

鳥籠に戻るころに痣つけて

黄金週間わたしの靴が微びている

春は臍に男もすなる長電話

私を泣かせた人が咲いている

菜の花畠で 突如抱擁

和歌山市 福井桂香

わたくしも李白も酔うて詩をつくる

長男の家に泊ったことがない

パンを焼く匂いの中で聴く小言

ハンカチにアイロン掛けている平和

和歌山市 堀畑靖子

ゆでタマゴみたいに変わらない暮し

巷では黄昏離婚増加中

緊張と緩和とどよい夫婦なり

子に語り継ぐテーマなら持っている

流行の話題は知らぬ自在鉤

和歌山市 榎原公子

栄光の日々まばたきに似てはるか

雑草を抜くと孤独が滲み出す

悪びれてみてもせいぜいワンカップ

好き嫌いそんな昔があったつけ

母の日だいつだったつけ父の日は

和歌山市 岩本美智子

新しい空気をいれる朝の耳

昼と夜と二つの顔を生きている

花いっぱい飾る一人の昼ごはん

赤人の愛でた浜辺でバーベキュー

都人恋う乙女らをオブジェにす

(和歌浦万葉の道にて)

後ずさりしたことのない蝸牛

敵よりも仲間の動き気にかかる

いじめ除けのお守り売っている神社

執行猶子付きで許してくれる妻

論客は泥にまみれたことがない

和歌山県 西口忠雄

あるとこにあった原因不明金

試着室でおっさんおっさんこれなんぼ

応接間ずらり自慢を並べたて

あと一枚脱げば大金ころげ込む

妻のおなら大きくなった倦怠期

岡山市 時末一灯

子に乗せたドロぶね海を渡りきり

優越感充たして帰る見舞い客

相克の果ては疲れて眠る愛

うなずいてくれても視線窓の外

先のこと読めだし社長らしくなり

岡山市 花田たけ志

直線の気質を円で受け止める

見え透いたいたずらまでは許される

明日の夢いたずら好きに賭けて見る

半生の作文 誤字が多過ぎた

核心はばかして辞任をする社長

倉敷市 小野克枝

出合いひらめき沈まぬレモン持ち歩く
快復の知らせ届いた縁の月

手垢のついたポケットベルに拉致される

声にして言えぬ最期のありがとう

湯舟ざわついて六十路の同窓会

岡山県 二宗吟平

花が散り雪洞惚けたように枝

野草展まねて雑草鉢にとり

シャンペンでシャカの実まれの孫祝い

花の下 花見の宴に引き込まれ

帰ったと燕 頭上を懐かしそう

岡山県 小林妻子

三十年手塩の山へ雪害よ

長男のらしさへ一步譲らねば

寒の七水豊作だとはかぎらない

食うだけの事と思ふ足跡よ

父の日は半袖ばかりもいらいます

岡山県 荻野 鮫虎狼

香煙に女の祈りまだ続き

邦人の顔ばかりなりグアム島

お料理の塩少々に迷わされ

振向けば妻だけが居る人生譜

ブランコの男優しい風になり

岡山県 大石 あすなろ

バイキングすこうし欲を盛りすぎる

ミスマッチばかりしている凡夫婦

愚痴るまい積んだ苦勞が泡になる

七拍子 父から届く応援歌

ルール変更やつと覚えたことなのに

岡山県 江口 有一朗

八万四千の毛穴浄める一人風呂

話術より話実心を温める

人間を拝んでくれている菩薩

つまりてハッと気がつく傲慢さ

日々新たな教えてくれた庭の花

廿日市市 林野甦光

恋と言う字を鵜呑みしたおさな妻

不気味な平和で続いている平和

バッテンとおまへん止り木で出合い

飽食で犬も尻尾をもう振らぬ

手を握り返され男だらしな

竹原市 森井 菁居

頂上を目ざす旅路は修羅ばかり

格言の重みを知った曲り角

夜は来るカーブ勝とうが勝つまいが

入籍の日の太陽が輝きぬ

別姓を模索している倦怠期

友情を形にすると楕円形

メガネはずして時を稼いでいるのです

花の章 今折り返し点に立つ

もらい泣き半分安心するため

沢庵をしつかり噛んで朝を出す

竹原市 岩本笑子

竹原市 古谷節夫

還暦を祝ってくれた二合瓶

油さすようにお酒の世話になり

自分史を墨で消された時もある

履歴書が沈黙守り以下余白

万歩計 孫の歩幅に負けそう

竹原市 時広一路

生きて来た道にもあった信号機

浮雲の一つに欲しい僕の椅子

ピンボケの顔も交じった多数決

お地蔵に自問自答を助けられ

旅土産 違う土地から同じ品

竹原市 石原淑子

吹けば飛ぶ種の偉大な力なり

雨上がり生命力を足元に

平常心 五十の朝に誓うこと

のんびりの私に時間容赦なく

散ってなお愛し続ける花むしろ

鯉のぼりとっても大きな空がある

子も孫も田舎に居ない鯉のぼり

遠き佳き時代にひたる古本屋

見もしないテレビをつけて留守ひとり

本心を言おうか笑うてごまかそか

広島県 藤解静風

宇部市 平田実男

良妻で賢母と妻は思うて居

美しくそして汚い札の束

間違えたほうがぶつぶつ言うて切り

先生のほうのいじめも未解決

二人三脚あちらも夫が引きずられ

美禰市 安平次弘道

サバイバル椅子がだんだん減ってゆく

しがらみを抜けるとそこは海だった

均等法 女どこまで強くなる

見送りはよそう惨めになるばかり

その先は黙っておこうミシン踏み

下関市 石川侃流洞

誕生日妻と同じで味気ない

変り身の早い男が読む打算

禅譲の美德強調して落日

程々にするほどほどに思案する

薬包紙の鶴飛び立って退院日

鳥取市 春木圭一郎

会長の腰の低さにまたはれる

腰抜けと言われつついつい朝帰り

腰かけのつもりがいつか主となる

犠牲者にやっと重たい腰を上げ

腰のあるそばに迷わず三杯目

鳥取市 両川洋々

カナリアの死から日記が埋まらない

これ議員やつぱり賄賂もらったか

金が湧く夢を住専見てたのか

気まぐれとあなたの背なに書いてある

へソ出しのルックは美人なら許す

鳥取市 美田旋風

過去は過去 進軍ラッパ吹いて行く

放つといても芽を出す花のタネをまく

流れにも丸くならない石がある

DNA調べられたら嫁が来ぬ

東西南北 栄転の名で飛ばされる

鳥取市 岩原喬水

世渡りが下手で裏道など知らぬ

普通では駄目だと塾を梯子させ

春うらら連休粗大ゴミになる

母になる知らせ電話の声弾む

倦怠期 口実などはいくらぬ

倉吉市 米田幸子

無料だときけば危ない舟も乗る

新年の抱負に絵馬も加勢する

持ち駒になって主の仇を討つ

荷を下ろす終着駅がもう近い

尻尾振る男を何故か笑えない

倉吉市 野口節子

感性が豊かで傷の絶えがない

決心がついたか海がないで来た

年金で翔べる範囲だ底が知れ

許す気はあるが白紙とまでゆかぬ

み仏は許す姿で立っている

米子市 石垣花子

焦るほど頭もペンも固くなる

焦ることやめ矢印について行く

堂々と女 指揮棒振りはじめ

数々のつぶてかわして独り住む

使い捨てて紐の力に気付く独楽

米子市 政岡日枝子

子を産んでアカ鮮やかな赤になる

座ブトンが温いふたたび呑み直す

又ひとつ吠えねば雨が上がらない

赤い残照 働きすぎたなと思う

掌の中にひとりの海を握っている

米子市 金山夕子

ボランテア自分自身のボランテア
スカーフに緑の遊び乗せている

いいじゃないのみんな必死で生きている

先達が逝く母が倒れる同じ日に

「とみさん」と呼ばせて頂いてひとり

米子市 澤田千春

人の世の節目節目にある扉

風呂敷に昨日の祭り包みこむ

竹笛の穴から父のわらべ唄

幾度か温顔さがす雲の峰

泣いて笑って今日も米とぐ芋を煮る

米子市 野坂なみ

半世紀ついに節目の弓を射る（沖繩）

お下がりの塩は誇りをもっている

気力湧く棒が撓んできたようだ

まだ少し手を貸す旅でありがたい

おえら方の帽子のサイズ小さくなる

米子市 林荒介

木を植えて置く世紀末の理念

仏壇と話し続けて来た戦

湧き水を汲む千年の重さ

神さまに頼み仏さまにも頼む

風船に乗った春陽の乳母車

米子市 林瑞枝

想いはるか帽子揺らめくちちの森

秀吉に出会ふ思いの桜の樹

陽溜りを走るキリンの細い脚

風紋の足跡いつか絵になった

絵手紙を小宮にはるか師を偲ぶ

米子市 茂理高代

淋しいと思えば花が散っていた

憂いなどは牡丹咲かせて捨ててゆく

草萌えて天一色の心なり

糸の無い風でも夢は見たいもの

酔うほどに溜った涙炎え出した

米子市 寺沢みど里

樹々萌えて庭も多弁になってきた

大波小なみ海は豊かに脈を打つ

おもわくの外れた弓の置きどころ

漁火の中のひとつに亡父を見た

陽を生んだ数ほど海は強くなる

米子市 光井玲子

出揃った新芽それぞれ自己主張

息ころして花のささやき聞いている

背く子の心の奥が覗けたら

約束通り雑草で生きている

潮どきを逃がしだらだら坂下る

鳥取県 土橋 螢

すこし依怙地に雨降りの草を刈る

肉買つて戻る親父の魚好き

癌でないように検診受けにゆく

記憶また曖昧となる杜若

万緑に生かされてゆくこのいのち

鳥取県 土橋 はるお

空けてある椅子は天下りが座る

課長の椅子を指指して見ても一つだけ

筍を大阪弁が掘っている

ピチピチと泉で白い女になる

坊さんの話 真面目に聞きすぎた

鳥取県 谷口 次男

しばらくはジェラシーよ眠りなさい

稲妻が御前会議を左右する

賽銭を上げた途端に後光射す

黒幕の目は見物のそれでない

坊さんと坊さんが会うカラオケ屋

鳥取県 岩崎 みさ江

誰一人乗らないバスがひた走る

躓けばドミノ倒しとなる家族

手を合わす私の無力を悟るとき

愛憎の落差が産んだつむじ風

緑を食べて紋白蝶となる不思議

鳥取県 乾 隆風

友だちに誘われ不精ひげを剃る

住職もやはり刺身をめしあがる

整えたはずのあいさつ出てこない

百歳へ七十三段目を登る

雑草の仲間にもなる地蔵さま

鳥取県 羽津川 公乃

両の手で掴んでみたい風みどり

背伸びした杭と知ってか無視される

母さんの機嫌が悪い辛い味

老兵に日本守った自負がある

蛇口二個 一個は山の清水引く

鳥取県 石尾 かつ乃

花時計 花のおしゃべり聞き飽きる

姑さんの気まま許して恙無い

八起き目の幸せ土に感謝する

ストレスの重さを計るのは自分

決心がつかずひたすら回り道

鳥取県 西原 艶子

見た目にはきれいが怖いものを知る

慌てたら化け損ないの卵焼き

装身具つけず毛染めもしない主義

ひとときは空気になって様子みる

偏差値で光り税があらがない

鳥取県 黒田くに子

お早うに答くれそう夫の墓(夫三回忌 四句)

念珠くる たましい届くまでくる

向き合つて仏も和むお灯明

野球中継 亡夫が居なくてつまらない

魂を抜かれた顔で良く笑う

鳥取県 さえきやえ

あわれみの言葉にひよいとのせられる

だまされていると知つても笑い顔

おろかなことを聞いて度胸がすわりだす

ことしまた なんじやもんじやの花を見る

花つくり 一芸としてたいせつに

鳥取県 石谷美恵子

運のよい人だと努力認めない

行く先は駅をはなれてから決める

忌は巡り義姉がだんだん若返る

謙遜の不肖あちこち痒くなる

人間が好きで完璧には遠い

鳥取県 上田俊路

万葉の美女の化身かつつじ燃ゆ

腹満ちて神も仏も眠くなる

失つて親父の傘の広さ知る

躓いた思い出今を支えてる

記者魂忘れニュースの芸能化

鳥取県 林露杖

母の日の亡母に供える杜若

ちぎり絵のいろ紙買つてそのまんま

健啖に時々妻が待ったかけ

少子化にうちも噛んでる嫁がない

海外へは軍用列車で行きました

鳥取県 新家完司

パンを焼く店さえもない僕の町

植林の山 秀才の顔に似て

スナック「きまぐれ」今夜は開いている

この店のママと飲んだらいつも雨

僕の寝顔をチャルメラが覗き込む

松江市 舟木与根一

算術の域で金運ものにする

膝痛に老妻の座り胼胝が泣く

古希越した田植え機曲りくねり出す

田植え終りその心は五月闇

鯛焼きが美味い言うた夜 大往生

出雲市 尼れいじ

想い出の中でふつくらコッペパン

夢で見る貴女はたしか五十キロ

梅雨だろか山が少しずつつ動く

十年の長さ短さ子の育ち

信念が転がっている四畳半

出雲市 久谷 まこと

吹き溜まり善玉ばかりとは言えぬ

いもづるの先は皮肉な無一物

爪切つて昨日の夢をもう追わぬ

更衣 歳は取らないように着る

寝てる子に親の勝手な設計図

出雲市 小玉 満江

暦では立夏ストーブ消せぬまま

町内に東大生が出た誇り

鼻欠けたお地蔵さんに春の風

遅い春 神経痛をもてあまし

若芽立つ僕と私は手をつなぐ

出雲市 吉岡 きみえ

親馬鹿と子馬鹿を笑う友といふ

世相みなのみこみ泳ぐ鯉のぼり

愚痴を吐く顔には見えぬ花の下

春だもの一二三とてび起きる

歟だこの指で鉛筆もつゆとり

出雲市 園山 多賀子

浮き足になりそう踵地につける

価値観の差を大胆に割り切ろう

返さない島と帰らぬ娘の思慕と

泣けもせず涙は涸れてつくねんと

かごめの輪 誰でも入っていいですか

出雲市 竹治 ちかし

石積んだ人の名はなし城残る

湧き水もいつか都会に出て濁る

雪残る過疎は無口で春を待つ

ホテルでは都会の顔で眼を覚ます

変わらない動きも今日は五十歳

出雲市 岸 桂子

スタイルは拔群ながら出雲弁

母ありてこそ古里に迎えられ

母の辞書 愛と耐との字で埋まる

花の香を残して去った霊柩車

胸の中 化石となった人がいる

出雲市 小白金 房子

ハウス苗 出れば薫風 地の匂い

わらび狩り牛も近寄る牧の風

作業着が似合つて光る畑仕事

兄嫁で生きるわたしの農日記

お手玉の布が色どるかぞえ唄

出雲市 板垣 夢酔

泣くよりも思いだすまい過去のこと

納得がゆかぬが裁く策もなし

吠えられて酔いどれ天使酔いが覚め

泣きに來て負けるでないと叱る波

あす頭痛するぞと徳利心配し

出雲市 石倉 芙佐子

やすらぎの里で見初めた花筏

無口から撤退してる日曜日

じよんがらの本場へつづく青い空

菜の花もばんじましてと日が暮れる

人見しり未だ直らぬ山育ち

島根県 西村 早苗

散る桜もすがりつく眼をもっている

めだかの小川に靴下を脱がされる

酔うて候まだまだ若い胸を持つ

お雛さまの指が抜けてる笑ってる

バス停がお寺の前に出来ました

島根県 小砂 白汀

首かしげこれでいいわとチューリップ

どうなるか関白宣言してあるが

そうですか連休ですか小企業

ウルトラマンこんな時こそ出しておくれ

無念なり孫の扶養家族とは

島根県 藤原 鈴江

幸せの意味が判らぬままに老い

ここへ来て人生観をちよつと変え

病得てやつとわが齡思ひしる

うつつつと想えば悲しさだけ残り

五月晴 暗い心を陽にさらし

島根県 堀江 芳子

寝たきりもヘルパーさんもいる同窓

胸張って媚びぬ笑顔で生きていく

小さなこと忘れず感謝されていた

若さっていいな ぴちぴち音がする

故郷に雲と流れていく追慕

島根県 松本 文子

ひらひらと落ちていければ本望だ

あねいもうと幾つになつても姉妹

遠景の山はいつでも暖かし

気がかりなことだが人に話せない

人よりもきれいな夢をみる金魚

島根県 佐々木 鳳笙

黒髪も乳房もいのち仕舞い風呂

葉桜もいいなと老いた妻と行く

振り返る話ばかりでお茶が済み

喉仏ヒクヒク髪も目も女

ダイエットここで崩したバイキング

島根県 榊原 秀子

山里の燃える若葉に身を包む

報告を今日も待ってるお人好し

百足一匹ハッシと殺す今日の罪

勿忘草わたしの外に誰も見ず

いい眠りどうぞ下さいお月様

香川県 池内 かおり

悪口を言わぬ声だな良く響く
肅々と木立の中を伊勢参り
長旅を戻れば草も樹も溢れ
すれ違うのに都合良いパラソルだ
電話口ヒソヒソ話になって来た

香川県 成重 放任

ダイエット決めたがあした明日から
疑いの翳再診で安堵する
桜狩り記録破りの雪の中
うぐいすの初音に勝る産声ぞ
腰を踏む孫もそろそろ重すぎる

松山市 白石 春嶺

箱庭の橋はつまんでそつと置く
一服の清涼剤になるコラム
路地裏に住む善人の面倒見
出直しの舵は後ろで妻が取る
病室をたびたび見舞う示談金

西条市 片上 明水

春帽子 遊び疲れたまま仕舞い
花の候 草も負けずに咲いている
噴水の高さを人の出に合わす
こんな靴 間違えられた花の酒
葉桜の下をゆっくり車椅子

今治市 越智 一水

山崩すそんな文化はありません
目の色を変えよう世の中狂ってる
墓地の中歩くも楽し春よ春
他人の空似 亡母と道後の湯で出合い
愛人は孫ですばけてなどおれず

今治市 矢野 佳雲

切れ味はわからぬままに古刀展
人間に遊びのほしい川蛇行
人もアリも飢えが怖くて休めない
刺戟のほしい凡人カレーなどいかが
セメントで野仏の首つながれる

北九州市 梅田 宣司

余命表 妻よ喧嘩の暇はない
年ほどの老化と医者は軽く言う
わだかまり解けて一気に栓を抜く
白旗ばかりかかげ夫婦仲がよい
君が代も国旗も軽い国になり

唐津市 仁部 四郎

正直を家訓校訓社訓説き
ごまかしてなくて芸です寅が売る
大将と呼べばラーメン熱くなる
逆説で言えばおカネが縁結び
校長をどきどきさせる記者のペン

唐津市 久保正剣

札束の嵩に比べて薄い刑

止り木でおとこ男になりたがる

漢字では少し淫らなおみなえし

平均寿命一日二食で生きている

住専を肴に雑魚の屋台酒

唐津市 山口高明

豪邸に住んで戻さぬ億の金

憎まれる役は兄貴に任しとく

民族の炎は消せぬアイヌ彫り

妻よりも娘の小言身に応え

流刑の島に浜梨乱れ咲き

唐津市 田口虹汀

ジョーカーも持たずストップかける母

初孫を抱いたこの手で曾孫抱く

ふんわりとストレス解す雨やよし

勇猛精進一寸抑えて筆をとる

優曇華の花が咲いたという米寿

熊本市 永田俊子

教育勅語まだ覚えてる万愚節

おしゃべりな九官鳥が風邪をひき

ボールペンもわたしも乾いて春がゆく

衣紋竿 斜めに今日の疲れ吊る

竹伸びて自立たしかな竹の節

弘前市 一戸ツネ

いち日の心くすぐる夕鴉

夢に出た白い階段弥陀の道

涙壺底まで揺らす地藏さま

空っぽの心に埋める無駄ばなし

弘前市 岡本花匠

自我を盛る賽銭呵々と転げ落ち

改築の決意してから気も晴れて

侘び住い花一輪が和ませる

解体の我が家を偲び泪して

弘前市 中山雅城

竹馬で威張った友も黄泉路ゆく

桜咲く日本一の顔をして

桜散る短い命惜しみなく

善と悪 三つの時に知っている

弘前市 須郷井蛙

車椅子 総理になった気分です

ジープのヒップ若さを売りに出る

半額のセール同業者が覗き

八戸市 島田昭治

鼻糞がとれ名句が生れそう

目標は膝たたく句を夢にみる

付添もたのしすばらしい患者居て

初恋を二度したような佳子さん

仙台市 川村映輝

住専を背負ったままで通過する

燕趙園 李白を真似てワンカツプ

大阪市 川端 一步

長生きもらくではないと愚痴ってる

源蔵の母への手紙読み眠る

山火事に焙り出された凶悪犯

定年に手帳が白い日の散歩

これのんでからやると躁りかえし

五月晴れ柳友ひとり増えました

静岡県 蘭田 漠 杏

陽春の西日を連れて帰宅する

一代で築いた老舗子に譲る

大阪市 清水 利 武

旅先の石に座って時間待ち

母の日に娘がくれたイヤリング

歳とった証拠 冒険避けたがる

奮起してほしい政治のお偉方

女好き男好きとか言って過ぎ

夕焼が奇麗 明日は梅雨休み

羽咋市 三宅 ろ 亭

あれよあれよ国債残高のみ増える

お土産にノミ貰ったよ犬ホテル

大阪市 松尾 柳右子

突然変異などに期待などしない

手職持ち専業主婦にあこがれる

今年また無明の坂へ登らんか

朝夕の祈り忘れる旅の空

一卷を上げれば息子より一卷

一言が過ぎて小言がついて来る

大阪市 奥田 良子

ええ話らしくしばらくなりひそめ

空からの鯉の主張が面白い

大阪市 町田 達子

訪れば返事代りに孫の笑み

若い娘のはなし私の聞き上手

会えば義母もろて握りて涙ぐみ

紫陽花の涙よ悲報が多すぎる

白木蓮 北向きに立つ兵の墓

月の出にひとときをいるファンタジー

大阪市 藤田 頂留子

夏祭り景気の薄日はずませて

今宵こそしだれ桜の着物着て

大阪市 大河 未佐子

迫られてあじさいぼつと彩をかえ

髪に散る去年ベッドで見た桜

日付印みたいに切り変えられたらな

思い出を塗り変えたくて降りた駅

太陽の絵筆みごとな夕あかね

お隣の表札変り残る藤

大阪市 北 勝美

車椅子 花を見上げる藤の棚

山吹きに抱かれ般若の石仏

えびね咲き絵筆に残す小半日

病妻より先に死ねない老いの身よ

大阪市 小糸昭子

負を持った鳥激しく啼く夜明け

そよ風が吹いてラバイ子を寝かせ

終電車二人の世界無我の境

触れるのはよそう昔の傷だから

藤井寺市 中島志洋

揉めている話 風鈴和らげる

蜂一匹 男勝りが悲鳴上げ

叩かれる訳はごきぶり解らない

好きな娘を連れて古里夏祭

堺市 黒田真砂

牡丹咲く花の女王を自認して

ムスカリは清楚ブルーを引きたたせ

一言がうそに染まったシクラメン

一理ある話へ母も膝よせる

堺市 一瀬福一

釣合わぬ男 消化のわるい恋

春連れて地球を回る春の風

政治的理由で市長入院し

言うなれば木綿のような家の父

堺市 柿花紀美女

日向ぼこ遠い日近い日消えそうで

才女にも悪女にもなれず丸く生き

旅先で亡妹に似たこけし買う

穏やかな風を選んで老いふたり

堺市 近藤豊子

店番は軒に吊るしたするめだけ

相模灘キャベツ畑の上に照り

地震など忘れたようなシャンデリア

天井棧敷の人々去って世は移り

豊中市 吉田あずき

田に水が入りやすらぐ汽車の窓

季節ずれ傾いたまま夏となる

嘘の世に酸い梅干をなめている

豌豆まめ春の青さでころげてる

豊中市 湯浅馬洗

京に来て阿多福桜謎が解け(仁和寺)

散る風情見せずに幕の通り抜け

忘れてた花輪の匂いれんげ摘み

鯉のぼり総身だらり五月病

豊中市 松岡久留美

波風の立たぬひとりりを謳歌する

雨やどりで以来心に残るひと

婚約が決まりあなたと呼んでみる

久しぶり慈雨に息つく夏の花

豊中市 稲葉眞郎

春風の路上に揺れる仏の座
連休の花見の宴は庭の藤
鯉轍に託す思いは子に届く
敗戦は無念と言うて間違つた

箕面市 岩津 ようじ

入院の名医に困る担当医
裏山も若葉 私も更衣

まだ生きてまだ生かされて祇園の夜
亡父の本にはさまっていた明治の蚊

池田市 金崎峰子

人波を一寸さがってみる年に
夢をきくきまり文句のインタビュ
自分なり自分に合った道さがす
手ぬきしてお寿司ですまそ主人留守

茨木市 堀 良江

もめさせているのか仲裁してるのか
ミルクキャラメル今も匂うている公園
これ以上無理をさせたくない地球
艶消しな話ばかりで花が咲く

茨木市 島 元ふみ

老婆の思い出話愚痴になる
思い出の地を行脚する老いの夢
お国訛りで答えて欲しいインタビュ
死語にしたいことは大方女偏

高槻市 井上 照子

男性が欲しいと言葉足らぬ恥
気にしてるファッション背すじまず伸ばそう
チャレンジの心持つてる脳磨く
サファイヤもダイヤモンドも指で浮いて見え

守口市 森川 まさお

気短な呼鈴 悪友かもしれぬ
送られた見本の新茶で友を待つ
遠慮して咲く花の名は知らぬまま
切株と石が仲よく会話する

寝屋川市 岸 野あやめ

デパートへつまらぬものを買いに行く
親不孝 子不孝 俺はホームレス
野天風呂 誰が歌うかあの軍歌
わたくしの主義には添わぬ仲直り

寝屋川市 富山 ルイ子

杖をつく一步なかなか踏み出せず
伊達についている杖と言われ哀し
加速する老いに思案が追いつかず
自暴自棄になりそう痛む雨催い

枚方市 二宮 山久

卒業は来春息子の部屋明り
母の日へ嫁いだ娘の長電話
男五十歳 残りの人生考える
今日いきるために開いている新聞

東大阪市 安永 曉子

一周忌 師の温顔にお会いする

年金の過去が咲きますうれしくて

新築のように天井張りかえる

桜吹雪 川面をすべるとく行く

東大阪市 指宿 千枝子

老ゆるとはどの思い出も懐かしく

霧の中彷徨うような思い出も

庭に立つひとりぼっちへ鳩が来て

不自由な耳で居留守もしています

羽曳野市 酒井 一壺

二階から隣のさくらほめている

病室で桜の花を待っている

娘より恋人多いうちの猫

長居して猫と仲良くなっただけ

八尾市 山下 美津留

浮気した猫足跡を派手ににつけ

猫の名をモンローとつけ膝に乗せ

本物の猫は飼えない縫いぐるみ

税務署の廊下で恐い話聞く

八尾市 高橋 夕花

眠れないばらと時計とわたくしと

夜が更けて苦悶苦悶の机なり

イチゴジャム作って母の日を満たし

葉ざくらのみちで疲れを癒やしてる

八尾市 吉村 一風

古時計狂わず家のリズム追う

道草が好きで今でもはしご酒

少し隙作れよチャンス寄りつけぬ

やんわりと来る幸せは気がつかぬ

八尾市 宮崎 シマ子

来し方を覗く眼鏡か四月島(白浜で)

白浜も午前二時には静かなり

ひとりぐらし話相手の芥子ゆれて

直立不動 明治の父が聞く電話

岸和田市 藪野 けい子

青春の思い出深い金ボタン

屋上駐車 靴をえらんでシヨッピンゲ

目標額きめて貯金のマイホーム

飼い主の身勝手が野犬にしている

岸和田市 原 さよ子

一転二転 行方が読めぬ巨人戦

たわいない摩擦も楽し老夫婦

さりげなく見せて女の目が競う

添え書きに温みを貰う子の便り

岸和田市 井齋 一齋

新築費 神主が聞く地鎮祭

青春を国が盗ったとばやく父

古い型 無能な順に首を切る

為損じを腹で喜ぶ同業者

岸和田市 長谷川 呂 万
トラ勝つて晴れた夜空に北斗星

スーパの棚に合わせた妻のメモ
ボランテア汗ほとばしる日本晴れ
思い出が句にまとまった旅のメモ

貝塚市 池 田 寿美子

ためらわずスクランブルに風を切る
価値観を置きかえてみるまだ若い

ビジネスとしてかたづけに行くさわやかさ
すばらしい病院 眺めるだけがいい

河内長野市 井 上 喜 酔

日程を詰め込み旅の早い朝
まあまあと注がれストレスはぐされる
特ダネの火種が好きな昼休み
頑張れと言うのが病室精一ばい

河内長野市 植 村 喜 代

走る癖ついて人生落ちつかず
前を見て横を見ても蹴躓く
桜五分 御崎の海は潮干狩り
前後雨 中の一日旅日和

和泉市 岡 井 やすお

侵略を受けた処置より受けぬ策
なにがしの儲けた尻は皆で拭き
連休は読書に過ごしご安泰
月一度屹度 旭屋 紀伊国屋

大阪府 榎 山 隆

用意ドン今朝も元気に顔洗う
猫柳ぱつと二丁目春にする
ハンガーの礼服のタイ白と黒
飽食も一日干せば飢えを知る

奈良市 米 田 恭 昌

煽てられ脅され散つて忠魂碑
辻占が剛気な男沈ませる
地元ではおじぎをされる人らしい
孫来ぬに今日も上げてる鯉のぼり

大和郡山市 坊 農 柳 弘

片思い愛には遠い人恋ゆる
網走の桜も散りて衣替え
通り雨 今日も貴方は生返事
イヤリング貴方好みで待ち合せ

大和郡山市 榎 原 雪 心

一票になるかならぬかこの握手
梅雨空に虹を探してリクルート
二世代でローン払える婿と住む
吠える犬 吠えない犬に尻尾ふる

奈良県 長谷川 春 蘭

老いわれにバレンタインのチョコくれる
花冷えの日もあるべしと老いの旅
団欒に堪らず風邪寝起きて来る
この苗も千年杉の遠い夢

和歌山市 玉井豊太
籠で水くんで母さん溜めている

子供心に急なながれを父の蛇
鐘ついて浄土のはなし有難い
蛙には雨がすくない梅雨でした

和歌山市 垂井千寿子
病名がハッキリ言えるオペラート

母さんの頓智から吹く春の風
ブルドーザーいつか自然に裁かれる
石仏は大きい私の心小さ過ぎ

和歌山市 田中みね

かと言って姉さんなどと呼ばれても
賭け事から足を洗った丸い背な
幹事さん貴方が酔ってどうします
資産家の息子と聞いて惚れ直す

和歌山市 玉置当代

出まかせに何を言いつけるのかあなた
六十の手習いコピー機があざ笑う
ワープロに悪戦苦闘する翁
ボクんちへ行くとうと孫が離れない

和歌山市 山口三千子

嫌な事だけはきつちり回る椅子
ざるで水汲んで帳尻妻にくる
生き甲斐であった息子は遠く住む
馬鹿正直すぎて火の粉を浴びている

和歌山市 北山好笑
はほえみの顔が何より若く見せ
正直に生きてゆくにもいる勇氣
出直しのヒントを灯台から貰う
健康法あれこれ迷い忙しい

和歌山県 小倉アサ
温めようスランブだって足跡だ
解ってたはずの流儀にしてやられ
裏返せばそれは魅力と言うことか
留守電のセットが長くなる五月

神戸市 山口美穂
米寿の母へ赤いカーネーション届く
老母の背がみんなのゆく道を語る
再建のわが家ただうれしくて深呼吸
素敵な老いを信じてないけど見つけよう

神戸市 木村貴代子
全山が萌えても神戸春いまだ
人の世をうつして川は病んでゆく
人だかり吸い寄せられる年齢をすぎ
特売場 男の顔の冴えぬこと

西宮市 林はつ絵
良い顔に映せよ鏡 年ともに
老いてもう不発弾など捨ててくる
神さまよ打ってください涙ぐせ
お亡母さん今年も藤が咲きました

蟹気楼のようにこぶしの天にあり
西宮市 西口 いわゑ

悪友も酒もわたしの宝なり

地獄かも知れぬがノックしています

羽毛ぶとんなじむことなく母は逝く

西宮市 久保 まさお

革命歌 響かぬ空の鯉幟

復興眺め今年五月の鯉はねる

老兵は消えず新世紀招呼の間

久遠のいのち亡友のささやき十字星

西宮市 山本 義子

無造作にたけのこを置く無人店

小ぶりだが野の山吹はほこらしげ

雨らしい明日着る服が決まらない

貧しさがすぐ顔にでて不覚とり

西宮市 池田 善守

わが人生あれが山かと今思う

一周忌去年の今日を語り合う

眼の高さ孫に合わせば別世界

ストレスの火焰放射を妻にあび

芦屋市 黒田 能子

思い出の人にやがてはなるわたし

夢ふくらます鉛筆の芯まるく

新緑をめぐるゆとりも二年振り

生まれたて新緑の芽と孫娘

器用貧乏 父は満足して達者
伊丹市 小熊 江美

若いねと言われほのぼのイヤリング

亡夫と来た頃若かった通り抜け

迷う事ばかりで人生面白い

伊丹市 山崎 君子

鯉のぼり命の風をいただいて

連休は声だけかけて通り過ぎ

マネキンの浴衣姿よ花曇り

城跡に碑はひっそりと桜も散る

川西市 松本 ただし

書き出しの一字なかなか出ぬ便り

的を射た話ジョークに包んどく

風紋へ素足の跡を残しとく

差し引きをゼロにしたいと書く余白

岡山市 川端 柳子

善人づらしている髭もそってある

朱い糸紡ぎ作品まだ成らず

好きだった人の消息スイトビー

わくわくとえがく私の血のつづき

岡山市 井上 柳五郎

着ぶくれをゆっくり脱がす老いの春

五月連休終り練ってる時刻表

よそ行きの顔に剃られる無精髯

手を叩くだけで終ったきょうの席

倉敷市 田 辺 灸 六

振り返る坂の起伏は句読点
黄昏の坂はゆっくり歩きます
為せば成るひより越えの坂落し
春愁の人煩わし孤に籠もる

笠岡市 松 本 忠 三

待ちびとの来たらず後生大事にし
母さんが控えています大丈夫
無駄口をたたくお暇があればこそ
九十六百まで生きる笑顔する

岡山県 岩 道 博 友

飼いだに噛まれた今日も日記書く
ノータイで暮す余生の走馬灯
種蒔きにマイカーで来たミニ菜園
チューリップ咲いて園児の列が出来

岡山県 山 本 玉 恵

塾の子はきれいな夕日見失う
仮縫いの命のままで生き伸びる
これからの生きざま風と組むことに
つかず離れず死ぬまでつく友で居る

岡山県 福 原 悦 子

大胆な影に機密な計があり
神様も契り戸惑う離婚率
つまずいた石の余韻を胸に抱く
世渡りは下手でも丸い夫婦独楽

岡山県 福 原 辰 江

農を愛しつづけた老父のシルエット
歩を合わすだけの妻です海の風ぎ
母の海情操豊か波の音
白旗をあげればこの荷軽うなる

広島市 森 田 文

蒔いた種刈る約束を忘れてる
一筋の涙 いのちの鎖
一枚ずつころの壁を取った愛
広い海 愛に氣付いた日の鼓動

竹原市 小 島 蘭 幸

掃除機の音が止むのを待っている
本当に自分で家を建てている
笑いころげて十七歳は熱が出る
宇宙から帰り結婚すると言う

柳井市 弘 津 柳 慶

里帰りどころか孫は空の旅
黒髪を孫は黄色に染めて来る
官僚を暴いた大臣へ拍手する
寺からの御芳志帳へ無理をして

鳥取市 前 田 一 枝

開拓地 過疎地に赤い灯がゆれる
簡単な恋か別れはよりかたん
美人ではないが待つて居る妻が居る
流行を追うに年金軽すぎる

鳥取市 武田帆雀

筈を妻が見付けて僕が握る
山を描く人に一点雲もなく
差し引いて聞いても味方には出来ぬ
実名を出してしまった三次会

鳥取市 西村黙光

安楽死願ひ病窓開け放つ
死に神が表札一つ奪い去り
身内の忌へがらり変わった酒の味
運命とや黄泉の旅路へ小雪舞う

倉吉市 淡路ゆり子

錆び付いた旧家を守る鬼瓦
内臓に光を当ててリフレッシユ
水溜りピョンとヒントが跳ね上がる
七夕に着せる浴衣を縫い急ぐ

倉吉市 最上和枝

ガラス磨いて終の場所だと決めている
顔ぶれを見て反対の側につく
春ですよ土筆のダンスパーティーだ
野苺を摘んで帽子は籠になる

倉吉市 野中御前

脱ぐまでは見られたくない揚羽蝶
古里に私の座る場所がない
大笑いばっさり散ったチュウリップ
身仕度はお天気マーク見てつくる

倉吉市 松本よしえ

風紋はとても踏めない勿体ない
公園のベンチに暇が干してある
お金持ちもつとお金が欲しくなる
堂々の屋根が見せない火の車

米子市 木村富美子

かごめの輪そろそろ抜ける時が来た
反抗期わたしはもつとひどかった
下り道 残りの道は花を見る
山の子は山と話すと日が暮れる

米子市 青戸田鶴

おだやかな絵の中にいる安堵感
水たまりふとよぎるのは鳥の影
古い人形にまた逢いたくて素風館
連休が終り風船しばみ出す

米子市 田中亜弥

足が軽くてまだまだ命燃えている
泣きやむと父はお骨になつていた
九枚目に入る写経の手は静か
ゴミの日は醜い話を捨てにゆく

米子市 白根ふみ

山菜を摘んでめぐまれまする時
静寂をまたもよぎるよ雑念が
寝袋に星降る空を受けとめる
ほどほどのしあわせ群のなかにいる

米子市 中井 ゆき

水琴窟あれは地底の神の唄
約束の通りさくらが咲きました
ステッキの君はセピアの色の中
すれちがう風に海辺を知らされる

鳥取県 太田 幸枝

愚痴涙吸った枕を陽にあてる
根まわしの酒がきいたか票がのび
お遍路のお寺巡りもタクシーで
盛り上がった根に大木が腰をすえ

鳥取県 土橋 睦子

素面では言えぬ夫へのアイラブユー
仏壇に酔っていますと掌を合わす
鶯の正調をきき田植する

普段着のままで食べれるちらし寿司

鳥取県 西川 和子

計報聞く涙を見せぬ海が荒れ
さようなら身内が一人星になる
再びの出会いに絆強くなり
又今度などと上手にかわされる

鳥取県 幸家 單車

立場上どちらにも向く笑顔売る
この呪文あなたにかけて試そうか
罪一つ心に抱いて生きて行く
川上のきれいな水で罪洗う

鳥取県 津村 八重子

水ぬるみ土を愛する初夏が好き
さあ初夏よ蛙大声はり上げよ
子に望む大きな山を描くように
宿ゆかたお座敷小唄よくはずむ

鳥取県 田村 きみ子

ゆきずりの女と相合傘の縁
再婚を考えているちびた靴
今だから言える失恋二回ほど
さわやかな気分鏡が見たくなり

鳥取県 乾 喜与志

老骨へ新築部屋の青畳
これからの寿命 青畳に託す
仏壇の奥に一部屋父の部屋
葱坊主開いて蝶を呼び寄せる

松江市 柳 楽鶴丸

シルクロードのガイド片言の日本語
努力して合格 決心して中退
禁酒してワイングラスに花を活性
頑固一徹 喫煙権を主張する

出雲市 富田 蘭水

幸せになる心得も斜め読み
十善を積んで余生をたしかめる
筈に生きる力をさとされる
露天風呂 裸 善人ようなれず

香川県 木村 あきら

門柱に少し虚勢を張っておく
札束で裏門開けてはなりません
お陽さんの恵みも知らず暑いとは
縁側でタバコの美味い午後三時

香川県 工藤 吟笑

押し出しがよくてみんなに使われる
押し問答 大きな声が勝っている
押し過ぎて見ている人が危なかり
バアさんと二人ゲートへ今日も行く

香川県 山地 マツエ

四つ下の夫ひげでも生やそうか
酒二合 今夜はいい夢見れそうだ
ひざ枕までをゆるして他人とは
風は春少し道草しませんか

松山市 宮尾 みのり

傷つけてついて脱皮をする若さ
自己愛がすぎて化石になっっていく
あの時の誓いを妻が解きたがる
嫁が来るまではやさしい過疎の風

松山市 丹下 美津子

大阪へ行ったつもりの長電話
ジョークジョークと幼い孫の小憎らし
手のしわがとても気になる初対面
緞帳のよう見事に垂れた藤の花

今治市 野村 京子

こんもりと素性をかくす梨の花
夢ひとつひとりよがりの午後の椅子
哀しいまでに絆つながる芋のつる
生き死にを落日に見るくにの山

高知市 北川 竹萌

月影に祖父 尺八のメッセージ
串団子 見つめほんとの味を噛む
母の日に娘が血の通う話する
朗らかな話集まる里菜園

高知県 赤川 菊野

目標を亡母の背中に追いつづけ
黒ずんだ柱に光る恩師の句
お隣は町一番のイゴッソウ
弁解は嫌い黙秘をつづけます

唐津市 浜本 ちよ

夫の留守に脚立を使う用が出来
心では感謝口けんかして夫婦
孫一人愛情見せるための金
諦めが良すぎのんびり肥え太り

福岡県 横地 東川

言論の自由は投書で晴らさんか
凌ぐため当座の職が定年日
餌の郷伐られ一族狸来る
美しい水茎消えるワープロに

十和田市 小笠原 敏人

女房は草むしりでも手際良さ

鐘乳洞 昔ほどにはときめかず

空虚さを消せないままに今日が去り

豊中市 江口 明光

お菓の効き目お酒には負ける

方言を忘れるほど都会人になりすまし

名を残す漫才ビデオで生きている

豊中市 月原 方郎

礼金を包んだあとの下心

連休のあとは私の出番です

長電話そろそろ主人が帰る頃

摂津市 井上 源一

独り身の気楽さだけを身に纏う

気を抜いてすぐに他所見をしなくなる

階段に踊り場と言う思いやり

西宮市 菊池 トミエ

鮎育つふる里の川こぶし咲く

安堵とは涙こぼれて月おぼろ

若葉萌え鳴戸の渦の桜鯛

宝塚市 上田 佳秋

潮時が見えぬ男の負け戦

亡妻へ済まぬ火種を抱いて寝る

葉桜へや々と自分を取戻す

全日本川柳大会各賞決まる

第20回全日本川柳熊本大会は6月9日、熊本市民会館で開かれた。今回は各題秀句が3句ずつとなり事前投句3題・当日出句4題、計7題について選句の結果、秀句21句が選ばれた。また、昨年まで大会後、全常任幹事の投票で文部大臣奨励賞が選ばれていたが、今回から大会席上、第2次選者によって各賞が決定、発表された。受賞句は次のとおり。

文部大臣奨励賞

幾さじの粥の命を包む霧

兵庫 箱木紅法師

川柳大賞

要領を覚えて鬼は弱くなり

兵庫 牧淵富喜子

全日本川柳大会賞

要領が掴めず朝の風を待つ

和歌山 辻 翠子

とてもしアルで要領下手の内視鏡

愛媛 兵頭まもる

マザコンのタンポポだったUターン

鹿児島 江口さくら

たんぼの旅にはいらぬ時刻表

静岡 江川ふみ子

漬物石にいつもはね返される論

福岡 梅崎 流青

議論から遠く独りの絵を探す

東京 伊藤 正紀

析りはやがてボブラの枝と天に着く

三重 木野由紀子

てふてふの仮名文字母の一世紀

北海道 七草 吉子

方角を決めてミサイル黙り込む

熊本 丸山 光在

どう向きを変えても見えてくる枯野

埼玉 渡辺 梢

自選集

藤井明朗

黒川紫香

ひと夏を無事にプランを練り直す
貧乏閑なし考え直す余生

健康第一 歳に似合うたのに気づき

川柳へ情熱負けん気の八十路

仲のよい夫婦へ見とれてるゴリラ

金井文秋

奥谷弘朗

地獄極楽 生きてるからあるのです

目標の長生きの人死にはった

断りもなく上がって来れるほどの仲

平年作ぐらいだろうなうちの嫁

足が長いだけが恰好よく見える

野田素身郎

藤村女

テレビ見ていて深爪をしてしまう

連休の明日はどうやら雨らしい

屋根修理 梅雨よいつでもやってこい

後遺症 緑の風に歩が軽い

パレードの音楽隊の玉の汗

うなずいてばかりしている富士の景

道づれは老人手帳入れた袋

始末書で済んだ安堵でコーヒー店

ときどきは猫と話しているひとり

お別れの列車と交わす投げキッス

おすそ分けほんの少しという温み

父の下駄娘が履いて知る温さ

自分史をゆっくりたりたどる筆の先

八十歳でピアノを買った妻を持ち

咲いてよし雨でまたよし花に酌む

傾いた軒でも忘れずつばめ来る

両の掌を合せば遠く父母の声

何も彼も冥加に余り合掌す

塩壺に母 雑学をためて生き

玄関の壺に涼しさ活けてみる

小西雄々

自己主張しすぎて傘がたためない
貧しかった思い出があるラムネ瓶
要領を詰め込む壺を夫は持つ
六法を読んでもヒント湧いてこぬ
幼児歩くと鳩も歩いて飛びたたず

正本水客

腹の虫 男の顔になっている
手の内を見せているとは思えない
葉桜の陽だまりにいる年と言う
言い負けてきれいな顔になっている
にんまりとしている自分とみられない

月原宵明

お茶漬へ沢庵伴奏してくれず
裏長屋 庶民の歩く道がある
葉桜へ預金の残は底をつく
海へ吹く風とたんば知らなんだ
新緑へ真っ直ぐ消えた霊柩車

松川杜的

五月まだホーム炬燵で見る相撲
アルバムへ思い出させぬ友人
石も貴重品 無暗に捨てられず
ピタミンの数字にいつも迷わされ
豆腐屋のラッパお葱も積んでくる

久家代仕男

三毛猫の雄を大事に飼ひ馴らす
逢えそうな予感に急ぐ回り道
廃屋に屈託もないつばめの巢
さりげない言葉の端に秘す謀反
お茶摘みをあっけらかんと昼の月

児島与呂志

育つ芽の楽しみ知って種をまき
心から笑うとうまい朝のめし
ぎりぎりの線でゆるした糸が切れ
デュエットの二人に春の花ぐもり
昼下がりに他人の裏を見てしまい

恒松町紅

木々萌える祖父が遺した美しさ
散る花へ男冥利の手酌酒
噂していたと珍客靴を脱ぐ
幸せだから亡妻のことしきり
口癖のほどに守れぬ休肝日

辻白溪子

枕投げた思い出がある宿屋
お土産の試食が並んでいる出口
本心からあやかりたいと言うお世話
さりげない言葉に妥協した夫婦
冗談にしても許せぬ事を言う

波多野五楽庵

法廷の椅子で虚飾の壁が揺れ
往時茫々としぼと昔話する
失敗も成功もない御逝去で
花冷えと書けば聞えのよい寒さ
あれが安達太良 千恵子の里に見る夕日

野村太茂津

余生描く台本にない吾が悩み
生命預けた名医に余生甘えきり
目標の卒寿へ一步踏み出して
暫くは呆然 故宮に惹かれ瞑目す
事実は事実 服従する素直

小林由多香

捨て場所に困れば海へ持つてゆく
再三のチャンスへいつも金がない
雨降って固まるはずが流される
母の日へ嫁から杖のプレゼント
開発へ山の悲鳴がこだまする

遠山可住

ふり向けば勤続表彰状一枚
会者定離 風はうなずいてるばかり
太陽が沈む向こうにある未来
ダルマの目 片目のままでいる不徳
古希というのに片思いしている女

西田柳宏子

生きのびる執念死んだ振りもする
もう千羽鶴には飽きた薬包紙
麻原に法廷侮辱と何故言わぬ
お互いに荷物にならんとこなあ妻よ
反旗振る若さを羨ましく思う

八木千代

あたりまえだが一步踏んでも足のあと
サブラレッドの脚も聊か老いたりな
竹人形 意地は足から抜けてゆく
短い足でいつでも遠足の尻尾
象の足それでも墓場まで歩く

小出智子

山に登れなくなつて山の美しさ
鍵の鈴いっしょに死ねるはずもなく
デパートへは夫婦で行ったことがない
他人ばかりの街で大きめのバッグ
自由化になつたお米を二キロほど

高杉鬼遊

たけのこを食べる今年を生きている
仏さんと話が出来る泣けてくる
それなりの勇氣さんばつ屋をかえる
悲しい時に哀しい顔をする人と
ブランコの漕いだ数だけ死を送り

蛭子省二

東野 大八

むずかしい字だが、「エビスセイジ」と読む。
今どきの川柳人には、根っから馴染みのない
むずかしい姓だが、古参柳人には音にきこえ
た古川柳研究家である。

日本屈指のやなぎ樽研究誌『やなぎ樽研
究』は、大正14年5月創刊で四六判約80頁の
和紙活字印刷の堂々たるもので、岐阜市柳書
刊行会（田中蛙骨主宰）の発行、全国古句研
究誌は、本誌をもつて嚆矢とする。

この我が国唯一の古句研究誌が、昭和六年
その経営に危機が迫った時、時の古句研究グ
ループ西原柳雨・岡田三面子・渡辺虹衣・森
東魚・蛭子省一らの錚々たる著名な古句研究
家ら24人が発起人となつて後援会を作り、月
刊発行維持に努めたが、蛙骨と恵那岐川の発
行人の死去によつて、惜しくも昭和9年1月

号をもつて廃刊した。「柳界にとっては一大
損失」と、天を仰いで三面子が慨嘆久しゅう
した終刊の辞を書いている。

何さま、当時のリーダーたちは、剣花坊・
久良伎・水府・雀郎・溪花坊・飴ン坊・紋太
・卯木らがその賛助員で名を連ねていただけ
に、その廃刊のショックは絶大だった。

「子はわが生涯を川柳に捧ぐる者なり」
と宣言した岐阜県の医師田中蛙骨について、
本欄の第58回（六七〇号）に詳記したとおりだ
が、岐阜県の柳界は五世川柳が飛騨高山で、
参加者81名を集めて、柳界第一号の全国大会
を開いたのが元治元年（一八六四）の五月、つ
づいて蛙骨が地方柳界初の青柳会を結成、そ
の柳誌『青柳』第一号は、剣久が新川柳振興
運動を全柳会に呼びかけた明治36年に、いち

早くその声に呼応して発刊という、名門中の
名門である。この蛙骨が柳界のトップを切つ
て、全国大会を長良川畔の料亭で開催したの
が、明治42年とその翌年であったことは、柳
史にも明らかだ。

ともあれ、柳狂人蛙骨経営柳書『青柳』か
ら『やなぎ樽研究』の発刊以後、ずっと陰な
がらのオーナー役をつとめたのが省二だ。省
二は本名石井省二。明治20年10月19日名古屋
の素封家石井篤三郎の次男に生れた。その実
父の親友で、朝鮮光州で醸造家を営む蛭子家
に養子に出された。川柳は早大商科の在学中
阪井久良伎から柳樽を教えられたのがそもそ
もの柳縁である。

光州酒造株式会社の社長で羽振りのよかつ
た蛭子家に引取られ、明治43年早大を卒業と
同時に渡鮮。酒の仕込みから修業して、やが
て昭和3年頃には、同社の副社長格になった。
久良伎門にいつか入っていた彼は、実父篤
三郎の篤の字をひねって、柳号竹馬とした。
久良伎は終生、彼を竹馬と呼んでいたが、壮
年期から彼はそれをいやがり、本名の省二で
柳界を通している。

さて、この朝鮮光州で羽振りのよかつた省
二夫妻に、敗戦の悲運が見舞った。名古屋の
生家は、戦中の猛爆を受けて廃墟と化し、行

くともなく海外引揚者寮に在るこの敗残の老夫婦に、あたたい手をさし伸ばしたのが愛媛県大洲市にある水郷川柳社の御大、今川柳影だつた。彼は齒科医で在京中の親友だつた近くの内子町長芳賀良一に懇請して蛭子夫婦にその邸内の隠居所の提供を申し出たため、ようやくその願いがかなひ、引揚寮から内子町に移つた。夫人の名は万寿。

折も折、筆者も郷里の大洲市に引揚げ、住宅難から、お寺の位牌堂で新妻と籠居中だつた。天下の古句研究家蛭子省二先生、内子に移住と柳影から聞かされ、芳賀邸の老先生宅を早速に訪れた。

ころは陽春の候で、夫妻の憩う南向きの結構な一棟の縁先には、見頃の牡丹がたわなに咲き乱れていた。招じられて勝手口近くの長火鉢に座るなり、すぐさま目を奪われたのはびつしりに毛筆で何か書かれた障子であつた。よく見るとその障子の一枠ごとに書かれてゐるのは川柳だ。

「わたしは老残の身一つになつた一引揚者の今、こんな結構な住居を頂いたのも一重にこれは柳縁です。この皆様の御恩に報いるため、先輩や朋輩の作句を、このように障子に頂いて愛誦して感謝してゐるのです」

が、この家の主の説明であつた。眺めたこ

らも感慨無量である。

内子町にほど近い八多喜という小さな街で名物のささやかなもみじまつりの催し物の一つとして、大洲近傍の柳人たちによる「もみじ句会」なるものが開かれた。

松山の前田伍健先生もみえるとあつて、一座は六十人ほどいて、大いに賑わつた。こんな大会なので、「蛭子省二先生も選を」というわけで、当時、歌舞伎役者で知られた羽左衛門そっくりの省二先生の番になつた。

いんぎん謙虚そのものの、その面長の顔をまず伏せて、彼はおもむろに合掌、手の句箋を押し頂いて、さて披露がはじまつた。その最初の一枚目を手に、この人はこう切り出したのである。

「ここに頂いた一句一句は、ここにおられる皆様が、ごころうなさつて書かれた尊いものです。それを没にするなどもつての他と、すべて一句残らず頂きました。長くなろうかと思いますが、何卒お許し下さい」

と一札され、のっけから天地人の三光、それから五客に、佳作十句、そこまではいいが、このあと手抜き句がエンエンと続くのである。さすが剛腹の伍健宗匠も次第にウンザリ顔で、モジモジといったまれぬ態にまでなつた。後にも先にもこんな句会ははじめてであ

るだけに、一座の連中もながいこと忍耐——いや辛抱のつらい時間が過ぎていった。

これから二年後の昭和33年8月16日、四十年にわたる持病のぜんそくのため死去した。享年71歳、探玄院長良吟省道居士。

生死閑頭法師蟬音痴らし(辭世句)

この時、筆者は今治へ転居のため、葬儀には出られなかつたが、今も内子町高昌寺に小さい墓がある。

ふあうすと川柳社の幹事同人だつた故橋本言也は、同じ朝鮮の引揚者だけに、よくこう語つていた。

「わたしは京城で手広く印刷業を営んでいたが、わたしが手がけた柳誌は鶏林川柳社が主で、ほかにきぬた川柳社、しぶ茶川柳社、むもん川柳社などがあり、大正期のみな名門だつた。これらの川柳社のカンパを片づ端からして頂いた人は蛭子省二先生で、有為転変のこれらの柳社、柳誌の中に省二先生の御恩を忘れぬ人たちは沢山いましたね。大きな醸造会社だけに、省二先生にすればなんとも思われませんが、朝鮮の川柳はこの人が育てこの方が面倒をみられたといつても過言ではありませんね。一度、お会いできたら心からお礼を申し上げたいと思つてゐます」。

▼次号は「岩田 美代」

柳籠裏三篇研究 (三十一丁)

七久保博・岩田秀行・紀内恒久

西原 亮・瀬川良夫・青木迷朗

佐藤要人・八木敬一

鈴木倉之助 故岡田 甫

404 目を皿のやふに井戸からうらめしや 如雀

瀬川||井戸替えの句ではないか。みんな目を皿のようにして注目している。井戸の中に入っていた人は、いくら青白く冷えた姿で、ちよと幽霊のようなりて出て来る。「うらめしや」と言ったかどうかは判らない。青木||句の仕立方は礎稿のとおりでおどけているが、その裏は下五の「うらめしや」で、恐ろしい番町皿屋敷のお菊を暗示している。「目を皿のやふに」は、お菊の恐怖とも幽霊を真似た道化者とも、それを見て恐ろしがっている者とも取れる。いささか趣向が過ぎて「いやらしや」。

目を皿のやうにして下女叱られる 天七繁2

目を皿のやうに井戸から下女は出る

天四智2

しばられた女のそばに破れた皿 明五義4

佐藤||青木説賛 ずばり皿屋敷の句。

西原||賛。なれど、作者には井戸替えの実景が脳裏にあつたのであろう。本当の銀のかんざしを落した女が、井戸替えの時、目を皿の如くしていたのに、遂に見つからなくてがっかりした時の経験が目には浮かんだのかも。

鈴木||皿―うらめしやで皿屋敷。青木氏ご明解。

岡田||皿屋敷説。賛。

405 損な事女房斗りて腎虚なり

五楽

瀬川||よほど美しい女房で、まったく精力を

尽してしまった男の姿が気の毒。ほかにもつと遊びもあつたのに、それを経験できないとは、さりとて損なことではある。

佐藤||賛。

あいそのつきた男女房で腎虚 寛元茹2

鈴木||同。

かんびやうもわづらハせるも同じ顔 天五龜2

岡田||同。女房が美人の場合もあれど、亭主がまじめ一方の場合もある。

406 極悪意腎虚の異見言イに来ル 石斧

瀬川||亭主というより、女房にであらう。腎虚の因は、えてして美しい女房にあることが多い。ところが亭主には言いやすい文句でも、女房にはなかなか言いにくいことが多い。ことに意見となるとなおさらだ。それを職業としている医者でさえ、むずかしい。ごく悪意な人で、うまく言える人がやらなければ、めちやくちやになつてしまふ。

青木||賛。極悪意とは知人・友人の類であらう。礎稿では意見される相手を女房とされているが、何れとも取れ、或は両方共にの場合とも取れるが、こういう意見をしに来るのは男であらうから、妻君には言い出し難からう。

身から出た錆の亭主への意見と見る。

佐藤 青木説贊。亭主の方でしょう。

鈴木・岡田 同。

407 出合茶屋汁一色のちそう也

美德

瀬川 此の句、「江戸の出合茶屋」(花咲一男)では、次の句と並べて、どうもバレ句とつていようだ。

おこのしらあへいつしゆ也出合茶屋

安六宮3

出合茶屋の食事としてはどうせ簡単なもので、汁一色ぐらいと考えていたのだが、ちょっと自信がなくなつた。そういえば、「蓮飯」ばかりで、他のものはあまり出て来ないようである。バレ句とみれば、男女最高潮の愛液のさまそのものである。

青木 バレ句贊。「汁一色」『おつけ沢山』

バルトリン氏腺液の分泌旺盛な様。

佐藤 贊。汁は汁沢山の汁。礎稿の例句「おこのしらあへ…」と全く同想の句である。

鈴木・岡田 同。

408 十六で小町もわざとはへははへ

雨譚

瀬川 小野小町は穴なしであつたとか、美貌のわりには気の毒なこと、女にして女にあら

ずであつたわけだが、

十六で娘は道具そろひなり

八42

というわけで、女十六歳ともなれば生えるべきものはちゃんと生えた。本当に、わざとらしくではあるが、の意。

青木 贊。俚語「十三ばかり毛十六」をふまえた句。「わざと」はざつと。少しばかり。

初物が十六本ほどはえるなり

末26

十六の娘はへぬを苦労がり

うつわの水

十七ではえぬを母は苦労がり

明六信4

岩田 青木説贊。「わざと」には「本来ならば必要なのをあえて」という含みがあると思う。

本句は、「むだに」「不必要なのに」と解したいが無理であろうか。

鈴木 同。「わざと」岩田氏説に賛。少しばかりの意もありますが、「穴なし」なのですから前説妥当。

岡田 同。「わざと」はざつと、少しばかりの意が江戸期の文例には多い。「毛十六」の俚言

からすれば、句は「十六で小町は…」なのですから。しかし、江戸期の文例ではそれに当てはまらぬものあり、現代でいう「わざと」故意に…でない通らぬものがあります。

「ムダに」「不必要なのに」と解するには、

もつ少し用例を拾わぬとダメです。

409 よつ程な金瘡ほどにさけて居る

五楽

瀬川 「金瘡」は切り瘡、刀きず。切れる刀で思い切りよく、すっぱりとやつたように、みごとに裂けている。「川柳辞彙」にバレ句と注する。女性器をズバリ單刀直入の表現。

青木 贊。作者をしてこの句を作らしめた状態を想像するとその方が滑稽で面白い。男なんてものは、色にかけては昔も今もこれからも、ちつとも変わらないのではないかと思われる。

毛を剃るととんだ大きな物に見へ 二六28

七久保 贊。別名、俗に「薙刀きず」「二寸五分」などと言う。

岩田 贊。女と違つて男には、目のエロティシズムが不可欠であること、なるほど昔も今も変わらぬらしい。この傷肉があらわれ、どこまで達しているやら知れない。よほどの深手なるべし。

鈴木 バレ句の連続である。大尾に出るところ本編もいよいよ終りになったので、一座の雰囲気か。

岡田 同。

秀句鑑賞

同人吟 安 藤 寿美子

— 6月号から

五月号にのつた皆様の句は花の盛りで、桜によせられた佳句をたくさん拝見しました。

六月号の桜は落花、花吹雪、散りゆく花によせたおもしろい句、いろいろな句にあらわされていました。そのひと月の時間の経過が感じられて、興味深く読ませていただきました。

桜ほど古来、日本人にふかふかかわつていて愛された花はないのではないのでしょうか。

かずかずの和歌、俳句はいうまでもなく、絵やさまざまな模様、菓子など生活の中に、とけこんでいます。あの花の盛りに逢った時の心のふるえるような喜び、それが一目千本の吉野山でも、廃屋の庭に朽ちかけた一本でも花を見た時の感動はこの国に生まれた幸せを感じます。しかしこの花のはかなさを知っている私たちは喜びの裏にある散り落ちる悲しみを知っています。だからこそ大勢でお花見のドンチャン騒ぎをして、束の間の花を愛めるのではないのでしょうか。

私たち日本人の心の中に千年の時をかけて染みついている仏教的無常観は、この季節の

移り変わりのきわ立つた国土の上で、知らず知らずのうちに、もののあわれを感じ得るようになっているのではないかと思います。

この度はいくつかつらつら桜の句をとりあげてみました。

さくら咲き悲しいほどの今がある

吉岡美房

盛りの花もいずれ散ります。過去も未来も見通した目で今の盛りを見つめておられます。春らんまん咲いて根へも返す恩

井上柳五郎

落葉帰根という禅の偈があるそうですが、落花帰根。花を樂しませてもらったあとには「おれ肥」という良い言葉があつて、花をつくつた人はこやしをいれ、樹の労をねぎらいます。

花いかだ友禪ながしみるような

西口いわゑ

水に散り込んだ花びらが寄り集まって流れてゆく美しい光景です。最後まで美しく人を樂しませてくれる花ですね。

桜の下今年も一病抱いたまま

三宅 つえ子

つえ子さんは十余年車椅子の生活をしながら、いつも明るく良い句を発表されています。ご病気にめげず電動車椅子でボランテアの方の助けをかりながら「通り抜け」にも行かれたとか。その肚を据えて病気にたち向つておられる姿には教えられるものがあります。毎年桜の下で句を作るためにも、ご養生を祈っています。私はいつも句会の日のお天気を気にしています。雨になると、つえ子さんが来られなくなりますから。

夜桜の闇をめくれば魑魅魍魎

木本朱夏

「清水へ祇園をよぎる桜月夜今宵あうみなうつくしき 晶子」花篝に照らされて花も人も美しく浮かび上がり、そのうしろの闇はいよいよ濃く思えます。闇の中には山や川の怪しい神々化物が跳梁跋扈しています。丁度今の世相のように。

咲いて散る姿 迷いからさめる

宮西弥生

人間は何かと自然から学ぶことが多いと思います。

人もまた然りと悟られたのでしょうか。いつまでも若々しく、ご精進されるよう祈ります。

桜花吹雪 忘れ上手に老いぬべし

吉川 寿美

花吹雪のように嫌なことや、くやんでも仕方ないことは、さーっと一陣の風とともに吹き飛ばしたいものです。忘れ上手とはつまりことを言われました。そうすれば家でも外でも人間関係はスムーズに行くことでしょう。成績表たった一つの5をほめる

山地 マツエ

多分謙遜と思いますが、これは素晴らしいおばあちゃん(失礼)か、お母さんかと思えます。この子はすすくと育ち成績もずんずん伸びて行くことでしょう。実はうちの息子も何十年か前そんなことがありました。それが家庭科だったので私は大笑いしました。

嘘の世へ四月馬鹿など色褪せる

吉田 あずき

年がら年じゅう目をこすり直してみたくなるようなニュースがよまあ次々出てくるものです。罪のない四月馬鹿で笑いあったことが懐しくなります。

菜の花は思案の人にふさわしい

榊 本 落 児

亡くなった司馬遼太郎さんは菜の花が大好きでしたとか。私は「街道を行く」四十一冊を並べて菜の花を挿し、作家を偲びました。

爛漫の桜 命をありがとう

島 元 ふみ

知人が「ガンからの生還」という本を書いて送ってくれました。それはガン告知から手術、抗ガン剤の苦しみを経て職場に復帰するまでの克明な記録です。その人にとって、今年の桜はどのように有り難かったことでしょう。来年も再来年もずつとずつと桜が見られますように祈らずにはおられません。

ひとりには一人のままで桜が散り

赤川 菊野

菊野さんも私も一人住いです。気楽でいいとはいうものの抵抗する相手がないのもつまりません。昼食の上にぎりを詰めさせて来て一本の缶ビールとともに食べるのも、亭主野郎が汗水たらして働いている時刻だと思えばこそ美味なのであって、仏壇の前でひとり食べるのでは味が半減します。せいぜい桜を楽しむ、川柳を楽しみましょう。

ひとりて歩くあくまで歩く夕陽の中

山 本 希久子

すっかりした自負を持ち、ひとをたのみずあくまで見識をまげず、たとえ日が暮れようと足元を見つめて行きましょう。一本気な句が作れる今を大切にさってください。私の歳になるとすべてアバウトなんですから。

面明かりのなかに役者の恍惚

田 中 薫

ツラアカリと言うものが見たたくてずつと心にかけていましたが、私も今年やつと金馬羅歌舞伎を見に行きました。花道のすっぱんから現れた役者の前後に大きな蠟燭を立てた細長い板を差し出し、役者の顔をよくみえるようにします。サンダシとも言うのだそうです。金丸座は昔の建物を再現して升席で畳に座ります。歌舞伎のような虚構の世界では、ミモフタもないようなライティングよりも、こうした明りのほうが見物も恍惚としてお芝居の中にのめり込んで行けそうです。

身のまわりに侍らしているメモ用紙

春 城 年代

よくお年寄りの部屋は定位置のまわりにいろいろな物が並べてあるのを見かけます。

片付けてしまつと取り出すのも面倒で、しかもどこにしまいいくら分かんなくなるのです。メモ用紙ならその辺りにあってもかさ張りませんよね。よくつれ合いがいた頃は私が捜し物をしていると小言を言われました。「しまつ所をきめておかんからだ」

「きめてますがな…そやけどどこに決めたんか忘れたんですがな」

お後の支度がよろしいようで…。

水煙抄

西田柳宏子選

倉吉市 田中 八太郎

和歌山市 古久保 和子

許したるそれから先は別れるな

誂えの皮靴はいたことがない

魚より売り声とても活きている

酒飲めば警鐘ひびく妻の声

遊んでは居られないから朝の靴

成田市 斎藤 房子

花吹雪うかれ上手な紙コップ

希少価値 書けて喋れてそつがない

ほどほどのストレス子から送られる

窓みんな開けて伴せ呼んでます

あき缶ころころ飽食の世をあざ笑う

大阪市 一本 勇太

渦ひとつ沈めて妻と桜餅

改札の流れの中にいる孤独

コミカルな絵ばかり描いて破れ傘

五風十雨少し疲れた花鋏

惚けたかな角がとれたとも言われ

放流の川の匂いを忘れない

メモ持たされた父さんの市場籠

古雑巾も引越しに連れていく

逆立ちをするとムンクの絵も笑う

大根の抜けた穴から深呼吸吸

富田林市 欄 智久

控えめで妻は黒衣に徹してる

金婚へ七転び八転び泣いた日も

酒ビールいつ気吞みせよとは書いてない

歯切れ良い言葉にうっかり乗せられる

台所朝の包丁リズムミカル

尼崎市 的場 十四郎

嫁ぐ娘の肩はほのぼの燃えている

褒め上手 叱り上手で妻達者

踏みしめる朝の歩幅の軽やかさ

核のない国が並んでいる平和

一言を控えて平和な嫁姑

兵庫県 安達 厚

小心な心の乱れが筆に出る
クラス会サイトサイトの血が騒ぐ
父母逝きて故郷日々遠くなる
味噌汁が朝食の味妻の味
縁遠く道草ばかりしてしまふ

大阪府 和田 和風

散る花も優しい風を待つ甘え
居眠りが日課となって喜寿近し
脚試す奥の院まで室生寺
美しい老後だんだん遠くなる
終電に合わせたようにホームラン

茨木市 久保田 恵美子

こわいもの知らず同居を夢にみる
姑と同居どんなにつらいこと
奥向きはめったに言わぬ京女
根がまじめ昭和ひと桁苦勞性
古漬に生美食事の極め付き

出雲市 川島 和歌子

春風に寄り添いながら散歩道
賑やかに道順聞いている春の午後
花冷えに衣重ねる今朝の雪
なんとなく方言懐かし旅の駅
薬湯に肩までつかる今日の幸

岡山県 国米 きくゑ

ふる里に佇てば風さえ子守唄
夫唱婦随そろそろ謀反考える
団欒の鍋へ笑いが煮こぼれる
何も彼も呑みこんでいる布袋腹
愚痴言わぬ明治の母にある美学

静岡市 佐藤 次枝

母の計に唯呆然と立ちつくす
桜背に母は突然永久の旅
逝く前に逝くと一言なぜ言わぬ
あちら立てこちらが立たぬ基地整理
参考人言い訳だけが空回り

和歌山県 中後 清史

明日の風 判らないから神を抱く
自己主張 花はいのちの限りする
負けた日のころへ鬼が来て騒ぐ
噛みしめてみれば血肉となる話
終章のページは妻の掌に委ね

兵庫県 仲井 素水

妻遺影笑顔のままで年とらず
生きている証拠に爪も髭も伸び
減塩に飼いならされて気力抜け
因習の里の行事も様変わり
カラス鳴き嫌な予感に気のしずむ

島根県 森 茂 美

思ひ出は今日も大事に玉手箱
老妻と合わす周波に円く住む
しじみ貝明日は食われる音を吐く
ほろ苦い露のみどりに春を食う
種を蒔く土の匂いに亡母を恋う

寝屋川市 瀧 本 八十八

河童にも川流れあり方丈記
いとしきは鮭里帰り母の川
無党派の旗手試されるノック知事
方言を聞いて正直ほっとする
痛快なボヤキ気味良き漫才師

和歌山市 津 村 武 春

意気投合 群れを外れる二羽の鳩
窓際の椅子に馴染んでいる噂
一心不乱 百度参りに見る裸足
黙秘権捨てた男がよく喋る
花粉症 菜の花までも怖くなる

和歌山市 水 田 秀 男

雑草になって下さいタイガース
人間を相手に自然疲れてる
苦しくてハードルの横すり抜ける
三枚目にもそれなりの夢がある
流れ星 星の世界のリストラカ

兵庫県 円 増 純 子

考えが似て来て歯止めもうきかぬ
散り際が見事で人に愛される
簞笥から出て物言うた免許証
方便の嘘ならきつと許される
有名にした代償の大き過ぎ

大阪府 澤 田 和 重

回転すし皿つみあげて満ち足りる
体重計に一喜一憂させられる
一人居は暇だと他人きめつける
ありがとうで亡父の日記は終つてる
ひげ剃つて靴をみがいて家にいる

寝屋川市 井 上 す み れ

古傷もちよつぱり聞かせ人を説く
公園の椅子でイライラ万歩計
価値観のちがいもおかし三世代
言いにくいことはお茶を飲んでから
金利下げ代わりに上がる消費税

砂川市 武 田 正 美

ジャンケンポンどの掌もみんな温かい
こだわりを捨て安らかな夢を追う
我儘を言つて頂戴生きてる
恋愛に停年はない恋してる
些細なる善意段差の車押す

犬死にと思ふ上等兵の墓

今治市 渡辺南奉

落ちぶれて東大卒が邪魔になる
目的があるしぶちんだ笑うまい
時は金 細くて長い方が得

豊中市 石川勝

眼科歯科内科と生きる忙しき

苦節10年B面がヒットする

狼が来たと嘘つく淋しい子

保険屋が見積る軽い命だね

富田林市 藤田泰子

花満開 浮かれておれぬアレルギー

愛してるうれしい嘘をありがと

アキレス腱 切れないようにする背伸び

やさしさは深い器の底にある

今治市 野村清美

鬱憤をさらって行った通り雨

きれいごと並べてボロがひよいと出る

退院にこわごわ触る手術跡

首さわる風がこの頃暖かい

秋田県 湊修水

昼寝するブランも提げて山の宿

罹災地もさくら見事に咲いて散り

仮設いま二年目迎え息苦し

白羽の矢 錦帯橋がクシヤミする

黒猫がよぎり見舞いの歩をはやめ

横浜市 丹下智洋子

夢あまた編んでほいた古毛糸

嘘多い女に貰う甘い飴

もういいよ泣いてもいいよと鬼が言う

徳島県 安宅美代子

吾が家族ドラマにすればベストテン

菓子折りが詫びに來ているかすり傷

北の窓にあなたが来れば春になる

病窓へ小鳥が朝日連れて来る

寝屋川市 酒井勇太郎

リストラの風が五月晴れに吹く

年金が兜に化ける初節句

今もなお卒寿の母の手がぬくい

窓際で資格ばかりを取っている

鳥取市 坂田和歌子

頂上を飛べぬ鳥で終わりそう

鯉のぼりタラリ昼寝の時間です

胃が痛み身近な妻のせいにする

無人駅誠に桜きれいです

熊本県 高野宵草

うつり気な蝶が気づかぬ草も咲く

なに着ても似合う自信が社交すき

饒舌がぼんぼんはすむ旅帰り

若者がいない立派な消防車

唐津市 丸 晴 子

春うららこの世がみんな円く見え
つぎはぎの帆を荒海に乗り入れる
手塩にかけて要領の悪い子を育て
以下余白 日記に涙埋めて閉じ

大阪市 川 原 章 久

天かすを上手に使う新世界
蓮の葉でころころ遊ぶ露の玉

若いから踊るアホウで事がすむ
満ち足りて手に杯と煙草の輪

和歌山県 杉 山 精 子

源流の水の清さを忘れまい

すんなりともたれていよう夫の背に
悠久の風と戯る杉木立

今日よりも明日はもっと青い空

八尾市 村 上 ミツ子

転んだら転んだとこで起き上がる

当り前をありがたいことだと思ふ

何もかも知りすぎている古帽子

場所に合う絵がだんだんと上手くなる

鳥取市 杉 本 孝 男

頑固ものひとり相撲が好きらしい
よく動く母さん風邪も避けて逃げ
努力せず答えばかりを聞きたがる
貧乏神と仲よし我慢には強い

長電話 娘の片足は猫とじやれ 八尾市 生 鳴 ますみ

車椅子押すために母帽子買う
あつさりと砂吐きそうもない浅蜷
欲捨てた途端に運が向いてきた

横浜市 金 森 徳 三

下車前途無効切符の人生か
土俵際こたつ蹴るほど力入れ
役立たぬ物だけ残す家風かも
絹さやを摘んで朝餉に間に合わす

出雲市 浜 圭 三

五月晴 狭い庭でも美しい
やや褪せたお多福面に紅をさす
日展の帰りの湖がすばらしい
いい連れが出来て歩いた戻り道

羽曳野市 芦 田 絢 子

風みどり無口になった桜の木

病廊の混雑に居て気が和む

釦かけ違ったままで嫁姑

プライドが邪魔 輪の中に入れない 和歌山市 楠 見 章 子

衣替える度服が瘦せていく

どんでん返しのシーンうっかり寝てしまい

石段で自分の重さ思い知る
母方の酒豪ぞろいの血が流れ

鳥取市 福永 ひかり

米子市 林 風子

命運を分けるコンマの一秒差
近視眼 細かいことを言い過ぎる
ゴメンネとひとこと言えば済む話
安心をしてる夫の傘の中

神戸市 向井 泰子

素顔がいい 葉桜の風が吹く
ままごとのように一合米をとき
喋ってしまつて朝顔がしばむ
眼の奥へ焼きつけている負けいくさ

吹田市 西岡 豊

胃袋で跳ね回つてゐる鮎の稚児
ひよつとしてひよつとするかも回り道
プロポーズ笑顔で受けて腫で返し
金婚に今改めて妻思う

鳥取市 富山 雄幸

緑風に泳ぐ緋鯉と語ろうか
紅白のつつじ時めく里便り
空元氣 妻の叱咤で燃えて来る
傘寿まで生きた証の皺笑う

今治市 塩路 よしみ

肩書きがとれてジョークが湧いてくる
白旗をすんなり振つて生き延びる
カトレアを賞めて育てた苦は知らず
神様が疑いなさる絵馬の誤字

蒲公英やおまえも守るもののなく
イントネーションの耳になじまず梅田駅
病院を出る無罪放免なり
ワンフリーズで終つてしまふ夕焼け小焼け

羽曳野市 山本 たけし

安らぎの日々なお遠く基地の島
飢えた愛そつと包んでくれた保母
負けたけど慰められた蔦の青
王朝の姿雅に京の初夏

大洲市 横田 放人

化粧室 男はネクタイなおすだけ
薪風呂が芯まで温い里帰り
七十年 千人針にも生かされて
換気扇 孫がきてからよく回り

高槻市 江原 秀夫

川底の小石の叫びは届かない
孫を見に十年振りの夫婦旅
気遣いはほどほど仲の良い二人
頂上で釣瓶落しの影を見る

鳥取県 橋本 多哥由

名言を準備スピーチ締めくくる
道草に教えられてる人間味
雑草と呼ばれて若い芽が伸びる
どん底の暮らし平気でひとりいる

静岡市 大村正雄

靴音を聞いて天ふら揚げはじめ
長療養 五臓の位置をよく覚え
宗教が世界の平和かきまわす

万札をこわせば早い遊園地

今治市 越智青園

大型連休充電放電忙しい
追い風に嘘八百も走り出す

火の章で燃えるところまで燃えてやる
宮参りみんないい子のはずだった

大阪府 奥野義夫

皮むけるほどに髭剃る初デート
老いの春 灯油一かん買いい足そう

言い負けたくやしき鱧の骨を断つ
言うよりも言わず黙っている威圧

唐津市 山門タミ

女性車に譲ってくれた十頓車
たんぼが塀のすき間に迷いこみ

口論の夫婦に風いだ初夏の海
塵溜めに余った苗がよく育ち

兵庫県 西井つや子

腰伸ばすと新芽の合唱きこえます
熱いお茶 心のしこり取ってくれ

でこばこの道に落ちていた情け
愛すれば答えてくれる土が好き

沖縄県 杉谷一栄

遠い日の思い出 波の上に浮く
分骨で生れた島に姉かえる

孫ひ孫 抱かせて貰た果報者
記念日に夫婦いいこの宮古島

鳥取市 藤ふうこ

持ち駒は白馬いつかは天をゆく
古の心伝わる墨をする

帯きりりいつも正座の母だった
いいでしょう心決めれば風みどり

鳥取市 植田一京

老父が背をのばし節目の音頭とる
車椅子春のうららを押ししてゆく

十万億土 今どのあたり母の鈴
決めていた別れの台詞出てこない

倉吉市 山中康子

家族愛つかずはなれず思いやり
国籍を問わぬ手話の目が潤んだ

明日光る娘のはなむけに鏡拭く
腹割れば虫もおさまる嫁姑

大阪市 池田一男

句点打ち行を変えよう丁度古希
芯のない男集まる吹きだまり

家という檻 居心地がよすぎます
酒うまい日は体調のよい証拠

和歌山市 福重美子

擦れ違い夫婦支える伝言板
百万円当って貝は蓋をする
一人寝の寂しさ猫を抱き寄せる
コーヒーより高いお水を買って飲み

鳥取市 岸本宏章

健康がうれしい今日も腹が減る
思い出のひとつひとつに詩がある
丸い石ばかり積んでも頼りない
領海に人間だけが縛られる

和歌山県 中村君枝

連休もどこ吹く風と自営業
新世紀見届けたいと九十五
出世払い田舎の老母に借りたまま
荒波を越えて安堵の夫婦舟

鳥取市 山本益子

いじめっ子 流行の自殺真似るなよ
五月晴れ幟の武者が守り神
蜂たちの憩うつつじの開花待つ
春うららパチンコ店も浮かれてる

大阪市 小林周信

男の料理 隠し味へは酒が過ぎ
七十で習うダンスの背弾み
定年の初日 朝から爪を切る
連勝へ監督 昨日のシャツを着る

岐阜市 平野吐夢

梅雨入りが待たれるハナエモリの傘
前払いしたので続く英語塾
嫁が来る島の波止場に人の垣
母さんのようになりたいお下げ髪

島根県 槻谷仲子

孫去んで静かな夜の噂する
桜散りまだまだ寒い掘炬燵
他人の花ほめて連休話し込む
ポイントの黒が流行 翔ぶ女

尼崎市 田辺鹿太

嬉しいとひとりで笑う癖がある
相づちを打って上司に媚びる蟻
一病を得て世の中がよく見える
仲裁に向かないカッとするタイプ

高槻市 傍島克治

いまにみろいまにみろよと老けてゆく
言い慣れぬから美辞麗句舌もつれ
庭先に木の芽匂いて初夏が来る
寝込んで口数減らぬ妻である

大阪市 立蔵信子

山育ち行きたいところ山と言う
鉄せんの伸びゆくつるをはめている
誕生日 花はないけど夢がある
言い訳のための言い訳してる顔

大阪市 松永会美

同窓会 想い出と街よみがえり

司会者を無視してはすむ同窓会

朝風に匂う路地裏 沈丁花

高槻市 芦田静江

遣り水に琴の調べが透きとおる

ロック華やかお染久松 浪に乗る

法廷に演技が旨いボケ上手

鳥取市 徳田ひろ子

満月は完璧とてもかなわない

根腐れるほどの情けをかけたらしい

べたなぎの海も息切れして荒れる

横浜市 荒井広和

有頂天 忠告などは馬の耳

愛想の笑いもストレスが溜り

耳元へ囁く風の私語が好き

島根県 児玉幸子

木瓜の花 造花のように咲いて居る

雨を呼ぶ声賑やかに蛙なく

山陰路ぽっかり赤い日が沈む

米子市 猪森スミエ

指切りをした父さんの靴の音

夜勤明け疲れ吐き出す高軒

荒れた手に母の温もり息吹いてる

寝屋川市 籠島恵子

歩いて帰るすこし酔っているのです

信号無視三度としての帰り道

若葉グングン目かくし丁度いい具合

米子市 小塩智加恵

親より子 子より孫のが高級車

主婦の顔 妻の顔にも薄化粧

もらい物まず仏壇が毒味して

鳥取市 田中友子

鳥かごを出てから鳥が迷いだす

宝クジ弓射るまでの夢を見る

流行に負けぬ個性の服を着る

熊本市 北川一進

服装もまちまち町の賑やかさ

冷蔵庫小さく二人だけのもの

お見舞にあれこれ迷うお菓子箱

八尾市 驚見章

病室を灯して花の雨静か

真夜中を起きて淋しく人恋いぬ

椿一輪 音なく落ちて不幸の序

和歌山市 山根めぐみ

はぐれ雲ふところへ抱く潮の彩

かけ合いに行くスカーフの色変えて

恙ない暮しに花とたわむれる

米子市 池尾保子

岸和田市 不破仁緑

残り火をきれいな赤で燃やしたい
仏壇を閉めて一人の夜になる
大切な話は奥の部屋にする

堺市 志田千代

熊本市 増田一乗

思い出に話す順番決めてある
菓子折に袖の下まで包み込む
我が家では妻の突っ込み冴えに冴え

八尾市 大内朝子

大阪市 川久保睦子

里ことはぬくい情けのある旅館
理解者はわたしひとりでいいじゃない
記念日へ妻の笑顔を用意する

伊丹市 延寿庵野鶴

唐津市 山門幸夫

磨かねば光らぬ珠をみんな持ち
ヨードン魔の時を追うネズミ取り
一つずつ出会いを乗せて回る寿司

寝屋川市 阪上高栄

横浜市 菊地政勝

褒め上手なかなかカルチャー止められぬ
鑑にもしたい貞女の友を持ち
鐘乳洞 地底のロマンが威圧する

横浜市 保田絹子

愛媛県 中居善信

歩き初め祖母パママのお供連れ
添い寝した母を寝かせて子は遊び
肩寄せてたこやきつつく街路灯

しっかりと粽結わえた母健在
疑ってからチクリお腹が痛み出す
ゴキブリも忙しそうに生きている
孫生まれ親に感謝の念募る
角界に旋風起こすか栃東
功績も春の叙勲で花開き
逃げ道を一ヶ所つくり子を叱る
陽のあたる場所に出よう言った亡母
あの頃の話になると雄弁家
野仏に里の今昔聞いて見る
野仏は出征兵も見送れり
野仏は桐の小箱も迎えけり
道草の秘密大事にとっておく
入院へ玄関の鍵持ってゆく
株欄も見ているだけの呆け防止
ブライドが邪魔して何時も踊れない
それも甲斐性幾つも噂引きずって
足を地につけると視野が広くなる

大阪府 団野 恒

朝夕の庭に出てみるライラック
子等帰り広場の幟降ろされる
実の頃に又会いましょう花杏

神戸市 船津 とみ子

生きている大きな声の友が好き
風呂屋さん開業どつと笑顔寄る
駐輪場整えここはめし屋です

和歌山県 村中 悦男

外人に日本の心教えられ
あつさりと値引きされては落ちつけず
顔色を変えたところにある本音

鳥取県 山本 正光

骨折の連鎖反応七つ八つ
度の合わぬ眼鏡余分な事が見え
追突をしない程度のお付き合い

兵庫県 西山 八重子

下ばかり向いて歩けば石の私語
逆縁へ母の白髪が増えつづく
独り酌む酒から貰う知恵袋

高知県 百田 幸

ミニバイク重さ制限ないだろか
あくびした泣いた笑った児の肥立ち
力にはなれぬ話を聞いている

池田市 藤井 計光

自画自賛 変人だとは思わない
肩書きをはずしやさしい父となる
沖縄は辛抱強くねじを巻く

富田林市 中井 アキ

みそ汁に妻のさんげが浮いて居る
ウグイスの夫婦けなげに餌を運ぶ
読経して無に程遠い炎抱く

(前月分) 米子市 服部 朗子

手を打って長寿は孫と歌っていた
凶案かく少女の夢が楽しみだ
一息の水が私を整える

八尾市 村上 剛治

連休は他人の動きをみて過ごし
りハビりに希望つないだ麻痺の脚
許されて心の広さ知りました

高槻市 小林 一完

吸う場所に困って煙草やめました
ぎこちない言葉が事実述べている
砂をかむような私を妻我慢

和歌山市 木村 親路

中流のゆとりヘローンと言う刺客
出る杭は打たれますますます強くなる
泣き上戸幹事よほっておきなはれ

米子市 永井三津子

迷い抜け生きる辛さへ立ち向う

柵の透き間に嘘を畳み込む

竹ノ子がひたすら空へ伸びたがり

岡山市 藤原一平

庭隅を彩どる産直チューリップ

餌袋を五色五匹の鯉が追う

キラウエア噴煙無限地獄旅

大阪市 宮本奴夫

嘘の舌 右へ左へ躲される

散る花と咲く花あって四季巡る

虎の子の財布孫には向きを変え

東大阪市 今岡貞人

朝早く五キロ挑戦万歩計

なるようになる平和の中にある私

言うだけは言って納得して帰り

尼崎市 中澤向西

背伸びして幸せそうに見せておく

定年の亭主便利に使っている

娘の匂いだんだん亡母に似る怖さ

尼崎市 森安夢之助

手も口も裏を返せば虹が消え

天下り銭の重さで内輪もめ

手の平で豆腐の切れる男味

高知市 細木子龍

声だけを聞けば安らぐ娘の電話

百姓の好きな男で嫁がない

今日もまた嘘の言えない靴をはく

羽曳野市 麻野幽玄

薬みな止めたらとれた頭痛

風吹けば飛べる軽さにひからびる

一言ですむその一言が言えぬ地位

和歌山市 森口美羽

頭下げることが多くて五月病

見切り発車されずにすんでほっとする

信念を曲げない人が折れてくれ

富田林市 山原昭水

ふる里の源氏螢を自慢する

山陰路 仏も鬼も出会う旅

寝言でも負けるもんかと言っている

大阪市 今西静子

花の株分けて団地仲がよい

わがことになればできない聞き流し

一流のロビーで友と背のびする

鳥取市 津村静枝

五月晴れよくぞ男の吹き流し

子供の日 街に子供の声がない

五月晴れ期待と希望満ちて来る

和歌山県 尾田綾子

思いきり老後設計変えてみる

よれよれの財布ねぎらう暇がない

差し掛けた傘が絵となり縁となり

鳥取市 西村半畳

全くの突然妻が茶髪した

竹槍を作った鉦が捨てられず

古文書を尋ね旧家の紙魚なかも

綾部市 藤田芳郎

南無と書く 筆が渴きを言わぬよう

忘れたいことあり古いハーモニカ

鈴つけた猫と身の上話など

岡山市 山磨行子

忍従の川を泳いで戻る鮭

建て替えへ残す亡父の煙草盆

どの家も百花繚乱平和だな

大阪市 尾崎黄紅

犯行は隣の猫か鉢が割れ

まっすぐに生きているのに流れ弾

夜中の電話ぶつんと切れてほっとする

高知市 桑名知華子

みどり子を囲み笑いがはじけ合い

今日をよくみるため朝のメガネふく

にこにここと笑うと風も甘くなり

福岡県 本田忠男

猪が親芋のこし春山へ

バーゲンの女は血相までも変え

従いて来い啖阿空しく尻敷かれ

兵庫県 北川とみ子

どんぐりが競いあつて村まつり

納得のいかぬ噂が落ちている

肩書きがなくて左右がよく見える

旭川市 朝倉大柏

この頃はやたらと増えたひとり言

容疑者になれば顔までそう見える

要領の悪いところが父らしい

阪南市 正橋正

男の美学 強かさより潔さ

躊躇わず遣りたいことは遣って除け

責任回癖症候群の政官企

尼崎市 松下比ろ志

大仏を見上げて眼と眼やさしかり

春一番吹いて男が門出する

ちぐはぐな妻と母との見る夢

唐津市 江川青琴

口八丁 手八丁です孫娘

午前二時 目覚めてからの夜の長さ

真夜中にひねった一句朝忘れ

東大阪市 谷口義

玄関で待つていたのは捨てた大姑の堪忍袋のびちぢみ

借金を背負つて高いビルが建ち

海南市 谷口義男

生意気に私を叱咤してる影

風当りなどは気にせず言い放つ

文句など言うなと多数決が出る

札幌市 三浦強一

正論を吐き矢面に立つ美学

ポックリ死願う二人の医者通い

友情のパンチで落ちた目の鱗

唐津市 宗弘

うさぎ小屋でもよし笑あるねぐら

失態は部下に引き継ぎ天下る

五割引き先着順に並ぶ妻

和歌山県 藤井春子

ゆっくりと試練に耐えて咲かす花

借りて来た言葉出てこぬ緊張感

平穏な日々が続いてゆく不安

高知県 桑名孝雄

三文の得もないから朝寝する

自然体 僕のは前後隙だらけ

登園拒否いいよまだまだ先がある

和泉市 横山捷也

結納の娘のしつけ糸を抜く

確率の低い予報の雨に会う

過充電ならぬか退職後の長さ

鳥取市 倉益一瑤

春うらら無言電話にからかわれ

ママあのねパパがきれいな女という

八人目の敵は妻だとまだ知らず

唐津市 福島紀一

老人大学八十歳に励まされ

平均寿命知らぬふりして生きている

終着駅 友がだんだん降りてゆく

島根県 三代朝子

お嫁さん来ると噂は風に乗り

儚くも消えた出合いの遠い日よ

出合いから結ぶ縁をつなぐ幸

米子市 服部朗子

まな裏に藤のもようの亡母の帯

夜響くハートの鼓動と付き合つて

儀式終え約束果し百日忌

鳥取県 藤山弘子

おしどりが早歩きする昼さがり

次々と咲き出す花と会話する

縁側で自慢話とお茶をのむ

鳥取市 石上悦子

完璧に決めた相談持つて来る
片耳にほめ言葉だけ溜めている
うつむいて鈴蘭下卑た我を見ず

宝塚市 飯西ミサヲ

会わずんば想い出さない人に会い

雨の日は間違い電話でも嬉し

出しやばりに指図をされてうろたえる

東大阪市 北村賢子

口とがらせ孫がお礼のチュウくれる

人生のいい事だけをメモしとこ

つよがりに悲しい嘘が見えかくれ

倉吉市 大下智子

肩の荷は死ぬまで軽くなりません

人も来ぬ空き地に花が根をおろす

寝顔から想像出来ぬやんちゃっ子

鳥取市 森明美

ぬくぬくと若いうぬばれ持ち歩き

裏道に利休ねずみの雨が降る

美しい嘘にルージュを塗っておく

鳴門市 八木芳水

孫一人育てるパート厭わない

清貧を守りつつ買う宝くじ

吾が顔に戻る召集解けた日に

出雲市 梅ミツエ

思い出のさくらの下で父子酒
地藏さん私に語っているようだ
橋の下うず潮巻いて春がゆく

交野市 山川日出子

余りにも美少女に似たアマリリス

ベトナムで日本刺繍機フル回転

あの方に口止めされたと日記帳

島根県 菅田かつ子

生きている証 苦があり楽があり

河岸であひるの中にもあるいじめ

里へ来て積る話をするメダカ

島根県 松本聖子

旬の味 一品そえて病院へ

気をもんでかける電話の長いこと

昨日までの無事が無性に恋しくて

日立市 加藤権悟

快食快便 男の靴は良く弾む

二次会の酒が本音の顔にする

華麗さを花は三日の彩で咲く

和歌山県 上岡正直

「信用」の看板の裏穴だらけ

新婚さん若い二人と限らない

少年期 道草くって道を知る

愛媛県 安野 案山子

熊本県 岩切 康子

音程が外れていても楽しそう
高飛車な指に光っているダイヤ
遣り遂げた少年の目が美しい

尼崎市 野瀬 昌子

羽曳野市 西村 りつえ

一切れのメロンに昔ばなし咲く
恋をする女は二途台風の目
かごめかごめ一人が抜けて輪が乱れ

羽曳野市 川田 晋

豊中市 みき わきみ

広げたが不法駐車がふえただけ
一徹な父のおかげで嫁き遅れ
夫婦喧嘩しない実家が遠過ぎる

岡山県 土居 ひでの

島根県 福岡 博利

老母さんの奇跡が癌を克服し
いとこ会 奇想天外居て楽し
三回忌 亡母への手紙まだ続く

十和田市 阿部 喜久江

和歌山市 武本 碧

怖いもの知らずに育つお嬢様
ごめんなさい仲々言わぬ反抗期
肩書きがつき強くなる風当り

羽曳野市 安芸田 泰子

今治市 中村 好恵

旅に出た主婦の朝寝は許されよ
筍に木の芽を添えて宅急便
終い風呂 今日一日の大欠伸

生きのよい新芽で作る蓬餅
今日もまた予定こなせぬ自己嫌悪
すぐ来ない答え疑う癖がつき
回転のよすぎる舌が恥を蒔く
亡母からの小粒のダイヤよく喋り
宅急便で嫁から初のカーネーション
DOユアセルフ地震の始末まだ続く
年金の元がとれたと喜寿祝う
寿命なり過労死も飲み過ぎも
今日あった良いこと夕餉の膳にのせ
いきいきは老眼鏡を拭いたとき
型どおり動く木馬はつまらない
セールの巧い話に酔わされる
隠しても本音が透ける瓶の底
胎児でもモーツァルトに聞き惚れる
名跡をつぎ芸風が深くなる
得意先名簿が財産だと思っ
裏側を覗いてからの人嫌い

鳥取県 原 みさを

古希紡ぐ横糸すこし派手にして
広重の絵からはげしい雨の音
台所に結局しわが来る政治

鳥取県 橋 谷 静 江

天職と決めてパートへ励む母
ゆったりと落着く椅子は我が家だけ
困ったら何時も子供が味方する

尾崎 尾 宮 弘 治

喜寿の妻祝う指輪が面映い
作業着も交じり会議が燃えている
罹災したペットあれから子を産まぬ

今治市 村 上 久美子

皆善人 意見が合わぬだけのこと
期待などされぬ雑草意地で咲き
肝っ玉母さん泣きたい時笑う

尾崎 長 浜 澄 子

いつだって浮かれ上手な鬼の面
春は饒舌おんなの耳を桃いろに
豆御飯 妻の企み知っている

大阪市 福 岡 雅 子

思い出を全部肯定したい今
白砂青松思い出の中海光る
時計など見ないで聞いてこの話

和歌山市 吉 村 さち子
プライドが折目正しくズボン穿く
昔はと言いたいとこで口ふさぐ
横向いたままの返事が胸をさす

姫路市 服 部 一 典

差別消え男女のことば見うしなう
職退いて充電ばかりの日が続き
なにもせぬ転ばぬ役人出世する

兵庫県 森 脇 和 子

泣きどころ一つ押えて許し合う
極楽浄土で輝いている亡夫の星
下積みの椅子中流へまわり出す

犬山市 早 川 盛 夫

目覚ましのこのバカたれが日曜日
アルバムを開いて暫し山の旅
風呂上がりやはりビールの栓を抜き

倉敷市 家 守 政 子

マニキュアをした手で料理欲しくない
好きな服グイエットして着てみます
一病と仲良く遊ぶ老いの坂

倉吉市 高 多 博 丈

孫の鯉 薰風に舞う五月晴れ
太陽にへつらっている昼の月
禁煙車 紳士堂々喫っており

河内長野市 大西文次
猫の手を借りたい猫に手がかかる

鷺の輪が青い大空独り占め

高槻市 執行稲子

もひとりの私が噛んだ過去の傷

垣間見る贅沢哀しいパンの耳

千葉県 大川晩翠

何事も痛みの分かる人がいい

祭り好きこの世の憂さを吹きとばす

泉佐野市 稲葉洋

凡人が目立つ周りが変り者

日が暮れる当然明日を疑わず

八尾市 平川幸枝

風向きが変り空気が冷えてくる

蓬つみ愉しい話いい空気

福岡市 井崎ミサ子

一つでもほめてもらうと出るやる気

肩のこりほぐす夫の手が温い

寝屋川市 太田とし子

薄墨の桜ぼんやり褒められる

ブランドにいたずら好きな目が走る

河内長野市 妹背尽呂久

人間の節目を狙う鬼が居る

今生きていることだけは真理だな

尼崎市 軸丸勝巳
花に雪イエローカード天が出す

叙勲名簿見る眼差しも七十歳

橿原市 西本保夫

平和から公害鳩は嫌われる

居るだけで何かの絵になる老夫婦

八尾市 高橋明子

八十になっても白髪染めて居る

氷河期に出合う娘の運不運

高槻市 乙倉武史

道草をした雑学も役に立ち

ペランダの花へも蝶は気を配り

和歌山市 和田美寿子

あせっても出来る事ない二日酔い

戦いも和む心地の五月空

池田市 木村一笛

甘辛の文句が言える我が家だけ

竹割った気性に惚れたい女

大阪市 平井露芳

副作用気になる薬のわかる本

ここだけの話が別の場所でもれ

鳥取市 山宮愛恵

嫁ぐ娘の準備に寒い父の背

信頼の仲間 腹芸などいらぬ

迷い猫心の旅は開かない
東京都 瀬戸 きん子

ご先祖の棲んでた町から嫁が来る

唐津市 山口 ふさ子

咲き競う花にお礼の声かける
髪白く赤いベレーの粹に見え

松江市 安食 友子

公園のベンチ独りで温もらぬ
般若面ある目論見で控えてる

鳥取県 権代 康女

弁当の中で華やぐミニトマト
失敗もあって絆が深くなり

富山県 増田 紗弓

絶景へただ沈黙の褒めことば
ゴールまで風の私語など乗せてゆく

大阪市 三浦 千津子

愚痴言わぬ母の居るとこ凹んでる
振り出しに戻り気儘な袖たたみ

大阪市 中井 正秀

一日に一善すると早起きし
寢覚よし今日は良い事ありそうだ

今治市 渡邊 伊津志

明日のこと確かめるため良くしゃべる
風紋が波と結んだ若い朝

思いやりあって招かれ胸弾む
庭木はめ樂しひととき茶の美味さ

香川県 田中 ふみ
松江市 松浦 登志子

恋の猫邪魔したいよな気分です
胃腸薬捜す男の午前二時

兵庫県 高見 末野

政界に耳目ふさいで田植えする
初夏の陽に猫といっしょに伸びをする

静岡県 増田 扶美

伝統の名舞台に酔い燃える彩
揺れる灯に母の声聞く夕間暮れ

唐津市 松本 圭

昔とったキネヅカほどに役立たず
銭湯で社会勉強核家族

唐津市 岩崎 實

ほとぼりの覚めるを待っている二人
渋滞の車を眺め農仕事

唐津市 林 公一朗

幾山河越えて男の山になる
花の意に惚れて蝶々乱れ舞う

東大阪市 松山 隆

重い荷を背負う背筋が伸びている
お節介フンフンと腹の虫

二次会へブレイキ効かぬのが一人
我武者羅の人生後を振りむかぬ
香川県 神保坊太郎

海外で逢った同胞そつぽ向き
大阪市 島崎孝一

床中で浮かんだ秀句朝消える

出雲市 加藤スズコ

通学路 黄色い帽子手をつなぎ
てふてふも春の調べと花によ

静岡市 三浦つね

お茶の芽が一寸遅れて喋り出し
連休で体も財布も疲れてる

大阪府 原みえこ

肝っ玉母さんという肥満体
どん底と聴いてさよならとは言えず

鳥取市 山本崇

朝な夕 独り遊びのペンと紙
のほほんと暮していても痛む足腰

島根県 武島ちよえ

朝市の素顔がとっても新鮮な
気まぐれな音はジョークか古時計

松江市 佐野木みえ

別れても時々二人はお茶を飲む
時々は反抗しながら子は育つ

湯の香りたつた四人のクラス会
旅立ちか雪原で舞う鶴の声
静岡市 中西雅

野良仕事 乱れをなおす水鏡
田植終え夕餉おいしくにぎやかに
島根県 谷岡ふみ

悟り開くまでのドラマが面白い
見て聞いて喋らないから秘書でいる
横浜市 斉藤よし一

春が来た蝶蜂 鳥がやって来た
待たすのもよいが待つのもよい五月
広島県 森川抜智

いいわけをじつとこらえた薬指
人間不信なすびの苗がうなだれる
兵庫県 倉垣恵美

水芭蕉ほとりが好きで人待つ
思い出のジャズ車間距離おいたまま
藤井寺市 鴨谷瑠美子

三年も六十年も縁は縁
一人居に出るゴキブリのはしこすぎ
大阪市 中田あい子

逆境は心を磨く砥石です
健康の目安は夫の靴の減り
枚方市 二宮紫鳳

鳥取県 福田登美
何時までも親の傘から抜け出せぬ
ずけずけと蝶の前身聞きたがる

羽曳野市 徳山みつこ

風は緑のブラシで夏を塗りにくる
梅雨晴れ間 私も機器もフル回転

八尾市 神原まさと

角座から蛸焼並ぶ人数え
パリに行く用意に正露丸も入れ

和歌山市 木村初子

生きるとは死ぬとは桜咲いて散る
わけもなく侘びしい夜のレクイエム

滋賀県 中宗明

朝晩のお経を孫がリードする
手抜きして妻にみつかり借りが増え

鳥取市 岸本孝子

耐えて咲く花は苦しさなど言わぬ
子育てに親の教えを小出しする

八尾市 與田明

相続にだんだん土地は瘦せていく
掘るたびに日本古代の謎が増え

岡山県 富坂志重

歌声に引かれ立寄る万歩計
未来追う小さき曾孫に夢もらう

松江市 小西素子
独り居てきままにかける長電話
春ざむに夫の好みの鍋にする

八尾市 山本宏

街頭でティッシュ沢山幸運日
うつが来て針葉樹の林行く

豊中市 岸田知香子

夢馳せた万博跡地二十五年
廃線の枕木渡る風さやか

大阪市 鈴木トヨ子

今日の幸 虹のかけ橋予感する
チューリップそよ風うけてみな笑顔

高槻市 宮城如水

山並の風に乗りたい五月晴
影落とす路地がわびしい赤ちようちん

寝屋川市 太田藍子

同室の患者悪知恵つけてくれ
入院で急に優しくなったパパ

河内長野市 印藤智子

医者様の薬まじめに飲んで老い
商談をお国言葉で盛り上げる

兵庫県 大谷幸次郎

七転びまだ藁しべが拾えない
すんなりと育った足で襖あけ

岸和田市 亀井皎月

晴れた日は見晴らしのきく杜長室

冷夏予報はずれて猛暑襲い来る

鹿児島県 大山舞鳥影

次の世は子を産みたいと老いた女史

次からは善処しますと拒絶され

愛媛県 宮本末子

信じきる人に探りを入れてみる

わが刻と思う暮色の山桜

岡山市 清水金太郎

孫の嫁 見て死にたいと欲が出る

助手席へ妻だけ信じて乗ってくれ

鳥取県 高尾京

散ることを予想しながら咲いて居る

何れ往く道 花は散り急ぐ

富田林市 大橋鐘造

正直な鏡に熟女の乱れ髪

ゆらゆらと月がゆれてる露天風呂

和歌山市 松本三九

美人よりナースやさしいほうがいい

アル中になる気で飲んだ訳じゃない

河内長野市 水谷笙子

父の輪が小さいびつで憎めない

セールスを巧く断る芸を持ち

宝塚市 黒台伊佐武

踏まれても笑顔絶やさぬ芝桜

お待ちやすぶぶ漬でもと白々し

箕面市 木村天弘

出世街道するい奴ほどよく走る

忠告を聞く耳持たぬイヤリング

弘前市 櫻庭順三

砂嵐らくだは歩むこともなく

砂丘渺茫 歩けば砂に呻き声

島根県 岩田三和

苗植える会議に出席したつもり

わが涙おとし大地に山の百合

寝屋川市 後藤黎之助

口止めをしてもこの人活火山

おおらかさ無神経とも人が言う

寝屋川市 森茜

八幡さまの神馬ストレスためてはる

ひよんなことから思いだしたという便り

松江市 松本知恵子

幸せな人で行き交う花の下

クリントン朝駆け抜ける爽やかさ

枚方市 森本節子

菜の花を両の堤に遅い春

物差しはゆるめゆるめに計ってる

燃え尽きるほどに咲きたい薔椿
 尼崎市 河津正治
 十指みな主張が冴える人形劇

倉吉市 山本玲子
 気取るからおしゃれがキザになっている
 皮下脂肪これはわたしの持ち駒だ

西宮市 古谷ひろ子
 あの人にこだわったのも恋なのか
 一段をおろそかにしたスネの傷

和歌山県 久保ふみえ
 胸一ぱい母を想うた七回忌
 品定めこれに決めたとうなずいて

松江市 浦辺静江
 遠い耳 何度も受話器持ち替える
 冗談が言えたら多少肥えるでしょう

大阪市 亀井円女
 花はみな白が好きです頑なに
 ハードルも規制も今は無い平和

新潟県 高野不二
 母の日も母の手料理祝う酒
 回転すし川下同じネタばかり

柏市 上鈴木春枝
 自画像の何と淋しい瞳だろうか
 お祭りにしようよ五十回忌です

兵庫県 中野とよ子
 汗流し模範になるぞと握る鋏
 屋根裏に家族の絆がしみついて

横浜市 清水潮華
 満タンのストーブ寒の戻り待つ
 待たされた電話でかける長電話

伊丹市 榎谷郁子
 想い出を抱いて何処へ行く落花
 ベランダの鯉にも大きな夢がある

河内長野市 木太久正一
 ライラックわが家の自慢咲き匂い
 社員研修 少しスパルタ不況風

泉佐野市 大工静子
 毛虫蝶 老いも変身してみたい
 米屋さん得意逃さぬ日清油

岸和田市 磯崎弘象
 我輩は狂猫病を怖れてる
 氷河期を越えてただ今五月病

祭柳川八郎五郎 大会誌上全国

題と選者(2句)
 去来川巨城
 須田尚美
 吉田州花
 谷口茂子

「奥」
 「雑詠」
 大野風柳
 成田弧州
 佐藤美枝
 細川不凍

締切 8月10日
 会費 1000円
 投句先

〒047 小樽市石山
 町3-25

松田竹生方
 北海道川柳連盟
 五呂八祭運営委員会

—水煙抄

秀句鑑賞

—6月号から

木村 あきら

開発と言う名で森がひとつ消え

土居 ひでの

文明が極度に進んでくると、地球から緑がだんだん消えていく。そこで生れたのが緑の週間で、植樹祭などが開かれる。一本を伐る者は十本を植えないと、来世紀の地球は守れない。今の時代を適確に捕えた秀句と思う。

頂点に立つて空気の薄さ知る

大橋 鐘造

頂点は孤独で空気も薄い。上へ登るほど、酸素も希薄となる。その上、四方からの風雨が容赦なく襲いかかってきてノンビリとはしておれぬ。頂点を目指す者、酸素ボンベをお忘れなく。

七人の敵に身内が一人いる

今岡 貞人

ウガッタ句に驚いた。その身内の人は、七人の中で一番の強敵だろう。ご用心。昔の義

経と弁慶は、強敵変じて一番の味方となった。笑わされた。

試されているんだ泣いてなるものか

朝倉 大柏

災難は忘れたころにやってくる。いや、忘れぬうちに来るのかも知れぬ。突然の被災でも神の試練と受けとめて立ち上る姿をよく捕えている。

温泉はいいなふるさと創生費

高野 不二

竹下内閣の時、全国の各市町村に一億円ずつの「ふる里創生資金」が交付された。作者の町では温泉を掘って町おこし。私の町（香川県白鳥町）では、西尾某名誉主幹と橘高薫風現主幹の句碑が二基建立され、奥の細道現代版・句碑の道を目指して町おこしを始めている。

孫五つ根掘り葉掘りの好奇心

西岡 豊

五歳の孫、見る物聞く物珍しいものばかりで、問いたださずにはおかない。「お父さんお母さんは大人のくせになぜ一緒に寝るの」若いお母さんでは返事に困る。

わだかまりゴミと一緒に灰にする

川島 和歌子

明日と言わずに今すぐ、ゴミ袋と一緒に詰めて焼却場へ処分しよう。

にぎり拳の中にわたしの虹がある

斎藤 房子

たいへん夢の持てる句と思われる。両手一杯、虹をつかんで立ち上る姿が目には浮ぶ。消ゴムで消せる嘘なら許せそう

越智 青園

善人は嘘を言えない。それでも和をつくるための小さい嘘ならきつと許されることだろう。リズム感のよい表現に敬意を表する。

小姑を味方 外堀埋めておく

福永 ひかり

核家族化の進む中、何世代かの同居だろう。年代が近い小姑をまず味方に引き入れる。それで外堀は完全に埋まった。

怖いのは妻が無口になったとき

的場 十四郎

世の亭主族の九〇パーセントは恐妻家と言われる。その山の神の黙秘権行使。クワバラクワバラ、暫くの間、ソーッとしておこう。散るすべを知らず造花の褪せたまま

清水 潮華

いくら美しい花でも、蝶が訪れない造花は寂しいもの。彩褪せた造花の姿をうまく表現され、敬服した。

沙湖抄

小出智子選

影はふたつ黄昏れながら揺れながら
途中下車未完のままの絵を掲げて
子の本をめくりさみしき腕まくら
焼肉のCM焼肉でも食うか
大風呂敷広げて包むものがない
春昼やひととこ冥きわが頭
朝の電車で青春に囲まれる
弁解したら傷口が広がった
よその子が突然大きくなっている
身体中の捻子を点検しておこう
アメリカの桜 日本の花みずき
徒花と遊び回っている岸辺
花が散る老母が何処かへ行きそうだ
リラックスして表札が曲ってる
言いそびれた札に一日縛られる
一冊の本から警鐘いただきぬ
わだかまりまだ解けてない目玉焼
真実を明かさぬ方が そのほうが
昨日まで親友だったボールペン
ぬるま湯に親父の首が浮いている

宝塚市	永田	曉風
青森県	田中	叶
八尾市	村上ミツ子	
尼崎市	田中	薫
弘前市	齊藤	荔
八尾市	村上	剛治
和歌山市	古久保和子	
米子市	澤田	千春
八尾市	神原まさこ	
米子市	林	荒介
島根県	松本	文子
堺市	桜沢あかり	
寝屋川市	森	茜
西宮市	西口いわゑ	
砂川市	大橋	政良
羽曳野市	吉川	寿美
和歌山市	木本	朱夏
倉吉市	米田	幸子

夫より扱いにくい花の苗
かたくなに雪を抱いてる北斜面
入り陽の山を母はいつでも拝んでた
少し先行く同僚をライバルに
松島の海すぐそこに会議中
オランウータン何だか淋しそうな顔
花びらを散らして花の子を宿す
キャッシュカード作って恐い夢を見た
境遇を比べて少し救われる
兎に角無視あらぬ噂の中に居て
流行の色を白衣の下に見る
退屈の味を忘れてしまえそう
波の高さを笑い話にしてしまふ
羊水の温さでゆらり生きている
物差しが色々あって困りぬく
世の中はこんなもんだと冷めている
藤咲いて風はゆらりとむらさきに
やさしさに負けて妥協をしよう
五体字類きょうの私は行書体
律しがたしひとりの箸の上げおろし
ブラウスの白さが映える五月晴れ
ちちの残した轍に杭が打ってある
昼寝から醒めて蜥蜴の目と出合い
これでいいか これでいいかと鏡拭く
お風呂から出てきた顔を盗まれる
しめ縄を張れば小銭が供えられ

大阪府	日阪	秋子
寝屋川市	籠島	恵子
米子市	政岡	日枝子
寝屋川市	江口	度
弘前市	佐治	千加子
今治市	塩路	よしみ
富田林市	池	森子
米子市	小西	雄々
和歌山市	宮口	克子
和歌山市	田中	みね
岡山市	清水	金太郎
大阪市	西出	楓楽
和歌山市	田中	輝子
和歌山市	榎原	公子
松原市	小池	しげお
八尾市	宮西	弥生
藤井寺市	高田	美代子
八尾市	高橋	夕花
豊中市	田中	正坊
高槻市	守先	伸子
大阪市	鍛原	千里
米子市	林	瑞枝
今治市	月原	宵明
西宮市	奥田	みつ子
八尾市	生嶋	ますみ
横浜市	菱田	満秋

塩鮭の切身と海の話する

ブラックバスのような怖いお人だ

石鹼の匂いの中に亡母がいる

豊饒の祈り田んぼは荒れている

応接間一番威張っている魚拓

風見鶏風的美醜に動かない

大空に花火の如き桜かな

野仏は里の今昔知りつくし

僕よりも妻が持つてる良い定規

極秘事項口がすべったではすまぬ

宍道湖の夕陽庶民の味方する（千拓問題）

朝夕の鏡に嘘をつきつづけ

誇れるものはないが好きな道歩く

軒先に突然出て来た飛行船

万緑に包まれてゆく男いっぴき

ブランドを買って家賃はあとまわし

神々の山頂で食うにぎりめし

札束ですべて片付くとは寒い

それ以後は遊び専科のベレー帽

追伸の最後を読んで懐手

種あかしが見たい「住専」「消費税」

いい天気杖を忘れるほど弾む

靴下の穴から暮らし覗かれる

自分史にふるさとの風入れてある

物怖じをせぬ母だった覚え書き

郵便受に家捨てた娘の名が残る

岡山市 富坂 志重

犬山市 早川 盛夫

尼崎市 田辺 鹿太

今治市 中村 好恵

笑面市 岩津ようじ

青森県 諏訪 柳々

吹田市 栗谷 春子

唐津市 山門 幸夫

出雲市 竹治ちかし

池田市 岡本吉太郎

鳥取県 さえきやえ

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 松崎 幸子

東京都 瀬戸きん子

鳥取県 土橋 螢

横浜市 丹下智洋子

松江市 松浦登志子

吹田市 山本希久子

旭川市 朝倉 大柏

岡山県 岩道 博友

阪南市 深日白光子

鳥取県 土橋 睦子

大阪府 澤田 和重

弘前市 一戸 ツネ

岡山市 川端 柳子

今治市 矢野 佳雲

持論聞く私の耳を空にして

幸せのひとつに母がまだ元気

じっと目をみつめ騙せぬ犬になり

知恵の輪が解け大言壮語する

胸襟を開く話に手間がいり

鯨尺で余命を計る妻と酌む

嘆れ声木遣り手向ける通夜の席

仏にはなれず鬼にもなれず老い

夫婦らしい話は鬼の留守の間に

風のような飄々とした酒器愛す

啓蟄を過ぎてわたしも動き出す

御仏はだし石南花に逢うてくる

空腹を隠し切れない若い箸

常識をずらした丸いお付き合い

けじめだけはつきりつける眉を引く

小涌谷黄泉の世界を垣間見る

試されるたびに女は強くなる

白旗は灰になっても振らぬ主義

墨の香に全身刺され反古の山

女ひとり春の切符と漂うて

春うらら心の鈴のリズムよし

温かい人をえらんで寄つてゆく

川柳は僕の記憶の鎮魂歌

善人と言われストレス溜めている

切れの良い男の服にシワがない

ダイエット口にするのは細い方

和歌山市 細川 稚代

和歌山市 吉村さち子

鳥取県 西原 艶子

美祿市 安平次弘道

岡山県 小林 妻子

尼崎市 春城武庫坊

横浜市 保田 絹子

香川県 木村あきら

米子市 石垣 花子

今治市 越智 一水

横浜市 長島亜希子

八尾市 山下美津留

弘前市 相馬 銀波

大阪市 津守 柳伸

出雲市 園山多賀子

横浜市 糸矢加津子

鳥取市 小谷美ツ千

岡山市 藤原 一平

弘前市 肥後和香子

尼崎市 長浜 澄子

八尾市 吉村 一風

米子市 中井 ゆき

大阪市 榎本 路児

枚方市 濱田 良知

横浜市 川島 良子

大阪市 渡部さと美

子を出しにして楽しむこともの日
孫馬鹿となつて祭りの山車を追う
晩年の暮らしプランは慎重だ
口にするほどの嘆きはまだ軽い
ポケットの答が今日は出ずじまい
前向きの人がまばゆい風若葉
ご冗談をと笑うてかるく逃げておく
組がいつもの窓に干してある
支えてくれる杖に感謝をして握る
待つ人もないのに家路急いでる
大波小波丸くなつてゆく石
遣されて七年母は強くなり
新しい絆を結ぶ金屏風
倒産の話は聞かぬ招き猫
乱れる時が元氣な靴脱ぎ場
一族が皆チヨボチヨボで仲が良い
納豆が嫌い関西かも知れぬ
薄衣いつか天女になれますか
小言聞く母の形見の着物から
捨て猫が先に帰つて待つてゐる
百姓が天下取る日がきつと来る
ライバルも同じ作戦たてていた
通りすぎてみれば嵐もなつかしい
引き下がる弱さをベンに叱られる
切り取り線ちよつと疑い深くなる
ちよつと遅れてうちの桜も咲いている

和泉市	岡井やすお
鳥取県	岩崎みさ江
鳥取県	橋本多哥由
愛媛県	宮本 末子
岡山県	山本 玉恵
西宮市	牧渕富喜子
大阪市	本間満津子
貝塚市	池田寿美子
大阪市	稲本 凡子
大阪市	筒井 式美
弘前市	中山 雅城
鳥取市	植田 一京
香川県	山地マツエ
大阪市	川原 章久
今治市	渡辺 南奉
守口市	森川まさお
横浜市	清水 潮華
出雲市	石倉美佐子
茨木市	藤井 正雄
羽曳野市	酒井 一壺
愛媛県	中居 善信
豊中市	井上 直次
羽曳野市	芦田 絢子
和歌山市	青枝 鉄治
鳴門市	八木 芳水
河内長野市	植村 喜代

喜んで貰つて下さる花の鉢
おかげさま今年もうまい豆ごはん
作業員も菜の花堤に目を休め
浜風に夏の足音聞きに出る
ブレーキが利かぬ七十路下り坂
遠くから見る村里が美しい

伝統句から新しい傾向のものまで、多様な作品を手にして、現在
の川柳はどうあるべきか考えさせられました。
ある古い川柳誌を読んでいますと、次の文章に立ち止まつてしま
いました。「毎月の柳誌に発表される作品を読んで、退屈
することのあるのは、表現が拙いからでなく、作句する人が、作
句するだけのことがないのに、情性的に作っているからである。
わたしたちは、川柳家である前に、書きたいことが常にある人間
であることが望まれる」と書かれています。
今月は二七〇名（八一〇句）の作品を頂きましたが、選を終え
て、活字に出来なかつた作品の数を思いますと、複雑なものが心
に残ります。

曉風さんの句。「黄昏れながら揺れながら」の抒情が甘いといは
言い切れないものがあります。それは作者の心に秘められたロマ
ンだからです。これほどの思いを持ち続けられることに羨望を感
じます。「影ふたつ」でなく、「影はふたつ」の一字の大切さを知
らされます。叶さんの句。子供の本をめくると、遠い日思い出
します。中年の男性にとつて、少年の頃の夢は、夢でしかなかっ
たと、改めてさみしさを感ぜさせるのでしょうか。ミツ子さんの句
とんでもない大風呂敷を展げてしまつた。さてどのようにこの後
始末をするのか、読者に任せてあるところがおもしろい。薫さん
の句。個性のある作品を書かれ、字体を大切にされるなど教えら
れます。「冥きわが頭」と自己の思いの強引さも、まさしくこの
作者のものです。

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(66)

橘 高 薫 風

午後二時十分ハルビン着、旅館鶴屋に投じ市中見物、夜は立井登美坊君とその二令弟との案内で夜のハルビンを観る

新京、ハルビン間の汽車賃はペラ棒に高い。これが問題の東支鉄道だ。満洲国へ高く売りつけようとしているので現在とはとれる限り高くとるんだそう。

ハルビンに着いた。切符は乗車した時既に渡しているので改札の必要もない。従って取札口もなければ改札口もない。駅はあるが列車へは自由に乗れる。内地では見られない図で実に羨ましい制度だ。

路郎先生は支那街とその平康里（遊廓のこ）と、ロシア人街、日本人街とりどりの匂い、松花江の春待つ姿に旅人らしい哀愁を感じられる。国際都市の異国情緒豊かな夜は、猶太系露人経営の百貨店や大衆レストラン、映画も見てキャバレーへ。露人は明け方まで踊り抜くのだそう。一時頃にロシア人の娼家へ出掛け、七八人の女性のウイंकを受け、

売れ残りげに十目の見るところ 古川柳

を思い浮べたとある。

酔っぱらって大きな声を出すのはロシア人と日本人で、支那人は酔っても決して高声を発しないそう。ハルビンを去る。

亡命に似て哈爾濱へこころざし支那街のあれで金持とは見えず

スナギリー郷国を忘れた恋もする

三月十八日午前九時四十分ハルビン発、午後十時三十分奉天着、松代さん来奉

一夜泊りのハルビンが私に何を教えたかと二等寝台の上に寝転んでスピヤをくゆらしながら自問自答した。

私のこの二つの眼が見たハルビン、それは一つの事実であろうが、真実そのものであるかどうか。私は美しい虹を見て来たのではありませんか。そんなことを考えさせる程、一瞥のハルビンは異色異香の都会であった。

車中の路郎先生は議員視察団一行の言行を批判的に、兵士の三人には同情的に観察し、前の席のロシア人と「週刊朝日」とハルビンの露語新聞を取り替え、文字の拾い読みをす

る。他国語には難渋することから、自国語と世界語の二つさえ知っていればいい時代が一日も早く来ればいいと思われる。後にエスペラントに関心の深かったのは、この辺りの語り口で推量されることだ。

奉天では往路と同じ江戸みつる氏の出迎えを受けたが、熱河在住の岩崎柳路氏夫人松代さんの顔もあったので、信じられぬほどに驚き眼頭を熱くする。「魂と魂との抱擁があった」との最大の表現は異国での切実な出会を感じさせる。奉天第一の娼家艶楽書館へ。

十九日奉天見物―奉天句会

觀光は先ず清朝第二代太宗文皇帝の陵墓、北陵からはじまる。詳細な描写があるが要するに北陵の碧甃黄甃を支える朱塗りの柱や石門石階石欄壁間に施された彫彩は佇立久しうせしめるものばかりで、これをてっとり早く紹介すると鯛や平目が泳いでいない龍宮そっくりである。次いで喇嘛塔や奇怪な男女交歓の天地仏のある法輪寺、満洲事変戦跡の北大営、小盗人市場（五階下のゴミ市の存在）へ。夜の歓迎句会は石原青龍刀氏ほか十名余。

馬車に我が人生を托しゆく

夕陽あかあか汽車は直線

戸外は雪がちらちらしはじめる。（続く）

荀香のむ

八木千代選

コンビニへ溜まるけじめのない時間

月に一度波を被りにいく遠出

また会えるつもり挨拶軽くする

生きる予定 死ぬ予定も考えておく

雑草と指紋ひとつの行方など

散り尽くすまでは見守っていよう

少し先 知りたくて人生きられる

襲の底暗がりと知りまた覗く

生きるとは今日も始発の定期券

仲間にもうしろ姿は見せられぬ

大人ならここは堪えねばならぬ岸

脳内革命あしたはきつと暗になる

蝶よ花よと不思議なる物を抱く

まっ白で去らねばならぬ降車口

緑濃い町消えている 逃亡者

この小川に海を教えるのは早い

蜘蛛の糸ゆれて生きるといふことは

燭消して一日の芸おもんみる

視野いっぱいに蟬のぬけ殻沈みおり

和歌山市 古久保和子

和歌山市 田中 輝子

鳥取県 西原 艶子

米子市 金山 夕子

和歌山県 小倉 アサ

島根県 松本 文子

弘前市 肥後和香子

倉吉市 淡路ゆり子

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 木本 朱夏

尼崎市長 春城 年代

富田林市 藤田 泰子

米子市 政岡日枝子

寝屋川市 森 茜

西宮市 牧渕富喜子

岡山市 富坂 志重

西宮市 奥田みつ子

米子市 光井 玲子

和歌山市 野々 圭子

年齢を重ね解放されてゆく

せっぱ詰まってどちら鬼やら仏やら

初夏の候あくび出るほど長生きし

まばたいている間に時が逃げてゆく

いい人でいると影も痩せてくる

五月雨 重い昨日が残っている

鬼の瞳にもにんげんさまが棲む

意に添わぬ眉描かれる紙人形

線引きをするといつでもすれすれに

真剣勝負女だてらと言われても

夢半ば誰かに梯子はすされる

喉仏 にかあい薬をつけられる

怒っても独り居 只の独り言

ドライフラワー薔薇まだ刺を持っている

背伸びした分だけ風呂に浮いている

見えますか奇麗に咲いて聞いかける

片隅の椅子でかえって落ち着ける

冬の日の気魄どこかへけだるい日

日記帳 桜さくらと閉じている

物差しの違う夫婦でにらめっこ

フレイフレイ帽子の上の空が言う

蜘蛛の巣もいつもの風とさりげない

有精卵割って罪悪感もなし

添加物にこだわる夫の割烹着

合掌の姿になったきれいごと

和歌山市 堀畑 靖子

寝屋川市 岸野あやめ

吹田市 栗谷 春子

米子市 青戸 田鶴

大阪市 鍛原 千里

和歌山市 岩本美智子

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 福本 英子

米子市 白根 ふみ

和歌山市 桜井 千秀

米子市 林 瑞枝

出雲市 石倉英佐子

鳥取県 塔 寛子

弘前市 佐治千加子

兵庫県 北川とみ子

米子市 茂理 高代

藤井寺市 高田美代子

枚方市 森本 節子

八尾市 高橋 夕花

倉敷市 小野 克枝

和泉市 中川 楓

米子市 寺沢みど里

今治市 村上久美子

宝塚市 丸山よし津

出雲市 園山多賀子

ペンペン草 花より重い実をつけて
空しくて今は言い訳しない花
生きのびて宇宙でふわり眠りたい
こだわりを捨てると旅が面白い
旬のものとべて元気の氣をもらう
野菜ジュースそれぞれの私語妥協する
恋なんて滑稽ですかダルマさん
止まり木の仲間はいつもリベラルに
強がりやっぱり探るキーワード
墓守も老いて草にも追い抜かれ
いつの頃からか郵便屋を待っている
ハトの出るボウシ欲しいと老妻が言う
躓いた石が山から落ちてくる
風立で生きている独りの綿埃り
減点法 存在価値を見失う
ライバルと並んで打たれ強くなる
胸の奥 獲一匹が生きていた
人情が薄れて塀が高くなる
忘れたきことひたすらに草を抜く
それぞれの祭り父子にある温み
奥歯には衣を着せない飾らない
もしもの時を互いに思う夫婦箸
帰りたくないと昨日がついてくる
再生紙わたしの過去は語らない
自転車と同じ空気になっている

堺市	桜沢あかり	鳥取市	坂田和歌子
徳島県	安宅美代子	米子市	野坂 なみ
八尾市	宮西 弥生	弘前市	一戸 ツネ
寝屋川市	太田とし子	貝塚市	池田寿美子
松江市	安食 友子	米子市	石垣 花子
河内長野市	植村 喜代	大阪市	川久保睦子
鳥取県	土橋 睦子	大阪市	日阪 秋子
寝屋川市	籠島 恵子	大阪市	三浦千津子
米子市	中井 ゆき	倉吉市	野口 節子
鳥取県	岩崎みさ江	広島市	森田 文
和歌山市	田中 みね	米子市	木村富美子
米子市	澤田 千春	寝屋川市	坂上 高栄
鳥取市	小谷美ツ千		

害虫もひとつの命生かされる
満開の花に会う身はつつがなく
記念樹が屋根まで届きババになる
コメカミのあたりウロウロする迷い
レイアウト自問自答の落とし蓋
前向いて進めばきつと突破口
お気に入りの花で休憩する蝶々
ていねいにお皿洗える今日の幸
足裏の白さに気づいた痛みあがり
小銭の私語が溜まってくる財布
大空をひと呑みにする大欠伸
こんないい子を残して母は死ねません
バラ一輪はらはらはらと乱終わる

富田林市	中井 アキ	富田林市	井上すみれ
米子市	服部 朗子	寝屋川市	片岡智恵子
柏市	平松かすみ	今治市	宮口 克子
和歌山市	上鈴木春枝	富田林市	永田 俊子
富田林市	野村 京子	岡山県	福原 悦子
寝屋川市	野村 京子	今治市	野村 清美
今治市	野村 京子	寝屋川市	太田 藍子
		今治市	塩路よしみ

古久保和子さんのコンビニの時間には考えさせられました。現代の風潮というのか、まことに便利で物は溢れ、夜となく昼となくだからだと続ければ続けられるけじめを忘れた生活。これでもいいのかとは思いますが、必要で安心感があるコンビニ。するする溺れそうなりズムのなさに、和子さんの感覚は鋭く反応しました。田中輝子さんの遠出。じつは今日数時間後に波を被りに私も津山に出掛けます。もう荒波だとはわかっていてる場所に、最小限の水着でいどの作品を頼りに行くわけですから、心細いですが、この波を避けたら、このあたりの私は流れてしまします。輝子さんもきつとそんな気持ちで勇気を出して月に一度の自分へ賭けての遠出でしょう。西原艶子さんの挨拶の悔いには江原とみおさんへの哀悼がこめられています。それぞれに消えぬものを残した方でした。今更ながらじんじんとして惜しまれます。

砂

田中 叶選



砂塵濛々ここに鬱が降り積もる
砂が崩れて予定変更ばかりする
砂利道が続く折りが深くなる
玉砂利を踏む初孫と神に逢う
玉砂利を踏んで竹馬の友に逢う
シナリオのない砂利道を子と歩く
砂塵から審判の手が出てセーフ
小錦が視野をはみ出す砂かぶり
横綱を夢見て今朝も砂に這い
五月雨にリズムが狂う砂時計
砂時計あなたに逢ってから狂い
生かされて安らぐ八十路の砂時計
海に出られないダム底の砂たち
砂丘には悔いのひとつが埋めてある
砂場から見る母親に安心し
白い砂掃いて僧侶は朝の行
長髪の様がいる砂の城
南海の砂に埋もれる慰霊之碑
潮引いて砂の中から蟹が出る
海亀は涙を砂に埋めて去る
砂浴びを知らないままにプロイラー
孤児達の想いを乗せて黄砂来る

園美代子 日枝子 典子 帆雀 旋風 忠雄 正雄 徳三 天弘 勝美 園美代子 和子 荒介 喬水 不二 愛論 清芳 久仁於 黎之助 あきら 舞鳥影 智洋子

また黄砂ちち待つ母に春は来ず
浜茄子の香に揺らぐ砂の乱
女ひとり踊りつづけた砂の上
泣き砂を踏めば哀しい子守唄
さらさらと砂は無色のページ繰る
泣き砂の浜に伝わる女人の絵
想い出を語るポッケの中の砂
ライバルも俺もやがては砂になる
パンカーの砂は涙の味も知る
砂を噛み耐えて背骨が太くなる
砂を吐く蛭こよびり嘘も吐く
横丁を曲がれば砂の墓標あり
砂煙の彼方に二十一世紀
ちりぬるを一夜の風に砂の文字
背かれた日は一握の砂を恋う
佳
砂時計のちを刻む音がする
今のわたしに何が出来るか 砂あらし
丹念に鯨肌へ塗る磨き砂
生きている私も貝も砂を吐く
泣きにきた涙で泣き砂泣いてくれ
人
砂丘 歩いたことを一生忘れない
地
いじめられてますと砂場に書いてある
天
泣き砂の鼓動素足でたしかめる 澤田 和重
軸
失敗失敗 頭についた砂はらう

銀波 和歌子 玉恵 たくす子 克枝 ひでの ちかし 保州 時弘 清史 和枝 ツネ さち子 勇太 めぐみ 英壬子 富喜子 一花 雄々 俊子 文子 しげお

人波に泳ぎ疲れてユーターン
犬掻きで象が泳いで記事になる
雑踏を気ままに泳ぐ無位無冠
鯉轍泳ぎ疲れはお父さん
逆流を泳ぐ男にある野望
泳ぐだけで楽しさくれる熱帯魚
社の中をゴルフでうまく泳いでる
水泳教室 母のお腹にいた日から
宴席をダブルスパイが泳いでる
人脈の狭間を泳ぐ新議員
アンテナを泳がせ今日も職探し
泳がないビキニを肌に焼き付ける
あの笑顔世間を泳ぐワザだった
犬かきでよし激流に挑む子よ
わが家では緋鯉ばかりがよく泳ぐ
馬耳東風 世間をうまく泳ぐ人
海水着泳ぐに惜しいニュールック
雑踏の中を泳いでいて孤独
氷河期を泳ぐ若人強くなる
リズムカルな上手な嘘に泳がされ
泳法を変えねばならぬ二度の職
泳がせた雑魚へ刑事の目が光る

ちかし 満秋 洛醉 俊路 清美 甚一 哲子 四郎 潮華 良知 主一郎 強一 洋 賢子 ふさ子 寿美 トミエ 勇太 正雄 高明

泳

木村貴代子選



大胆な水着は泳ぎなど知らぬ島の子とすぐにわかった泳ぎの手どこの海泳いでたろう冷凍魚料理屋の生簀で今日を泳ぎ抜く連休を軽い財布で泳ぎ切る大掻きでいいさ自分をなくすまい妻の手の鎖の長さだけ泳ぐ浜の宿今朝まで泳いでいた魚いつか子も危険水位へ泳ぎ出す大かきで定年までを泳ぎ切る泳がせた子に放任を裁かれる黄昏にむかつて泳ぐ今日も明日も砂の丘泳ぐが如く蛇の舞淋しさの限りを泳ぐ水族館八十年の遠泳少し疲れてき

佳

人

地

天

軸

背泳ぎの空に少年夢がある
四十万に川瀬泳ぐ日の記憶

加藤 権悟

一花 明水 典子 希久子 晋 大柏 よし津 忠雄 高夫 鉄治 智洋子 螢 和歌子 富喜子 あきら

入門

田口虹汀選



弟子入りをしたと短い便り着く狸には相談をせず入門す入門の夢を見ている緋の衣結婚の門は広くて狭かった小唄入門社長に別の顔があるおめでとつ女の門に突きあたる入門にまだブランクが揺れている入門書一杯積んで 洪滞し 気の多い女入門くりかえす 七十の手習い筆が横を向く 定年で先ずは料理の門たたく 嫁入りを前に入門 茶と華と 入門をしたが眠くてたまらない 弟子達にテープ残して恩師逝き 七十の手習い水墨の門に入る 入門の夢は故郷での土俵入り 人間入門 宣誓をする呱呱の声 あれこれへ入門 若さまで貰い まだ燃える火種を抱いて門くぐる 入門の裾野で師匠よく褒める 入門書めくれれば黄昏身にしてみる 惚れ込んだ師匠のもとに入門し

主婦へ入門娘があげる味の腕 先生に惚れてお弟子にして貰う 晩学へ挑む 男の入門書 入門も出口もすべて全自動 門前の松が入門 威嚇する 弥陀の掌に逃げたい入門だつてある 青い目も得度に混じる禅の寺 手ほどきの恩師のあればこそこの今 入門の同期に孫の友がいる 先生が美人 入門したくなる 落ち込みをそつと励ます入門書 孫ほどの師に入門の手引き受け 釣針がかくされている入門書 得度してこいさん入門すると言つ 門下生見てから門を叩きます

京子 権悟 とし子 子龍 雄々 克治 まさと 重人 弘 宵明 俊子 勇太 和歌子 帆雀 晴子 高明 正剣 しげお 久仁於 荒介 仁部 四郎

たず子 久美子 俊子 克枝 好恵 克治 武春 たず子 七十年の手習い筆が横を向く 定年で先ずは料理の門たたく 嫁入りを前に入門 茶と華と 入門をしたが眠くてたまらない 弟子達にテープ残して恩師逝き 七十の手習い水墨の門に入る 入門の夢は故郷での土俵入り 人間入門 宣誓をする呱呱の声 あれこれへ入門 若さまで貰い まだ燃える火種を抱いて門くぐる 入門の裾野で師匠よく褒める 入門書めくれれば黄昏身にしてみる 惚れ込んだ師匠のもとに入門し

克枝 伊津志 勝美 あき 眞雄 富喜子 タミ 朝子 シマ子 一風 智加恵 康子 ふさ子 紀一 大柏 眞美代子 さち子 高栄 久美子 幸夫 實 剃髪儀式 法名まできまり

初歩教室

題 — 煙

吐 田 公 一

今回もそうですが、作品を見ると実に破調句が多い。ちよつと推敲すればリズムのいい五七五に整えられる句がかなり見受けられる。かつて初心者向けに刊行された「川柳バス」という本の中で、この著者は初心者の方はできるだけ、五感（見る・聞く・触れる・嗅ぐ・味わう）を通して作句するといひ、と述べておられる。これは至言と言えよう。

要は、初心の間から抽象的な作句を試みると、何を訴えようとしておられるのか、判然としない場合が多い。心していただきたい。

添削句

○夕飯の煙がばらす焼き魚
もつ少し上品ぶると

昭 治

▽炭焼きのさんまがけぶる夕支度
○風呂湯けむり鼻でお念仏皆元氣 俊 一
かなりな破調で、かつ意味がわかり難い。

▽湯煙に極楽がある旅の宿

○煙幕の中でズサンな帳調査 (蘭) 幸 子

“帳調査”とは下五にせんがための苦肉の策。初心者によくありがち。心されたし。

▽煙幕を張った帳簿が調査され

○もつもつと湯煙り人の影見えす 美恵子

“もつもつ”は余分。湯煙で人影が見えないだけでは川柳とならない。

▽湯煙を一人占めする露天風呂

○愛煙家肩身の狭い待合室 公一朗

待合室に限らず、近頃はいずこも同じ。

▽どの場所も肩身が狭い愛煙家

○亡き母の答の要らぬ煙立つ 登 美

答の要らぬは、答がもらえぬの意では

▽ひとすじの煙が答 母は逝く

○SLの煙に香る幼年期 周 信

SLの煙は余りいい句ではないので素直に

▽SLの煙でしのぶ幼年期

○繁忙期煙ひとすじ宵の風 和歌子

繁忙期の小休憩の風景とすれば

▽繁忙期ちよつと煙草の宵の風

○気まじめも時には煙い人にされ 和 重

いい見付けだが、気まじめは誤り。

▽生まじめも時には煙い人にされ

○煙り立つ窯にこころの宿がある 忠 男

窯業＝芸術作品と考えればよりどころでは

▽煙立つ窯がこころのよりどころ

○噴煙の匂いただよふ桜島 美寿子

ただ情景を詠むだけではなく、桜島を見ている人間をつたえよ

▽噴煙に西郷がいる桜島

○煙吐く阿蘇の雄姿に逢いに行く ふさ子

雄姿より故郷とすれば人生譜となる。

▽煙吐く故郷の阿蘇に逢いに行く

○正論を煙たがるのが実社会 義 男

実社会とは少しオーバー。ここは一寸軽く

社内会議でいいのでは

▽正論を煙たがってる会議室

○焼却炉うつ煙が迷い立つ 志華子

迷い立つ煙なら恋文などの焼却を連想して

▽焼却炉過去の迷いを絶つ煙

○過去と未来と煙だったらよろうに 郁子

煙だったら云々の意中が計り難い。

▽一抹の煙となった過去未来

○里の暮れ空へ夕飼の新煙 美津子

薪を焚く煙は今昔、現代では山里ぐらい

▽薪で焚く煙にあつた飯の味

○禁煙の決意三日で煙を吐く (蘭) 孝 子

決意三日で——当然吸いはじめた意を含む。

▽禁煙の誓も三日凡夫です

○政界は煙と雲で前見えす

面白い発想だが、表現にひと工夫を

▽政界は掴みどころのない煙 正

○物干で父のけむりが淋しそう 弘子

言外に父の淋しさが浮ぶようにすれば

▽物干でタバコをふかす父の顔

○五月晴煙りたなびく阿蘇の山 ミッソ

阿蘇の煙を擬人化してみると

▽五月晴阿蘇の煙の行方問う

○灰皿の煙に咽び咳払い

同じような内容でも孫を持って来ることに 崇

よって吸ってる人の慌てる姿が浮ぶ

▽灰皿の煙に孫が咽び出し

○湯煙に母と娘の長話 円女

親子水入らず(?)の情景では

▽母と娘のくつろぎくれた湯の煙

○思い出を焼いた煙が目沁みる 政子

思い出では抽象的(写真・手紙・贈物?)

▽ラブレター焼いた煙が目沁みる

○芥焼の煙の流れ気にかかる よし子

気にかかれば苦情の一つも言いたくなるの

が人の常。これを生かせば

▽ゴミの処理の煙へ苦情の目が光る

○七輪で秋刀魚の煙目に沁みる 晩翠

青いみかんの酢を人として連想すると

▽七輪の秋刀魚が食欲そそる柚子

○大変だなべから煙が吹き出てる ふゆ子

“大変だ”は当然のこと。少しウィットで

▽長電話鍋の煙に切られる

○父権落ち喫煙室はベランダで 美佐

見付けがいい。父権落ちがちよっとひつか

かる。ベランダは部屋に非ず。

▽ベランダが喫煙室にされた父

○朝夕の香煙十万億土まで 高栄

中八。十万億土へ届けよの意であれば

▽ご先祖へ届く香煙朝夕に

○湯煙の向うで聞こえる故郷訛り てる代

中八。くに訛りの親しさを感じれば

▽湯煙の距離を縮める故郷訛り

○土煙立てて屋敷を通り抜け 因静子

何が土煙を上げて通り抜けたのか不明

▽土煙上げて竜巻通り抜け

○煙毒と云っているのになぜ売るの 睦子

なぜ売るのは川柳でない。売る身になって

▽煙草屋も害と知りつつ売るつらさ

○煙りすう毒としりつつやめられない 志重

毒と知りつつ云々は説明句である。

▽毒食わば皿までという愛煙家

○男一匹煙に巻いてるハイヒール ひでの

男一匹がこの場合いだけない。

▽いちげんを煙に巻いてるハイヒール

○青空に煙たなびき美しい 多哥由

青空・煙・美しいでは、どのように美しい

のか判然としない。

▽ひとすじの煙絵になる今日の空

○落葉焚き消防署に気をつかい きん子

▽消防車の鐘が気になる落葉焚き

上五にするには消防だけでも結構

○灰皿のない家帰りおそくなる 黎之助

見付けはいいが、表現に乏しい。

▽嫌煙の家路ついつい遅くなり

○涙目に焼き場の煙母に見え 日出子

▽泣いた目に亡母の煙が沁みてくる

○湯煙が雲仙の旅演出す 宏

▽雲仙の湯煙旅を引立てる

○煙たい人抜けた途端に賑わう座 りつえ

▽賑やかな座が白け出す煙い人

佳句

一服のけむりがやつと腰を上げ

雨煙る人は寡黙にすれちがう

香煙縷々惜しむ辞も途切れがち

さわやかな旅を楽しむ禁煙車

香煙にやすらぎもらう春の宵

義理通す明治の父をけむたがり

目印の煙突消えて道迷い

焼鳥屋煙も込めて客に売り

対岸の噂煙に乗って来た

私の句

香煙にひとりの思いひしひしと

私

題「困る」 7月15日締切(9月号発表)

老地神壇

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

殺虫剤命の重さなど問わず

子育てに命をかけたのを知らず

若者は命ひとつをもてあそぶ

友の通夜遺影が死ぬなど言っている

ローカル線の中で拾ったあたたかさ

子もつらい一線を引く義理の母

お粗末が男の言葉の端にある

夫留守 粗末な食事して気楽

十分に使える椅子が捨てられる

お粗末な美学を男捨てられず

かけがえのない地球さへ粗末にす

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

適当が通じないのがコンピューター

大器晩成に賭けよう孫の成績表

建て前の裏に本音がついポロリ

押しすぎて見えている人が危なかり

押鮎の美味さ伝える母の味

成長と共に祝いの額も増え

田実子 欣史子 弘直 清芳 喜美子 留吉 シマ子 千枝子 能子 あずき 香住 松住 放任

正雪 吟笑 治延 マツエ ひかり

紅少し差して女の顔にする
ハネ返す気力まだまだある親父
親切がすぎ下心読まれてる
見る角度変えろと女若く見え
横車押して世間を狭く生き
一も二も後押しほしい立候補
押売りを断りスマヌとも思
押入れの奥でヒソソ宝物
押し黙るソレにはソレの訳がある
一言が墓穴を掘った結果論
後押しの成長待ちつつ生き抜いた
高槻川柳サークル卯の花 川島諷云見報

あきら かおり 坊太郎 いさむ よしみ ふみ 文仙 中3なみ子 はつ恵 くに子 チカエ 静江 茶の子 節子 スミ子 白溪子 庸佑 かおり とし子 杜的 惠美子 克治 よ志子 隼 雀 瀧小 マツエ 稲子

うかれつつ寂しさも酌み花が散る
うかれると行方不明に父はなる
子も孫も無口になつて日は伸びる
亡母からくぎ煮の味を妻が炊く
火も水も潜つてやつてきた傘寿
重箱の隅をつついて母達者
見栄少し捨てると心軽くなる
春雨に濡れども冷えぬ熱い恋
砂の器小さな嘘になじめない
春の絵に画きたす毬がよく弾む
邪魔がられ有難がられ手を洗う
男から届く匂いのする手紙
何時までの花にあえるか余命表
耐え難く触れば熱き桃の花
南大阪川柳会 金井 文秋報

秀夫 紫香 ふみ 東雲 あきら 高栄 め女 波留吉 澄子 武庫坊 しげお 艶子 英一 蕉 秋子 公一 三男 国久 智公 文江 度 萬的 恒明 寿美 頂留子 シメ子 透太

雌伏十年やがては俺にくる出番
嫁がせてやがて孤独の風と住む
ライバルもやがて消すだろ二階の灯
青虫のやがて羽化する日を夢見
平等にやがて迎える老いの日々
ここで見て切れとライトが寄ってくる
故郷へ錦しかりライト浴びて
アメリカのライトに映える野茂投手
大拍手ライトまぶしいせりあがり
忘れたい話にまたも触れてくる
忘れぼくなって約束怖くなる
忘れもの探す時間もスケジュール
都合よくは忘れてくれぬ妻の愚痴
結婚記念日夫婦で忘れてる
初恋の女の名前忘れない

岸和田川柳會

田中

文時報

宅急便預かってから摩擦あり
摩擦さけ僕がだんだん消えている
与野党の摩擦いかにも子供染み
雑魚は雑魚なり摩擦もあって旅に出る
急ブレーキ身近に聞いて肝つぶす
身勝手も合格までと目をつむる
花手桶提げて身勝手詠びに行く
子育てで手抜きを攻めてくる報い
不勉強今も尾を引くその報い
飽食の報いズボンをまた替える
何の報いか私がいとも叱られる
人生の道に迷って塀の中

久峰 志華子 正博 柳宏子 良 咲 千梢 トミ子 信博 庸佑 文秋 柳伸 章久 智子 東雲 苑子 丹吉 白光子 萬的 柳宏子 路子 文時 輝彦 盛之 甚一 一弥 敏光

金バッジ最後は銭の迷路入り
不景気の迷路脱してなる黒字
幸せは迷路を抜けた入社式
迷路から母さんを呼ぶ声しきり
迷路から抜ける夢が近くなる
迷路さす光間違ひなく亡母だ
少年の夢に迷路の文字がない
目標を明日ののびして昼寝する
六十路坂つい目標に近づきぬ
大書した目標埃がむつて
目標を五キロに決めてダイエツト
目標を立てる間は良かったが
目標は年取ることに低くなり
目標の達成までは目刺焼く
目標のないまま走る日本丸
目標額決めて貯金のマイホーム
目標額夢断たれてる低金利
目標に迫ると飛んでくる吹き矢

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

鹿太郎 信博 辰郎 ひで 富志子 洞庵 狸村 房基 洋 昭二 朝一 弘象 一齋 呂万 けい子 さよ子 浪速子 高弘 四郎 公一朗 幸夫 紀一 青琴 ふさ子

かわいそう潰されそうなハイヒール
池の鯉宇宙を泳ぐ夢をみる
花に溺れ遠回りする散歩道
初孫を抱いたこの手で曾孫抱き
続けるにこしたことはない習いごと
梓の中積木ばかりでない世相
野仏は車道の脇で世をなげき
下請の大王は知らぬ青写真
竹原川柳會 時広 一路報
たけのこのように生きるこの街で
雪が降るみたいに桜舞っている
私を飾る芳名録の重さだ
れんげ畑れんげ畑よ風の旅
げんかんのクロガネモチは皆笑い
目線さえ変れば広い空がある
パレットに虚栄を載く色が
リストラが男の舞を狂わせる
高い鼻ばかり集まるクラス会
念を押す釘は一本あればよい
六法の抜け穴探す虫眼鏡
日当りでごろりと寝たい地蔵さん
いのちの樹わくわく天を抱いている
折っても折っても無に近づけぬ
考えが三途の川でゆきづまる

佳句地十選 (6月号から)

柳 菜 鶴 丸

主 久仁於 晴子 虹汀 實 あき 正 剣 喜久恵 比呂子 蘭幸 高史子 中枝 田実子 愛論 靖子 四郎 諷云児 圭坊 龍小 諷人 楓 故とみお

おかかえ地蔵願い適えてくれた坂町並みをオープンカーの旅人よ白壁が少し汚れて奥床し

僕も川柳で居間飾ろうか

花一輪飾り女の部屋とする

胸に飾ると造花も少し呼吸する

着飾っても一度青春の風に酔う

ブラモデル飾って心満つて部屋

飾らないう言葉にひかれつつ行く

男いっぴき飾るものなど何もない

青空に飾った地球見て帰る

胸飾る勲章錆びて鉄を振る

自画像の鼻は高めに描いておく

政治とは結んで開いて手を叩く

開いたら散らねばならぬ持つ運命

開拓に行きシベリアで閉じる青春

むすんで開いてチューリップが笑う

平方根開く手段が見つからぬ

父の手を開くとにじむ道標

開いたら後は御用の無い葉

城北川柳会

吐田 公一報

また会える五文字に甘え気まま出る

寒風に耐えたうれしい花だより

絵はがきに幸せのせて旅だより

午前さま不穏な空気にしのび足

歌麿の声が出そうな絵に見入る

絵のような薄紫の似合う人

波乱万丈艶話をも織りませて

貞子 年子 菁居 夏喜 房子 喜美子 規代 美佐雄 一枝 螢 蝸牛 静風 のばら カツ子 白狐 栄恵 節夫 笑子 一路

登美子

絵心かハガキの端のねこやなぎ
老いの身に頭の痛い年度末
ぬり絵からはみ出し自己を主張する
二代目がスーパードにする老舗の灯
トンネルに入るたびごとと無事祈り
接点で男心がショートする
もぐらにも居住権ありビルの下
暮ならべも教えた孫に歯が立たず
桜より妻の視線は春の柄
このままですまぬ残り火掻き立てる
春宵をひとりやむ身に亡母の夢
お見合いを湯とうふにする南禅寺
連休の地図を広げて練るブラン
すい星が出たよ世の中変わるかも
駅前の屋台に今日を捨てにゆく
陽炎やまた逢えるかも逢えるかも
愚痴もなき余生のひと日春苺
会議室の空気が重い社のピンチ
まだ炎える彩あり老いの絵の具皿
真っ直ぐと互いに思ふ人と蟹
忘れたいことは忘れることが無い
億が舞う世に百円を握りしめ
更地にも花びらの舞うミナト街

川柳ささやま

酒井

靖子報

三三五五散って噂だけ残り
有名にならなくていいランドセル
有名になって何かを忘れてる
倅せという字にとまる青い鳥

高栄 美代子 睦子 トヨ子 政子 とし子 柳影 あき子 扇帆 昭子 あい子 一枝 八重 秀夫 典子 寿美子 春蘭 達子 白峰 満津子 静子 公一

とみ子

かいわれ菜高い空まで伸びたがり
高望みして踏みはずす虹の橋
晴耕雨読 余白は高く高く積み
散り急ぐ花にもあつた自己主張
涙した友の拳が胸にしみ
友達のように気さくな貧乏神
リュックサック背負いたくなる日本晴
いつか散る命も虹を追い続け
青い杉青い松よ亡母の里
共白髪誓った人が先に逝き
高すぎる椅子で握手が届かない
青田風この安らぎへ老いてゆく
友ひとり失う羽目になる判こ

川柳塔鹿野みか月

土橋

仏壇の奥に一部屋父の部屋
あれこれと職場をかえて駄馬になる
まだまだ長い僕の人生欠伸する
花も実もつけておくれと根を守る
ふるさとの土を根つが忘れないう
午前午後どちらもつまるスケジュール
本会議午後のネクタイ締め直す
人生の午後は極楽行き学ぶ
くつきりと虹を連れたり午後の雨
雨の午後やっぱり眠くなってきた
辞典引く私に午後の雨静か
午後のため朝から敷いた花筵
どん底で優しい男に巡り合う
春巡り花の心に重ね合う

つや子 和子 ヒサ子 八重子 市三 素水 美智子 芳乃 多美子 すす子 富美 可住 靖子 螢報 喜与志 明美 一夫 かつ江 みさ江 早苗 智恵子 房子 茂 くに子 八重子 汲香 睦子 はお

忠雄 与呂志 度報 一途 権太 朝子 かすみ 頂留子 庸佐 礫 三郎 黎之助 文秋 あやめ

光

泥

吉之助
とし子

一雅
風文

良三洋行

時 恵
弘 子

小博
路泉

弘直

句読点上手に打って遊ぎはった
短冊も花に酔うてゐる通り抜け
恋をしようボケが防げるかも知れぬ
国が知事訴えてゐる四月馬鹿
味と値段に得心してる長い列

高 栄
一 笑
シマ子
たもつ
度

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

母さんの振り子は明日の方にゆれ
明日からやるとたしか去年も誓つたな
明日の方を向いてる爪先の目玉
明日へ明日へと炎える太陽の塔と
地に伏して明日を夢見る花かげろう
子が帰る日は何べんも伸びる首
神様に首から上をしくじられ
首の差で泣いた馬券の紙吹雪
鉄火くぐつた男の首に賭けてみる
五百羅漢うしろを向いた首もある
なんにでも首を突つ込むウチのパパ
茂みから蝦蟇が自然が生きていた
おしやべりが大好き茂みの小鳥たち
傷つけば人は茂つた木を探す
平成の茂み電波が喧しい
小走りに女が消えてゆく茂み
鯉織めざし青葉が背伸びする
あるバズル女が猫を抱いている
バズルめいた言葉でおんなからみだす
ときめいてバズルの中にいるわたし
そして朝あつさり消えていたバズル
街角の死角においてあるバズル

頂留子
度
森子
英一
弘直
欣之
隆
とみを
泰
シマ子
美幸
東川
賢子
たもつ
洋
源一
宏

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

忘れてた言葉も思い出すバズル
心ない苦い言葉も親の愛
ライバルの栄転祝う苦い酒
赴任地のわびしき苦い酒になる
ほろ苦い恋を見送るコンパクト
絵はがきに苦い言葉を書いてくる
経験の苦さをバネに自立する
苦い水たつぷり飲めと旅に出す

和子
信博
剛治
ますみ
朝子
夕花
一風
美津留

その道は凍っていましたプロポーズ
輝いてまだ恋もする七十歳
山里へ家を構えてまめになり
凍る日も耐え抜きました五十年
通せんぼしてはならない来た道だ
愛されたベットも主も歳をとり
凍てる夜わたしの足音追つてくる
その先の愛をたしかめお茶を注ぎ
逃げ道をあけておくのは母の役
凍るまで見とけている北斗星
凍るのを待っているのかカメラマン
衣食住たりてベットに支配され
ダイヤモンドダスト吐き吐き風凍る

はるみ
歳栄
英子
鈴江
民子
かつ子
聖子
好栄
ちよえ
恵美子
博利
清泉
白汀

川柳塔わかやま吟社

宮口 克子報

一石を投げて見分ける敵味方
透明な会計ペンをとがらせる
すぐ曇る鏡女として磨く
人間を裁く地球の温暖化

利治
精子
富子
綾子

変身の一部始終を見た鏡
機嫌良い顔に満足する鏡
鏡台のすみに亡母の匂いする
まだ夢のつづきが欲しい鏡見る
流れ矢に当たると神の裁きかも
始末書にしふしぶながら判を押す
キリストも釈迦も裁けぬのは心
国籍を裁くことない流れ雲
裁く立場も悲しい事があるだろう
ままごとに裁かれてゐる母の癖
面成敗いつも女が損をする
判決の眼を惑わせる支援の輪
裁かれていよう疑心が晴れるまで
重たくはないがお腹に石がある
苔むして石はお寺の色となる
痛いなあ蹴られた石もそう思う
人間の悩み見て来た百度石
けつまずく石が苦虫殺してた
原石は高い値段でなかつたに
冷えた石積んで炎を抱き続け
石の詩風の時あや旅衣
使い込みした会計が休まない
会計を受けてくたびれもつけする
割勘になって会計酔いつぶれ
捨てた石の役で大志を抱いている

大輪
射月芳
佐代子
好笑
正博
淳太郎
呑天
稚代
紀久子
めぐみ
英子
由美子
美羽
金太
萬的
重治
三男
紫香
豊太
寿子
輝子
愿
泰子
千寿子
克子

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

鶴のひと声は命令調でしょうか
鶴が来て亀もゴソゴソ這いだした

てい子
八重子

ヒナ鳥もやがてはミミズの味を知り
淋しいね雀にグチをこぼすなり
籠の鳥春愁の身とつたうのか

マジシャンに追従している白い鳩
鳥雲におくれた春がやってくる
えさ追って平和のハトも戦する

飛び立つ羽音気にする籠の鳥
とんび負けるなからす負けるな鉛空
異国語で何喋ってる鳥の園

小鳥たちと話が出る鳥の子
屋根の上カラスもプラン考える
逢いにきた雀の群れが少ないぞ

手のり文鳥 いえいえこれは青い鳥
鳥の目に猫も私も同じ敵
耳を澄ませば鸚鵡が小言真似ている

物知りのカラスが今日も屋根にいる
日本の空にいるね鳥になった司馬遼太郎
渡り鳥国の秘密を洩らすなよ

ツンドラへ鳥愛しいほどいそぐ
はぐれ鳥だんだん骨を強くする
身の内の鶴よ光の中に翔べ

改札口通れば鶴になっている
梵鐘を撞く弓なりの五体
友達がよっしゃべるので黙っとく

悲しみが浅瀬の杭で立ち止り
四季の音川の流れに知らされる
胸底の川の瀬音が断ち切れぬ

胸底の川の瀬音が断ち切れぬ

ローズ川柳会

山崎

君子報

花子 弘子 晶子 玲子 天雀 ゆき 恵子 寿々子 すみえ 日枝子 保子 夕子 なみ 富美子 瑞枝 亜弥 より子 蘭 春枝 千春 千代 荒介

教室の近きにし友に花の席

アホやなあと背中叩いてくれた友

鮎育つふる里の川こぼし咲く

蛙還る川いつくしむ人の環よ

天国に待つ友ふえてクラス会

悪友のアキレス腱を知っている

限りなく引き出しを持つ友がいる

流れ静かな川が企み秘めている

身のうちの傷み分け合う友がいる

再会の友も浮き世の合友みれ

ひからびた川に春雨待つ暮らし

自惚れをすばりと切った友の言

腹割って話せる友が居てくれる

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

ひと言を風に消された悔いがある
満ち足りた胸吹き抜ける風は何色
白い風吹いてあなたの彩になる
風よけの父の大樹が枯れてくる
競馬場 虚しい風に送られる
風の目を盗み浪曲聞いている
老いの散歩をさそい出すよう春の風
とんぼの羽根すかせば故里が見える
実る日を祈りつづける羽織い
羽ばたき日信じて母は耐えている
こだわ리를捨てた夜白に絵を埋める
羽搏く子見送る母に祈りあり
あるがままに生きてこだわり脱ぎ捨てる
こだわると何時か討たれるけもの道

藍 哲子 トミエ 貴代子 まさお 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 はつ絵 民平 義子 笑女

こだわ리를捨てて真つ赤な靴を履き

こだわってそれからさしみ出すレール

こだわりを少し残して子が嫁ぐ

こだわりの料理にきかすかくし味

こだわりを包み隠せぬ生返事

ちぐはぐな一人見ているお月さま

ちぐはぐの曲を奏でる金婚詣

河内弁でちとちぐはぐな勇み足

ちぐはぐなファッションで描くファンタジー

今日明日に迫ってやあ腰上げる

喧騒の駅に育った燕の子

悪友をいっぱい持っている強味

あちこちと部品が傷む夏の冷え

古里は温い風吹くことと決め

言訳を含めて点てる茶の苦さ

春の花屋ステップを踏む音がする

サークル樟樟

小林

一夫報

風が呼ぶ大平原の兵馬備
前向きになると腹立つことばかり
ミノカルビロース シマチョウ ヒトカナシ
空気よとんでシルバースhirt眠くなる
言い切った背を向けるまだ青い意地
あかんべえ 自分の中の弱虫よ
れんげ畠 遠い記憶の兄いもと
遠いとは宇宙の事と世は変り
遠ざかるほどに濃くなる母の血よ
耳遠くなれば水底みえてくる
遠くなりいいことはかり思い出す

文 絹子 鹿太 涼子 二南 透太 まさお 萬の 房子 春蘭 しげお 正坊 てる トミエ 義子 鬼遊 楓楽 一夫 希久子 房子 智恵子 みつ子 雅子 あずき 喜美子 いわゑ

風呂敷で何でも包む喜寿の母
包むよな仏の慈悲に浸りたい
弁当を包んで妻の朝終わる

許認可も包みの額で決められる
花束にそつと包んだ恋ごころ
包囲網主役はいつもぐりぬけ

包み紙美しすぎてしまひ込む
ばれてるよ 包みかくしのできぬ人
金利下がりそろそろ貯え底をつき

札所巡りそろそろ終る弾む足
根回しのそろそろ効いてきた異動
新世紀そろそろ老いの射程距離

そろそろと始まりそろそろ妻の愚痴
へそくりを貯めてそろそろ妻強し
そろそろと言われしやきつと伸はす腰

感情をすぐ顔に出す若き持つ
火の橋をもどる若きを持つている
だんじりの若い熱気が人を呼ぶ

輝いてマストの上に立つ若き
ブランドとメイクで若き誇つて
若竹のすくすく曲ること知らず

どん底を耐えた若さに今がある
過信した若さにちよつとつまずいて
子の捨てたミニスカートで若づくり

困つた笑顔で受ける孫の無理
善守

喜美子

保子

まみ子

睦子

喜与志

川柳塔打吹

奥谷

弘朗報

博史

純次

方郎

祥風

正三郎

孟勇

恭子

久子

吉太郎

眞郎

直次

馬洗

正安

つよし

子の苦勞少し見物してやろ
歓迎をせぬ国賓に旗を振り
浄土から娑婆の見物しておわす

はきはきと言え打たれる釘になる
傷つけることをはきはき言い過ぎる
はきはきとしない男で捨てられた

犯人は見物客の中に居る
見物はされぬ深山で咲く桜
癌細胞無断訪問お断わり

ホームレス失敗だとは思われない
仲人ははきはきなど娘褒め
癌らしいどうもはきはき治らない

はきはきの妻にまかせた娘の見合い
春一番バケツ飛ばして荒つぽい
このころはここで終止符打つておく

予告して訪問をするお人好し
訪問を互いに苦にせぬ仲になり
訪問者選る楽しみを母にあげ

リースとは気付いていない訪問者
求婚にはきはきしない背をたたく
見物は火の見櫓の上がいい

はきはきと言つてやりたい奴が居る
故とみお

野草

雄々

佳女

玲泉

玲坊

松盛

きみ子

柳風

螢

節子

幸子

秀芳

勝見

玲子

博丈

よしえ

宗光

妻水

喬水

猿杏

夫婦別姓女の園がかしましい
入園式はじめて母と離される
老春の憂さをはき出す公園のベンチ

母親に似た園丁のやさしい目
ひとりになると公園に来てしまふ
泣き虫を四、五人かこむ幼稚園

菜園でいつとき何もかも忘れ
公園に遊んでくれる鳩がくる
口裏を合わせて眠さやつてくる

お茶替えに立つて眠気をまきらわす
朗報がすつきりさせた眠い顔
猿芝居日本中が眠くなる

札束にご縁が無くてよく眠る
春うらら人もベットも眠くなる
お隣の芝生が好きなのうちの猫

ナイターのライトに映える芝の色
人工の芝生に温み感じない
お隣の芝生がちよつと青すぎる

入つてはいかん芝生にあるベンチ
リハビリへ看護婦さんが三人目
春はまだ寒の戻りをくり返す

公園の画家の無口へ人が寄り
春の風日傘の舞妓がふりかえる
露草今日の主役にはにかんで

幕尻の土俵をさわやかに降りる
主坊

紫香

吉之助

萬的

川柳後案吟社

從野

百合子

葉子

武庫坊

風云児

飛鳥

源一

瀧小

年代

波留吉

ただし

修水

正坊

芳子

庸佑

足るを知るふんわりあるくタバコの輪

手鏡の鬼女におののくのは私

揺れ動く思案のはざまに苛む

欲しいもの金で得られるものばかり

謎ときが始まる二日酔いの朝

新緑がまぶしい生きようとと思う

大吉を桜の枝に結ぶ夢

春風に引かれて病も山を越し

葬式の時だけ出会う友となり

春の風入学祝い二つたり

地上一尺花を夢みて種を蒔く

握り飯ころころ命の音を聴く

朝冷えに古傷疼く老いの肩

足踏みが続く余生の曲り角

菊人形大河ドラマの主が活き

鏡の奥の傷は語らぬ二人です

人生の絵馬を探して旅に出る

春風も乗せて無人駅発車

人の荷が解り我が荷を重くする

孫あやす初老の婦人弾んでる

我が庭のどこに惚れたか土筆生え

代議士は玉虫色が大好きで

割札の痛みを一族分かち合う

作文の中の自分史活きている

澤 洋 会

藤井

正義親

額縁に入れると他人の絵に見える

天国へ近づくと階段をのぼる

八十八ヶ所何段上がった山の寺

美智子

幸子

柳五郎

拓治

道博

まさお

吟平

浄美

秋月

青銅

正秀

照路

たけ志

佐加恵

邦季

博友

哲郎

吉郎

信善

忠成

喜充

草風

鯨虎狼

正義親

東雲

希久子

叔子

ジョギングに一汗初夏の風に逢う

階段でリハビリしてる雨の午後

甲子園球児の汗が勝てるを呼ぶ

一部始終防犯カメラ見てました

少女多感ガラスの靴をはきたがる

いいないでガラス細工の心です

三人三様の忠告心揺れ

発車ベル仕草で話すガラス越し

冷汗をかかせ笑いで済まされる

台風接近喋りつづける窓ガラス

理性とは別なところでゆれやまず

動くオモチャにガラス細工は目もくれず

金魚鉢わたしの愚痴を聞いている

税務署へこれこの通りガラス張り

病み上がり一段二段とふしめる

キッチンを磨くところがゆれる日は

ガラス張りの茶店で内緒話する

世界中に揺れて広がる世紀末

長い手紙書いて階段降りてくる

タラップを話題の人が降りてくる

にんげんの街に階段がおすぎる

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

季の移り知らぬコップの水中花

歯刷牙を立てて退屈なコップ

紙コップの軽さスピーチの軽さ

幸せな朝ですコップ光らせて

絡ませた指は口よりよく喋る

転んでも夢のかけらを拾う指

志華子

凡砂

綾子

真司

宣司

みつ子

光子

恭昌

源一

正雄

さと美

絹子

佳秋

久峰

照子

楓楽

蛙

ひろ子

英千子

正坊

鬼遊

義芳

芳子

光穂

澄子

渉

ハツエ

指切りげんまんこで別れる石仏

唇を噛んで乱れを論す母

リストラの風で乱れる蟻の列

乱れ籠にうずくまってる母の嵩

ほつれ髪ゆうべの乱れ匂わせて

裾みだしかめめになって翔ぶ智恵子

自分史の乱れた頁顔伏せる

花吹雪池もぎつしり浄瑠璃寺

桃の流れた川ドブ川になりました

自慢ではないと自慢の種こぼす

自己主張自分の背中見えぬまま

上席も末席もない立食会

致死量に賭ける色恋沙汰がある

お菊さんの音で小皿一枚割りました

冬の蜜が忘れていった入学願書

二つに割ってひとつ妹の手に残る

抱けばなお聞のなかつる桜冷ゆ

泉水を少し広げる喜寿祝う

愛して会えば必ずしくなり

八十八夜友と話がしたくなり

肩書がふえて馴染めぬ人となり

帰省客に押されて押してくたびれた

待つことに慣れた女の座りだこ

ほろ苦い恋もしましたさくらんぼ

倉吉川柳会

谷口

左側歩いて見せる頑固者

右向け右しかし私は左向く

三代目左国扇が破れそつ

水聲

正治

比ろ志

年代

伊三郎

すみ

まさお

正子

夢之助

紫香

求芽

一笛

歌子

杜的

武庫坊

正一

薫

とみ子

吉太郎

昌子

白溪子

向西

石舟

鹿太

次男報

智子

雄々

よしえ

左でも右でもよろし金握る
あの頃の左翼はどこか格好よし
手が早い父も息子も左利き
自民党天下取るのに左派と組む
左右のぞいてそつと抜け出すラブホテル

左手より右手の方がきれいです
車では左走らなアカン国
返し縫い左で返す母の手早さ
左派の彩果けて無気味な永田町
御本家の方が今では左前
左手でごはんをたべるむつかしさ
こまめには働く割に左前
左手もつと器用になつてくれ
左の首にチラリチラリとキスマーク
左遷地の水に馴染んで春巡る
生活のヒント無農薬を買い

とつとり川柳会

武田

帆雀報

完璧に鍵かけ金庫持つてかれ
完璧な男ちよくちよく蹴蹴く
完璧にだましたつもりが騙される
完璧な目には大きな山に見え
完璧な美人冷たい女で嫌
アリバイは完璧浮気して帰る
完璧な人にもあつた古い傷
完璧な答弁だから怪しまれ
赤い血が暴れ完璧にはなれぬ
完璧でない妻だからとても好き
不肖にも親より背丈伸びてくる

次男 天雀 蟹 かつみ 喜美子 和歌子 苦句 ゆり子 黙光 幸子 御前 秋草 康子 一夫 和枝 小生

不肖の子金ある場所を言えという
当選のあととは不肖の声聞かぬ
不肖の子スパイスにして気張ってる
日本海俺の不肖を知り尽くす
拝啓不肖この度左遷されました
名刺には不肖私と書いてない
天皇は不肖を朕と申された
家中を酸欠にする不肖の子
家の下不肖の僕に酒がある
あくびしながら明日の事を考える
春うらら猫にあくびを移される
難段のあくび一つが命とり
七人目の敵とも知らず大あくび
あくびした途端に竿のリール鳴る
大あくび丁度上司と目が合った
あくびしておれん対抗馬が出たぞ
何でもないのでこれはあくびをした涙
あくびしている間にも桜散る
生真面目な男とあくび繰り返す

川柳大阪

坊農

柳弘報

春風と戯れ上手のアクセサリー
若人よ飾らぬ時が美を感じ
スマートな体型気にし拒食症
いろいろな趣味が生きて付属品
今だから当時の過失話せませう
後の処置大事過失は生きていく
許された過失に酒のほろ苦さ
一球の過失勝利をフイにする

大漁 正和 ひろ子 和歌子 輪多朗 帆雀 かつみ 和枝 完子 秋女 明美 一瑤 銀嶺 芳江 石花菜 宣子 睦子 忠良

月面へ一步踏み出す気持ちです
スマートに口説けぬままに夢破れ
摩崖仏母を求めて春の旅
お月さん私のしくじりだまって
過失なら私にもある包んでる
イヤリング人の話をさりげなく
スマートな言葉で別れ飾る奴
摩崖仏小さな迷い消してくれ
過失とは認めぬ訳がウラにある
古希の坂過失も一つ二つ捨て
アクセサリつけない妻も美しい
女の目男は所詮アクセサリ
アクセサリー女心は目立ちたい
スマートな顔で証人嘘を吐く
スマートなバラに似た人棘を持ち
それぞれに違う天寿の皮算用
定年のバラ最高のアクセサリ
過失かもアイラブユーと言つたのは
人恋し私と揺れるイヤリング
うやむやのうちに過失を許す妻
スマートにさよならしたい流れ星
スマートに無縁と笑う肝っ玉

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

今ゆけばまだまだ間に合う里の駅
雪便りまだまだ遠い北の春
コンマ以下まだまだ興味ある命
新入社員背広まだまだ身に添わず
夏はまだまだ突っぱっている空の雲

酔照 良花 美花 柳昌 青道 比呂志 まつお 希久志 ダン吉 川童 雅巢 鉄心 美津留 一歩 金太 洛醉 笑風 重人 柳弘

まだまだと父の眼鏡は手厳しい
いじめっ子いじめの子にもある悩み
本当は別れたくない倦怠期
ばったりと句帳を閉じた午前二時
新調かりて迷う娘の晴着
スーパへ妻の家来でついて行く
もつれ糸解けてさわやか五月風
迷い事ばかり人生面白い
迷いから覚めると回り出す時計
コーヒータム心の迷い溶かしてる
菜の花も 蝶も寒さにちと迷う

川柳藤井寺

高田美代子報

占いを信じて待つて待ちぼうけ
病院に来て泣かされる待ち時間
判断に迷い相手の出方待つ
待ちましよう貴方の愛が届くまで
バラ活けて待つ楽しさを倍にする
待つていた便り封切る手を洗う
残り火がまだ何やらを待つている
税務署に嘘が下手だと叱られる
居留守だと子供の顔に書いてある
母さんを慰めてる嘘もある
嘘つきのまんまで今日も暮れてゆく
夫の言うロマンはきつと嘘でしょう
銀行もテレビもボクも嘘をつく
哀しいな嘘がだんだん上手くなる
振り向けば謝ることの多いこと
花に詫びつばみに詫びる花ばさみ

正治 八ツエ 弘次郎 勇次郎 まさ 六浦 十四郎 江美 鹿太 夢之助 紫香

遺憾とは言うが決して謝らぬ
昨夜を詫びるみそ汁を注ぎながら
星沢山 謝り上手な母である
星眺めあしたはきつと謝ろう
謝ると決めて桜が美しい
新聞の誤報小さく隅で詫び
謝って握手のあとの旨い酒
謝っても傷の深さに届かない
すみませんやつと空気が流れだす
嘘つきの嘘の回りは隙だらけ
葛井寺あれやこれやの願かける
迷い箸くずすに惜しい桜鯛
吞まぬ人よく食べ注いで回るだけ
マントルピースの部屋でころを温める

三幸川柳教室

三宅

保州報

静かさへ一番鶏の競い合い
人間不信冷静にして心病む
読書三昧静けさ破る花粉症
今泣いたカラスの寝息聞いている
静かだと碌なことない孫の部屋
いら立ちを鎮めてくれる水中花
ざわめきを押さえたボスの咳一つ
ぬるま湯を脱し切れない肌寒さ
流しびな北の大地はまだ寒い
ひと言が唇寒くした波紋
風評を寒い思いで打ち破る
金メッキ剥けてお寒い薬指
なるようになれ点滴の寒い音

六点 和子 昭水 絹月 紅月 志洋 鐘造 キミ子 和樹 宗一 三郎 春蘭 美代子 みのる

都市砂漠れ合う人の無い寒さ
ふる里を捨てると寒くなる背中
まごころの見えぬ言葉が肌寒い
遼太郎近けば菜の花さむい道
物差しの違いを埋めるポトル
瓶の愚痴聞こえて来そう回収日
一升瓶ふれば金粉踊り出す
ポイ捨ての瓶も再起の自負がある
すべなくて念い沈めた瓶の底
愛の花いっぱい活けた丸い瓶
一升瓶転がり出した花吹雪
薬瓶すかして命確かめる
山河越えやつと平らな旅になる
宿帳の嘘がチップをはずませる
月旅行第一号はかぐや姫
フルムーン照れることはもすつと出る
フルムーン妻も肝をかいっている

岬川柳会

八十田洞庵報

世話になる人とする人かみあわず
世話します遺産品あての声を出す
親は子に教えられたる水溜り
花見の宴下戸は団子の立見席
植えつけた邪教の教理根づかない
道德を植える心が親を責め
苗植えて土と対話の昼下がり
幼子にテレビが知恵を植えつける
少年に植えつけておく母の愛
かすみ立つ山にあれこれ問いかける

千秀 和子 百合子 朱夏 利治 美子 かず子 当代 美智子 満洲子 正一 高夫 三千子 親路 保州 貞子 桂香

目がかすみ孤独の老いに来る不安
かすみ食へ生きられますかホームレス
春霞まわり舞台で佇ちつくす
誤解され心のかすみ晴れぬまま
何事も体験ですと同棲す
懇親会カラオケ好きがはばきかせ
多忙だと聞いた人から誘われる
聴く耳が多忙で重い金バツジ
鉛筆は手帳の秘密嗅いでいる

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

生きるもの命を食べて共生し
記憶にない何と粗末な自己保身
ホスピスの短い命明日を生き
恐妻の噂が先に着く任地
真実を話す勇気のない世相
こだわりをもて余してる昼下がりが
ふらんこを天までこだわり置いてくる
こだわりを捨てて頭を軽くする
こだわった妻が敬語を使いだす
こだわっているから恋の絵にならぬ

富柳会

池

森子報

住専で悪い奴はどうまく逃げ
核心を衝かれ歯切れも悪くなり
ジェラシーに深紅の花がからみ合う
五臓から二次会中止の指令くる
古里に心を開く鍵がある
歯切れよいアンタの声は夢ん中

みつ子 いと 幸 悦子 ヤエ 龍弘 よし子 浪速子 洞庵 千枝子 田実子 能子 清芳 香住 弘直 喜美子 欣史子 シマ子 あずき 紅月 紅紫朗 文子 冬虹 アキ 登子

人間不信互いに鍵を持っている
口下手が書いた歯切れのよい便り
鍵外し胸の奥まで陽にあててる
離婚届鍵も一緒にそつと置き
湖びらき巨大な鍵で春を呼ぶ
解く鍵を母は心の奥に秘め
薔薇で歯切れを試す総入れ歯
平凡な暮らしが好きで冷や奴
呪文となえると裏門が開く
一刀のもとに男を切る咲阿
花吹雪びかびか光っている若さ
嘘ひとつ歯切れの先にひっかかる
打ち消して明日の風を信じ切る

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

昭子 鐘造 絹子 二子 三子 伊勇 智久 昭水 美代子 欣之 維久子 花梢 森子 博史 源一 ただし 悟郎 つえ子 知香子 登代子 明光 きく子 吉太郎 瀧小 一笛 恭子 重人

和歌山県川柳大会

とき 9月22日(日) 午前11時開場
午後零時半締切

ところ J A会館5F(J R和歌山駅前)

事前投句 指定葉書2句(8月15日締切)

「波」 桜井千秀選

(投句は出席者に限る)

(懇親宴への出欠明記)

投句先 下641和歌山市紀三井寺11-2

牛尾緑良宛

兼題と選者(各題2句)

「並ぶ」 福本英子選

「無」 浜脇春江選

「音」 辻スミ選

「笑う」 青枝鉄治選

「合図」 池下まこし選

「運命」 山崎日出男選

会費 15000円(軽食・記念品・発表誌)

懇親宴 35000円(午後4時同会場)

主催 和歌山県川柳協会

西尾 栗先生一周忌句会

五月十一日(土) 八尾グランドホテル

今年は例年になく肌寒さを覚える五月だが十一日、西尾栗一周忌句会の当日は、若葉も美しく心地よい初夏の陽さしであった。

西尾栗名譽主幹の遺徳を慕って、愛知・鳥取・島根・広島・高知からの遠来のお客、また、他柳社からの参加者も多く、一九三名の出席者で八尾グランドホテルの三階ホールは埋められた。受付で手渡された『定本西尾栗句集』は栗先生のお好きな茶色の表紙で、開けば和服姿のあなたかな笑顔に「みなさん、ようこそ」と優しいお声まで聞こえそうである。

午後一時十分、板尾岳人氏の司会により開会、河内天笑氏が開会の辞を述べた。つづいて、ふあうすと川柳社の田中好啓氏のお話。突然のご依頼でとのまえおきながら、栗先生の懐の深い温かなお人柄に触れた。二人目のお話は愛知県大山市の鶴かご川柳社佐藤一粒主宰。栗先生とは古いお付き合いではないが、そのおらかなお人柄に惹かれて、平成四年には『水鶏庵こらむ散歩』の出版のお

世話をさせて頂いたと話された。

その後、栗先生ご子息舜介氏のごあいさつがあり、また、美与子夫人の声を話まらせてのお礼の言葉には、思わず目頭を押さえる人も見られた。橘高薫風主幹は、たまたま四月末に岩手県北上市にある日本現代詩歌文学館を訪れた際、「水の世界」というテーマの展示があった。そこには、三好達治・北原白秋・井上靖・斎藤茂吉・高浜虚子など有名な方々の作品にまじって、栗先生の「人恋し人わすらわし波のおと」の色紙が飾られていた。偶然に出合ったご縁の深さ、名句の命をしみじみ感じたと話されて参会者の共感を誘った。引き続き、入選作品の発表に移り、各選手とも披露前に栗先生の思い出をこもこも語った。閉会の辞は西田柳宏子理事長。句会終了後、午後五時から同会場で百名の参加により懇話会が催された。はじめに、川柳ますかつとの寺尾俊平氏の発声で乾杯してなごやかに歓談、栗先生の思い出話は尽きることがなかった。



兼題「帽子」

宮西弥生選

ベレー帽被り亡き師と旅に出る
野仏もかぶっています野球帽
スケッチの旅に出たがるベレー帽
母の日も母の帽子は草むしり
革命に賭けた帽子こそいのち
バブル以後 帽子から鳩出て来ない
父と子の話を聞いている帽子
帽子脱ぎ人に還りしナポレオン
マジシャンの帽子に愛は出てこない

英子 落児 ときを 月子 由紀子 楓 楽 岳人 幸生 求芽

皇後の帽子 子供の目の高さ
 生き死にの話のつもる花帽子
 平成の案山子がかぶるヘルメット
 ベレー帽ふらり放浪癖が出る
 二つの帽子使い分ける花の雲
 制帽を離さぬ社長元気です
 追っかけても嘘の帽子はつかまらぬ
 帽子すこし汚れ上手に歳をとる
 敵ながらあつぱれ帽子ぬぎました
 夏帽子捨てた抜けられない冬へ
 汗流す若さが好きな登山帽
 ひねくれた鳩で帽子を出たがらぬ
 退職した父の帽子があくびする
 作業帽 火の匂いする風がある
 ホームレスの帽子が夢を捨てきれず
 島のブティック表裏帽も置いてます
 夫には内緒の帽子一つある
 帽子だけくるくる変えている政治
 皆僕のものだよニダースの帽子
 姑になる古い帽子は脱ぎ捨てて
 蝶々が白い帽子を追いかけける
 ものさしが狂い他人となる帽子
 表裏帽子ナスもキュウリも植えた
 喧嘩した訳を知ってる帽子掛け
 おしゃれパンザイ夏帽子買ふ古希になる
 夏帽子あなたの暗示かけておく
 定刻に通る帽子がまだ来ない
 今日の仕事のきびさ吊るす帽子掛け
 ウツの日はリボンの帽子被るべし

富美子 由紀子 鐘造 澄子 維久子 帆雀 千代 千春 千梢 千ころ 求芽 一二三 昌三 俊平 朱夏 哲子 たず子 桂香 あやめ 楓楽 鬼遊 颯云児 笛生 岳人 文子 蛙 武庫坊 天笑

ハンチングいやみとイキの間いく
 帽子屋の空気はおしゃれでカラフルで
 万年補欠の青春だった野球帽
 阪神が勝てば喜ぶ野球帽
 おばさんの帽子飛ぶよに売れるとか
 青春を戦闘帽で飢えに耐え
 帽子掛け父のおしゃれな顔がある
 手作り帽子に地蔵目をほそめ
 スイミングキャップが狙う世界新
 ブローチを選ぶ帽子につけたくて
 ふる里は表裏帽子春帽子
 ステッキとベレーで朝が動き出す
 天皇の帽子拝んだ頃もある
 もう鳩は出ない夫の古帽子
 ベレー帽 目深に刑事尾行する
 男は嫌いです つば広の帽子
 血圧に悪いタイガースの帽子
 悪口を受ける丈夫な帽子です
 生活の知恵 手ばなさぬ夏帽子
 山笑う帽子も笑う出かねば
 風一会火種を抱いている帽子
 帽子掛けの帽子飛び出す三高歌
 涙で編んだ戦闘帽がある展示館
 佳
 踏まないで喜劇役者の帽子でも
 負のころ隠す帽子が深くなる
 表裏帽 母へ働き過ぎぬよう
 野仏の帽子に祈りこめてある
 風に盗られた帽子がくれた緑でした

蕉子 射月芳 利武 冬虹 花梢 亜弥 雅文 とみ子 森来 桂香 寿美 千秀 金太 石舟 完司 昌三 千梢 寿子 華子 華子 華子 三窓 はつこ 維久子 花梢 良子

帽子掛けたちは昨日のままでいる
 高い樹に父の帽子がかけてある
 天
 ベレーもハンチングも似合う髭には叶わない
 軸
 妃殿下の帽子でお顔だけ見えす
 兼題「頓智」 小林 由多香 選
 末席の頓智に一座すくわれる
 生まじめな男で頓智通じない
 ビール一杯あおるとすつと出る頓智
 母さんの頓智あかるくなるわが家
 ライバルに勝てる頓智が働かぬ
 どたん場の頓智に愛が試される
 子沢山 頓智すぐれたのも混じり
 負かされた人も納得する頓智
 顔に似ぬ頓智で男見直され
 振り上げた拳 頓智で包みこむ
 幸せな顔をするのも頓智かナ
 コンビニへ頻智の素を買いにゆく
 頓智があればもつと出世をしただろう
 パソコンに疲れ果てている頓智
 逃げ道をくれたやさしい頓智です
 若嫁の頓智 一座に笑み戻る
 神のウィット被災地の空美しい
 老木も頓智も少しずつ濁れる
 頼りにはならぬ頓智の太郎冠者

荒介 千春 好啓 弥生 登子 智子 ますみ まさと 智恵子 英千子 洋敏 富美子 花梢 緑良 朱夏 昭水 千梢 一壺 あやめ みつ子 鹿太 美房

頼智きく妻にときどきたまされる

おばあちゃんの頼智 輪切りの華出る

カルシウム不足か頼智ひらめかぬ

わさびほどの頼智を効かしもている

山を焼き春の頼智を掘り起こす

助手席で地球は丸いということんち

頼智では嫌されなんだ流れ弾

母さんの頼智から吹く春の風

悪智恵も頼智も僕に欠けている

伏す母へ頼智見舞いに持つていく

勝手口 嫌な頼智を引き受ける

四面楚歌 友の頼智に救われる

民宿を建てて頼智が生きてくる

ある時は力に勝る頼智です

頼智で溶かしてくる昨日のわかまり

先頭に出ない頼智に味がある

ライバルに塩を贈つてやる頼智

お見舞に頼智をひとつ提げて行く

理不尽な男に頼智身を躲す

頼智いっぱいつめた袋で輪が和む

幾度の修羅場を知っている頼智

水溜まり頼智問答くり返す

真つ当な僕の頼智じや通じまい

転げ出した頼智に危機が救われる

朝子

とみ子

はつこ

高栄

荒介

蕉子

蛙

千寿子

洋敏

艶子

由紀子

諷云児

好啓

冬虹

文子

帆雀

射月芳

完司

多賀子

美智子

帆雀

瑞枝

楓人

悟郎

正雄

やわらかい頼智が好きな紙コップ

砂漠化するむ街で頼智が枯れてゆく

切れ味の悪い頼智で笑えない

ウィットで風を味方にしてしまふ

佳

相手には通じぬ頼智宙に浮き

雑魚なりに頼智が効いて憎めない

頼智には負けても女崩れない

大声のあとの頼智が効いてくる

長丁場 頼智が一つはしくなる

人

頼智一つで砂漠に水が湧いてくる

すばらしい頼智に返す球がない

天

間髪を入れぬ頼智に庇われる

軸

頼智から小さな危機を救われる

兼題「ステッキ」

小松原 爽介 選

ステッキはいまどのあたり一周忌

よつもてた恋のステッキいま杖に

ステッキを女が持てば杖になる

ステッキと妻と石段を上る

身の程を知りステッキにたよりだす

ステッキの土産照れくさいじゃないか

熊生

楓楽

美代子

千代

義

澄子

アキ

蘭幸

いわゑ

隆

幸生

千代

由多香

薰

朝子

義

蘭幸

たず子

とみ子

泰司

武庫坊

昭水

父の帽子もステッキももう映画の中

ステッキでいつかは探しあてる夢

ステッキを忘れたとこが高うつく

トレッドマークひげと帽子とステッキと

ステッキを買つたとき居なくなる

ステッキの極に杖をしのばせる

永旅の極に杖をしのばせる

優先席ステッキ見ても眠るふり

ステッキも極に父の一人旅

ステッキの艶が認める紳士録

ステッキが似合うつむぎのよき世代

チャップリンのステッキ青春巻き戻す

ステッキが父のロマンを知っている

ステッキのお陰地球をまだ踏める

妻の愛それが誇りのステッキで

愛用のステッキ亡父の顔で立ち

ステッキをつくつと明治の顔になる

遠回りするステッキとバラの花

いつからかステッキ分身になっている

ステッキを正眼のまま某居士

峰を指すステッキ子等に夢を問う

ステッキは終生あなたと決めている

ステッキの先はいつもと本心だ

父のステッキ五月の風と戯れる

ステッキと杖の違いがわかるかい

楓楽

緑良

章久

満津子

希久子

一壺

絹子

ふみ

寿美

しげお

英王

はつこ

花梢

アキ

義子

三窓

熊生

夕花

完司

哲子

菊野

求芽

千代

智子

真知子

朱夏

としお

富美子

朱夏

ステッキでまだえらそうに指図する
ステッキが絵になる人と春の庭

兼題「温顔」

藤本 静港子 選

ステッキの先を読んだのは妻だ
つけ馬の持つてくるステッキが怖い

仙人になれるステッキなら買おう
ステッキが戦のおろかさを語る

男の条件みたすステッキだったなあ
風格はまだステッキに早すぎる

ステッキに機嫌を聞いてから出かけ
ステッキを忘れあゝ世で寝る羅漢

ロートン終るステッキまでが軽くなる
ステッキを持ってタツプも踏めますよ

ステッキに体温があり五月晴

ステッキの午後ワンカップしのはせて
会者定離 温もり残すステッキよ

アンコールに酔ったステッキ残される
ステッキでつづばっている自尊心

原風景にステッキの父がいる

ステッキをくくり回せば父の風

ステッキを持つと傍観者になれぬ

次の一手をステッキは考える

ステッキで人間指したことがない

爽介

章峰

桂香

保子

花梢

保子

温顔へ女性ファンも多くいる
お地藏さんに似た温顔で金がない

何もかも許した顔があたたかい
会社での温顔妻は信じない

温顔へすっかり解けていく流れ
温顔の髭からぼろり出るジョーク

笠智衆の温顔は未だ眼裏に
写真では温顔だけどこぞ

神父さま微笑わたりが清められ
黒梓の温顔苦勞させはった

温顔に打ち明け話してしまふ
三分経ったよ温顔から抜ける

温顔ふたつ心遊ばす石の庭
いやな顔したことがない地藏さん

温顔は白一色の髭が伸び
温顔は言い勝つ無駄を知っている

温顔の奥にながれる水・炎
温顔の裏で時々ラッパ吹く

宿の浴衣みな温顔にしてくれる
いい顔をして死神に会いにゆく

温顔でネズミも捕れぬうちのタマ
温顔から怖い話がとんで出る

温顔の仮面を付けた嫁が来る
温顔だった軍帽をかぶっても

思惑があり温顔をくずせない

温顔で何の役にも立たぬ人
温顔の向こうに凜とした背筋

どっち向きにも私は温顔など見せぬ
凡人の性温顔になれませんか

温顔になった夫の花鉢
許さなげに神に近づくと翁面

風の夜も温顔に隙がない
甘えなくなる温顔に隙がない

温顔に苦勞話は似合わない
あんぱんのヘソからこぼれた笑顔

温顔の父は無冠の人だった
温顔を真似してみても二日ほど

温顔の沖でゆめめく蜃気楼
ごめんなさい優しい顔になれなくて

温顔のあの瞬間が生きている
温顔の昼寝仮面が外れてる

一喝のあと温顔になる仁王
温顔の一日だったああしんど

歳月を顔にたくして飲む地酒
欲のない温顔で舟こいでいる

陽あふない野鳥をかばう温顔
雨風を凌いだ果てのご温顔

雄弁なジョッキを温顔で聞こう
ズームから温顔でないものを見る

クレヨンで書く太陽は温顔だ

温顔のまわりから風風いどくる
遺影温顔れんげ畑が炎えている

温顔の毒舌ななめから見てる

一壺

森子

金太

由紀子

荒介

由多香

能子

朱夏

隆

完司

瑞枝

千枝子

天笑

冬虹

喜代子

冬虹

雅文

熊生

一

完司

秋寿

良子

晴代

千代

荒介

月子

春の序曲はいつも温顔持っている
面長の温顔もあり花あかり

人

温顔で熱いうどんを吹いている

地

温顔に斬られて風は丸く吹く

天

丸々と背なも温顔してなさる

軸

叱られている温かい瞳の中で

兼題「宝」

岩井三窓選

ビー玉は宝透かすと夢が見え
鑑定之宝先祖もお人好し

傷ついた宝を横に座らせる

我が宝そろそろ光り出しくれ

ころころと遊ぶ目の離せない宝

お互いを宝とおもふ茜雲

煙になったおふくろという宝

宝物父の手あかのついた辞書

長生きを宝と思うつくづく

愛という無形の宝子に渡す

本棚に続くわたしの宝島

絵にならぬ妻だが掛け替えない宝

登校拒否する子宝に泣かされる

さかすきに宝をのせて遊んでる

書は宝百まで生きる知恵もたらう

大地震宝の価値も揺れました

ここ掘れと言うのを待つて犬を飼う

明美
哲子

美代子

森子

艶子

静港子

哲子

まさこ

章峰

アキ

森子

吐来

完司

明美

一壺

艶子

知っていて微笑む妻の眼が宝
父の書齋にモンローのプロマイド

寝たきりのあなたが私の宝

ふれ合いが楽しく趣味は我が宝

宝でその他人には紙切れかも知れぬ

自家菜園ボクの宝が伸びている

ともだちという宝の山に囲まれて

辞めしなに会社之宝言われても

好きなこと喋れる友がたからもの

年金証書私の宝でございます

何処へでも行けるこの足宝です

宝物みんな集立っていきました

今という時間を宝ものとして

癒えて今この新緑は宝なり

リフトなど宝の富士に無用かも

思い出を宝に晩年満ち足りる

価値観が違いしょうもない宝

子宝を盗り合う塾の案内書

孫五人笑顔泣き顔みな宝

石女の宝は白く揃った歯

家宝のつばいつかは土にかえるもの

子宝が減ると慌てる国があり

B29愛の宝を爆破した

国宝の落語正座できている

お金では買えぬ宝と住んでます

金鶏勲章父は誇りのままで死ぬ

身にしみて思うはたから産めぬ年

国宝の笑顔拝んだ寄席がえり

宝とは生命の電話かも知れぬ

勇次郎
重人

弘美

昭子

鶴丸

完子

紫香

天笑

能子

和子

天笑

宏子

智恵子

光子

柳宏子

鬼遊

切り抜きの記事がわたしの宝物
光らない宝石にまだ気がつかぬ

眼のうとい父の宝の耳がある

半世紀前えんぴつは宝もの

さりげない亡父の言葉がわが宝

笑わせて国宝になるはにかみ屋

子

子が宝昔に聞いたことがある

宝探しに出たまま妻は帰らない

目の中を駆け回っている宝

母を風呂に入れる宝を抱くように

宝物何一つなく終りそう

人

ありがたい宝農家に嫁が来る

地

親ゆずり馬鹿正直と言う宝

天

土の香を宝と思う歳になる

軸

国宝の大阪弁が爽やかに

兼題「孝行」

橘高薫風選

母の涙あれが孝行だったのか

詫びながら父へ一献一周忌

詩人になっておかあさんお母さん

感謝するカーネーションが美しい

孝行のはこりを払う母の日に

お亡母さん花びらの夜具掛けますよ

二度童子の母へお手玉縫ってます

(後)正一
れいじ

桂香

尽呂久

(後)正一

登子

希久子

鹿太

ルイ子

会美

由多香

稚代

美津留

三窓

みつ子

千秀

頑固親命をそつとしておく思い遣り
孝行になるかと酒を買ってくる
孝行を忘れる程の元氣です
心配を少うしにかけておく孝行
どの子にも孝行しろと言いにくい
孝行な子だ公立へ行きました
せめてもの孝行農を継ぐと決め
孝行の土産倍ほど貰うて去ぬ
孝行をひと晩したらUターン
親孝行するため車買わされる
檜山へ親孝行のハイウエー
突然に息子がくれたフルムーン
孝行が父母を空飛ぶ旅に出す
孝行も兼ねて四十で身を固め
子や孫に孝行してる老後です

太茂津 薫
笑子
昭子
登子
金太
由多香
吐来
求芽
扶美代
六點
いゝゑ
泰司
菁風
稚代

子孝行深く死ねたらなこと
幸せに暮して居れば孝になる
逆境で育てた子等につくされる
孝行な子供を持った親不孝
あつという間やらから孝行しなはれや
孝行の言葉へ首をかしげる子
ファミコンの子も孝行をするやろか
親と早く別れ孝行軽く言う
六法が親孝行を消したがる
少子化で子に孝行をするばかり
国語辞典にさびしくいる孝行
孝行な子はかり筭一年中
不揃いのいちごの子も親思い
孝行をするときまつて雨になる
疲れたらすわれる椅子のある孝行

瑠美子
文秋
勇次郎
一壺
天笑
達子
三窓
一二三
文子
楓楽
薫
幸生
寿美
洋敏
熊生

父の日も母の日もない頃育ち
親不孝詫びてレイチに散った兄
戦死した息子がいっち孝行で
救急車の中で孝行考える
孝行を兄と妹比べられ
娘より嫁の孝行はほえまし
孝行と思わぬ子等の尽くし
子育ての楽しさくれたそれでよい
孝行な息子で嫁の来てがない
ゆきひらのお粥が母を悦ばせ
孝行をされに行きます香港へ
孝行へ糖尿病が治らない
親孝行せよと他人が戒める
孝行はせんでもいいと母がいう
孝行の子も背く子も愛しかり

喜美子
とみを
菊野
亜弥
ミツ子
東雲
みのる
哲子
楓楽
夕花
あやめ
しげお
雅文
千代

先生の思い出

森田熊生

私が栗先生に初めてお会いしたのは、昭和四十七年九月に今の全日本川柳協会の元とも言える大陸川柳同窓会が三朝温泉で開催されて、亡父茗人の供をして手伝った時である。翌日砂丘を案内、梨狩りをしていただいた。昭和五十一年八月、亡くなった父の追悼句会を十一月に催した時にお出かけいただき、私の家の狭い二階での偲ぶ会にも来ていただいた。その翌年から八月に茗人忌として句会を開催、以来ご都合のつくかぎりおはなしや

兼題の選をお願いして来た。
最後となった平成三年の第十五回のでユーモアあふれるおはなしを聞かせていただいた。この時は奥様も一緒に、前日台風の余波で荒れぎみの山陰海岸の遊覧船の中で「こんな波の高い時もまたよろしいな」と疲れも見せられずに言われていたことを思い出す。今年二十回になるこの会に、「今度は二十回やな、ぜひ行きまっせ」とお約束していただいていたに残念である。
一周忌の進行中、そして偲ぶ会の最中に、「遠いところ来てくれはりましたなあ」ひよっこり声をかけられそうなのがしてならなかった。先生ありがとうございました。

佳

孝行を古色蒼然だとか
お葬式母の同伴をして帰る
孝行を譬え話で論じてる
同居する子の孝行に気がつかぬ
天の川親孝行が遠ざかる

人

孝行がいまに伝説だけになる

地

孝行するには山が大きすぎ

天

孝行を昔噺で読んで

軸

孝行の重荷になるか古稀過ぎて

薫風

荒介

緑良

求芽

一屯

日出口

蘭幸

俊平

千代

雅文

あやめ

夕花

楓楽

哲子

みのる

東雲

ミツ子

亜弥

喜美子

本社 六月句会

六月七日(金)午後五時半

メンズファッションセンター

梅雨入り近しを思わせる曇天の七日、六月句会は八十三名の参加により定刻開催された。お話しは日展入選二十回、堺の書道家田端之蘭女史。

書道の世界も川柳の世界も表現方法は違つが、同じく感性を要する芸術と思つと前置きし、才能よりも努力の世界であることを強調、人間は理想を失つた時、老いるという。

才能や感性は磨けば光るもの、そして幼い時の環境が大いに影響する。脳細胞は二十歳を過ぎると一日二万個減るが全部なくなるには二百年かかるから案することはない。先ずは体力を養ひ、究極の卒意の書(その場でサラサラと書く)に向つたためなめ努力をしていと結ぶ。

そのあと五、六月に亡くなった同人、弓削の直原七面山、岸和田の三輪通彦氏に黙禱。初出席に良花、美花、柳昌、美子の四女性を迎える。

月間賞は久保田半蔵門(高槻市)に輝く。
(司会)岳人 (記名)森子・月子
(受付)一風・弥生・みつ子

久保田半蔵門選

席題「田植え」

田を植えて矢張り日本は神の国
田植済んでだんだん晶美しい
田植すみ蛙のコーラス聞いてます
田植すみ蛙も水もホツとする
御田植へ住吉踊りの紅が映え
田植えする姉さんかぶりなつかしい
愛想ない機械一人で田植する
機械化に田植えの唄も消えた里
田植機も蛙も嫁を待っている
跡つぎの無い田植機に積むローン
野外学習の田植えしばらく面白い
来年は嫁が加わり田植え唄
田植え唄 今にロボット唄い出す
年休を取つて田植えの応援歌
減反の過疎から消えた田唄え唄
田植等締めて泥田へ挑む母
田植えせぬ嫁弁当に彩を盛る
田植えする母の姿が遠い日に
アルバムに母は早苗の赤タスキ
花冷えて田植えが遅い苗の伸び
中国の捕虜で初めてした田植え
田植機にまかせられない千枚田
田植えする長兄だけがまだひとり
折り返し背なを伸ばして見る田植え

射月芳 紫香 寿美 みつ子 柳宏子 良花 たもつ 正雄 楓楽 英子 文秋 義子 希久子 重人 久峰 冬葉 柳昌 源一 雅文 武庫坊 かすみ 欣史子 一步

千秀 一風 英子 雅文 鬼遊 利武 千歩 たず子 洋

田植えしたわたしの早苗浮いてくる
減反に今年も負けぬ田植えする
出稼ぎの父が帰つて来た田植え
お田植えの神事に集う白い肌
おたまじやくしも一役買っている田植え

半蔵門 一步 鹿太 シマ子

兼題「悪口」

岩佐ダン吉選

悪口もやんわり話す京言葉
悪口も念仏にきく石地藏
通夜の席悪口言わぬことにする
悪口など言つ訳がない君と僕
無視よりもいっそ悪口言つて欲し
つますいた石で誰かがけなしてる
悪口を言い合いながら弾む酒
悪口がくすりとなった立直り
悪口は神のお告げと聞き流す

萬的 とし子 庸佑 柳宏子 千秀 洞庵 志洋 みつ子 鹿太

補聴器を外し悪口聞いている
 悪口も少しだけ混ぜ通夜の席
 悪口を盛る皿ならばバラ色を
 悪口を石碑に彫ってなせわるい
 悪口も言われぬ人の薄い影
 病院で医師の悪口聞いている
 悪口もコヤシにしている芸の虫
 悪口はおよし貴女が笑われる
 郵便受けに僕の悪口詰まっていた
 心の向き変え悪口を遠ざける
 悪口になるとふたりの息が合う
 かかり火の鵜の悪口は言いません
 悪口を言ったら風邪を引いちゃった
 酔覚めの水悪口を開きもらす
 悪口が聞えて勝ったなと思つ
 保育器の声は悪口かも知れず
 さびしいのは悪口言った後の闇
 好きな人の悪口ばかり言っている
 悪口が何より好きなロバの耳
 悪口を聞いたことないランの花
 悪口のバケツの底が抜けている
 ジェットコースターで妻の悪口吐き散らす
 悪口をいっぱい言うてから許す
 空青し悪口などは言うまいぞ
 悪口を言われて脳が生きかえる
 くどすぎるお世辞悪口かも知れず
 悪口を言ってるきつと好きなんだ
 人

射月芳 一風 シマ子 鬼遊 楓 英子 千秀 千女 武庫坊 寿子 雅文 英壬子 英壬子 澄子 しげお 金太 寿美子 保州 澄子 度 源一 桂香 いわゑ 欣史子 楓 寿美子

咀嚼した悪口ピタミンCになる
 地 住専の悪口ならばなんぼでも
 天 白い歯をだして悪口言わさない
 軸 悪口をいわれた頃が華やった
 兼題「奥」 福本英子選
 奥の手を見せて外堀埋められる
 鏡の奥におんなは過去を閉じ込める
 ジェラシーが心の奥の奥にある
 銀行の奥を覗いたことがない
 息殺す奥で同居の老夫婦
 忘れもの倉庫の奥にあるお骨
 傷ついた心の奥はのぞくまい
 奥深い森に埋める過去その他
 ブラックコヒー心奥の奥は覗かせぬ
 すこし恐いが森の奥まで従いてゆく
 国宝と言われ奥までみて回る
 米倉庫の奥に一揆の旗印
 そろそろと奥の手出すか拭く眼鏡
 ストレスをいっぱい溜めている奥歯
 続けてはいるが奥義をつかめない
 あの笑い奥の手がまだあるようだ
 きみの胸奥を覗いていいですか
 胸奥に翔べない蛍飼いつづけ
 奥のない人で少うしもの足らず
 貪欲が邪魔して見えぬ嘘の奥

シマ子 美津留 しげお ダン吉 千秀 楓 射月芳 桂香 章久 英壬子 頂留子 たず子 澄子 鬼遊 度 武庫坊 正雄 希久子 満州 ダン吉 金太 洋 一歩 太茂津

心眼に奥の底まで見すかさね
 それよりは奥へ入れないドアチェーン
 九条は奥の手使いすぎないか
 路地の奥ぬくいコントが落ちている
 仏壇の奥を時どき覗いてる
 その奥が読めず失礼してしま
 奥向きはやさしい妻でいて欲しい
 CTSキャン私の秘境こま切れに
 奥の手は馬鹿になること知っている
 その奥を覗けばきつと火傷する
 ひらがなでしゃべるはなしに奥がある
 佳 手をそめて奥の深さを思い知る
 コロニーの奥まで愛の水をやる
 疑問符の奥は誰にも覗かせぬ
 風は無口で心の奥を吹き抜ける
 亡き母に叱られにゆく奥座敷
 人 奥の院あしたの分も深呼吸
 地 奥の手があるから風と聞き流し
 天 奥義身につけて柔和な目に還る
 軸 奥の手を出さずにすんだ五月晴れ
 兼題「マンネリ」 江口 度選

悟郎 英壬子 保州 たず子 希久子 満津子 月子 澄子 弥生 寿美 たもつ 射月芳 隆 美代子 冬葉 みつ子 かすみ 紫香 千秀 英子 度選 一風 正坊

マンネリと呼ばせたくない伝統美
うろこ一枚剥いてマンネリから脱皮
いちご大福マンネリの舌狂わせる
マンネリの祖母の話で孫は寝ず
相乗りの船で政治がマンネリ化
マンネリを突き破らんとネギ坊主
マンネリを抜けて濃いめのコーヒーを
マンネリの塊乗せて通勤車
マンネリへ社長手綱をひきしめる
開き直ってマンネリと妥協する
マンネリの沸騰点のないドラマ
マンネリですんまへんなど冷奴
食卓にマンネリがあり豆腐汁
田舎な顔でマンネリ平社員
マンネリの言葉だらうかありがとう
マンネリの台詞に飽いた馬の足
マンネリの風向き変えてくれた嫁
わたくしの貌がマンネリだと思っ
マンネリといつも仲良くしています
勲章を貰ってその後マンネリに
母の日にまたカーネーションの束が来る
妻も子も踊らぬ笛を今も吹く
扇風機出して夫婦に羽根がない
マンネリのスピーチ欠伸噛み殺す
原点にかえりマンネリから抜ける
基地返せもうマンネリは許さない
雷が落ちてマンネリから抜ける
マンネリを破る社名をカナにする
マンネリが続いて日記白いまま

頂留子 寿美 千歩 章久 美津留 月洋 悟郎 久峰 澄子 美羽 寿美子 希久子 久女 丹吉 鹿太 源一 金太 金太 射月芳 欣史子 美津留 鬼遊 志洋 恭昌 ダン吉 典子 重人 正坊

住
マンネリも知らずロボット動いてる
種なしはどうを誰も不思議と思わない
マンネリに気付いた頃は呆けている
マンネリの器へ入れる唐辛子
ぬるま湯をまぜてるような日が続く
人
マンネリがとても嫌いな白い皿
地
マンネリの靴が平たくちびてくる
天
マンネリに檸檬をキニツとふりかける
軸
マンネリに警鐘ならす崖くずれ
兼題「風」
春城 武庫坊 選
風の向き名外野手は位置変える
どんな風吹いたか妻の厚化粧
風の音 昔ばなしが長くなる
北風に逆らう炎だつてある
リストラの風が序列をなぎ倒す
マーレード煮つめるこちよい風も
歳時記の風にくちを盗まれる
死んだふりしてると見えた風の彩
鼓舞をする味方を囲む風の舞い
楼門で真面に受ける京の風
風を切る女の彩が目に残る
能面がゆく雑踏の濁り風
敗者の尻尾夜の緑の風にゆれ

柳宏子 美代子 太茂津 朝子 英子 楓 柴 しげお 森子 度 半蔵門 度 月子 寿子 正雄 茜 鹿太 楓 柴 悟郎 悟郎 狸村 勇太 英壬子

生きているから哀楽の風に逢う
身に憶えない悪口が風に乗る
会者定離無情の風を着る喪服
やさしい風になつて昨日の傘を干す
極楽行きの風が切符を切りに来る
ご利益がありそう風が揺れている
風媒花 ふる里知らぬ根をおろす
風向きを見ながら旗を振る男
草に寝て風の行方を確かめる
坂道にコーヒー店ある風に逢う
北風を許す幸せ知つてから
ブライドを捨てておんなは風になる
風媒花 桃源郷の夢を見る
よそ行きを着て春風に逢いにゆく
アトランタの風にはためく万国旗
決心をゆるがす風となる絆
つむじ風きつと励ます母の声
風の中生きるヒントが落ちていた
住
風紋に一夜話を聞かされる
嘘ですと風がうしろで笑つてる
告白を聞いた気がする風の駅
こころに風吹く日ひたすら鍋磨く
父の樹を揺る少年風となる
人
ひとり旅風が絵になり詩になり
地
風紋は亡父が遺した置き手紙

正坊 庸佑 たず子 希久子 とし子 重人 萬的 保文 雅文 紫香 典子 朝子 重人 英子 洋 欣史子 一風 いわゑ 千秀 一步 正坊 楓 隆 弥生 寿美

天

背信の枕ゆるして風という

軸

風を聴く深い闇から抜け出して

兼題「歩く」 橋高薫風選

空缶を拾ってさりげなく歩く

歩きつつ話せば近い道だった

先頭を歩く速度を守りつつ

真ん中を歩く無視されないように

いつのまに子供と犬が一人歩き

どこを歩いてもふりむいてもくれぬ

ジグザグに歩いた人で聞き上手

流されず止まらず歩く生き上手

確信が歩幅を上げ闊歩する

母おもい父の歩んだ道避ける

孫歩く何とみんなのうれしそう

孫三つモンローウォークやつてのけ

恋は曲者しばらく歩く雲の上

星月夜歩いてなにもない二人

未練たち切る今日も明日もただ歩く

山頂へ黙々歩むマイペース

牛歩では間に合いません塾カバン

おろおろと歩く賢治もわたくしも

いのち宿して命の歩幅きつちりと

歩いたら治ると本に書いてある

へソクリがひとり歩きをしてこまる

散髪をしたら歩いてみたくなる

かるがもが歩く 報道陣歩く

勇太

武庫坊

雅文

満津子

千秀

希久子

良花

重人

楓楽

美代子

悟郎

欣史子

一風

隆

みつ子

志洋

弥生

庸佑

かすみ

桂香

森子

正坊

メ女

保州

典子

一匹の自分頼りに歩く道

一寸の虫もわが道歩むなり

歩いてる蟻も身分を弁える

歩くのが苦手な靴を履いて出る

地図になき道も歩いた父の靴

ゆつくりと歩くこの町 母が居て

気が付けば父の歩いた道に佇つ

裏町を歩いて知った父の酒

真つ直ぐに歩けば塔が見えてくる

住

歩け歩け大阪城がタクト振る

ひとりしか歩けぬ道に水芭蕉

ロボットの歩きがさまになってくる

父の服案山子が歩き出しそうだ

心齋橋歩いただけで覚えてず

人

平坦な道を歩いて右顧左眄

地

核なくせ僕は炎天下を歩く

天

哲学の道へ歩きにやつてくる

軸

かつてわれ陸軍歩く二等兵

か

尾藤三柳句碑建立

「川柳公論」創刊20年

と尾藤三柳川柳生活50年を記念し、東京都台

東区上野恩賜公園内に句碑を建立。除幕は平

成9年5月3日、基金は一口5000円。

朝子

洋一

源一

月子

たず子

満津子

たもつ

弥生

しげお

重人

紫香

佳秋

冬葉

千歩

千秀

ダン吉

半蔵門

薫風

生嶋

ますみ

鬼遊・シマ子・美津留推薦

大内朝子

薫風・鬼遊・シマ子・美津留推薦

新同人紹介

なみはや川柳募集

テーマ 国体のスポーツ全般・国体を迎える地元の表情 葉書に2句

選者 西田柳宏子氏（川柳人クラブ）

締切 7月20日（土）

送り先 大阪市中央区南船場3-3-10

エーゼビル6F・シービー内

「なみはや川柳」係

新同人紹介

原章峰

薫風・智子・代仕男推薦

生嶋ますみ

鬼遊・シマ子・美津留推薦

大内朝子

薫風・鬼遊・シマ子・美津留推薦

いずも七十周年 大会に参加して

宮崎 シマ子

五月十八日朝、いずも川柳会七十周年大会参加のため、貸切りバスで天王寺を出発した。あとから参加した橘高薫風主幹を含めて総勢二十四名であった。若葉もえる中国路は、桐の花や藤の花の紫が目に見え、松江では柳楽鶴丸さんらが出迎えてくださった。途中、島根ワイナリーでぶどう酒を賞味し、車中ですでにご機嫌になった人もおられ、出雲大社で今回のツアーの無事を祈願した。

やがて会場のビジネスホテル・ハアツに到着し、前夜祭に出席したが、参加者は六十名という盛会。太草おしえさん、吉岡きみえさんの地元ならではの正調安来節に聞きほれ、松本文子さんを先頭に踊り、にぎやかなうちに宴がすすんだ。初めて逢った方ともうちとけて、名物の割子そばやお寿司など食べよ、飲めよの温かいおもてなしをいただいた。

翌十九日朝は日の岬を訪れ、

灯台の夕陽神話を抱きよせる

の句が深く刻まれた尼緑之助さんの句碑に對面した。日本海を眼前に経島のうみねこの鳴き声を聞いて遠い昔の神話に思いをはせ、夜灯台に灯が点れば、どのようなすばらしい風景になるだろうかと想像した。

大会場では、久家代仕男会長を先頭に会員のみなさんがそれぞれの分担を手ぎわよく仕切っておられ、この和、このパワーがあれば



こそ、七十年の歴史を刻むことができたのだと感心させられた。やがて開会、西田柳宏子理事長のお話、会長その他の方たちのあいさつの後、入選句の発表が行われ、ユーモアあふれる披露に時の経つのも忘れた。大会終了後、大阪組は懇親会を失礼して別行動をとり、いずものみなさんに手を振って別れを告げ、宿舎に向かった。

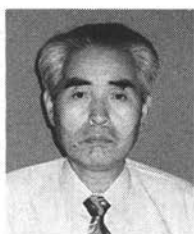
二十日はあいにくの雨となったが、完成したばかりの中国式庭園の燕趙園を見学した後、きやらばく的林荒介さんがお世話くださったさかえやで米子の方たちと一緒にご飯をいただき、境港でゲゲゲの鬼太郎の影像を見物した後、魚市場やお菓子の城などでショッピングを楽しみ、想い出を胸に帰阪した。

いずものみなさん、米子のみなさん、ありがとうございました。

大会における各題秀句は次のとおり。

七つ屋の裏口叩き日銭追う 明里かつみ
古い仲間ひとつの芸を大切に 小島 蘭幸
潮時がよいから種を蒔いている 岡田 竹夫
毎日が染みて畳が古くなる 奥田 勝子
火を焚いて独りの柿さから逃がれ 金築雨字
栄転に胃も肝臓も異常なし 土橋 螢
吸えるだけ緑を吸おう朽ちる身よ

渋谷由紀子



三輪通彦さんを悼む

芳地狸村

川柳塔社同人で、岸和田川柳会会員の通彦さんの訃報に接したのは、「父が二十五日の朝八時二分に亡くなりました」という娘さんからの電話でのお知らせでした。

通彦さんは最近、体調を崩され、入院治療中と聞いていましたが、よもや急に亡くなられるとは、考えてもおりませんでしたからびっくりいたしました。昭和三年生まれ、六十七歳のあまりにも早い旅立ちでした。鉄道公安部に三十八年余にわたって勤務され、定年退職後、川柳を志し、朝日なわ柳壇に初投句して橋高薫風先生との出会いがありました。岸和田川柳会に入会後、川柳カレンダー、e i の会や新聞の川柳欄に投句し、川柳塔社同人としても活躍されました。

岸和田市では、児童交通指導員として十年余りつとめられましたが、律儀そのものの生真面目なお人柄で、みなさんから親しまれていました。

家庭では、奥様と常に行動を共にされ、次の句を残されています。この美しい夫婦愛には、頭の下がる思いです。

二人三脚 妻と歩幅の合う余生

家族を詠んだ句

風呂場では親子の対話よく弾む
親の方から折れて同居の和を保つ
賑やかな親子で共に祭り好き
過ぎ去ればみんな許せることばかり

妻を詠んだ句

糟糠の妻をねぎらう小旅行
寝込まれて妻のありがた味が判る
居眠った妻にテレビをそっと消す
挫折する度に励ましてくれる妻

子を詠んだ句

肩車した頃までは子も素直

親の夢詰めて重たい塾カバン
無意識に親の真似する子の動作
声変りしてから親を煩がる

孫を詠んだ句

おいそれと買えない孫のおもちゃの値
孫の守り終れば病んでくる五体
重いのも自慢のひとつ孫を抱く
同居して孫が主役の座を占める

生活を詠んだ句

出世より趣味を選んで満ち足りる
生真面目も思えば損な生まれつき
お墓まで散歩の日課欠かせない
ストレスを発散できぬ律気者
『川柳塔』から抜粋しました。

薫風先生には、ご遠方の所をお通夜にご参列いただき、ありがとございました。今ごろは、天国で高橋操子、植山武助両先生はじめ柳友たちと楽しく川柳づくりに励んでいることでしょう。

戒名 彦譽求道通西禪定門

ご冥福を心からお祈り申し上げます。合掌

追悼句

蓮華座へ律儀一路の友が近く

狸村

柳界展望

(大伴閑人選)を400字

詰原稿用紙に氏名・年齢・住所・電話番号を明記し、応募料1000円を同封、7月31日までに左記へ送る

〒410沼津市東宮後町27・沼津文化協会「ぬまづ文芸」実行委員会・発表10月31日

★第27回奈良新聞川柳大会は、7月28日午前10時から檀原市のおふさ観音(近鉄八木西口駅から歩17分)で開く。席題は稲垣馨選、宿題と選者は、こころ、福田秋雄▽トンボ、石田常念▽汲む、鶴本むねお▽途中、宮口笛生▽聴く、杉森節子▽青、中村福太郎▽油断、片岡つとむ。各題2句、午前11時半締切。会費3000円(昼食・発表誌呈)。

欠席投句は7月15日までに500円を添えて630奈良市北市中町71・杉野睦朗へ。

★沼津市教育委員会・沼津文化協会は、第23回沼津市芸術祭・文芸部門の作品を募集している。川柳は3句

★都大路川柳社の平成7年度群像賞に本社同人の門谷たず子さんと筒井文雄氏が受賞した。

★鶴かこ川柳社の平成7年度グランプリの金・銀・銅賞の受賞句は次のとおり。子はみんな無事に育った遠花火へ金、井上多加江駅弁を二つみどりにもえる窓、銀、山田津多江明日がある余力残して本を閉じ、銅、角谷実笛

★柳都川柳社の第22回白石朝太郎賞(雑詠欄年間賞)に塩田悦子・進藤一車両氏

★川柳路吟社は平成7年度の年間賞を決定、最高賞は瀬々倉卓治、優秀賞は中村千絵・堀井勉の各氏に授賞

★ふあうすと川柳社は名誉同人に田中好啓・山川白層中村東角・橋本衛門七・吉野英二の5氏を決定した。

★時の川柳社は平成7年度の作家賞に喜福恵美香・矢

沢和女・池田恵美子・河島いち子の4氏を決定した。

▽同人消息△

■蘭田猿香氏(同人・静岡県)は、5月29日、観光功労者として静岡県観光協会から表彰された。SLの専務車掌として10年間、勤務したことによるもの。

■菱田満秋氏(同人・横浜市)は、横浜川柳懇話会主催で開かれた京浜川柳大会で横浜川柳作家賞特選一席として表彰された。

▽出版△

■「平成柳多留・第3集」(A5判298頁・全日本川柳協会編)日本財団補助事業)第1部、全日本川柳誌上大会入選句集▽第2部、日川協加盟柳社推薦句集▽第3部、誌上大会参加者自選句集

■川柳句集「こころの滴」(津村八重子著・A5判252頁・1468句収録)

■5月号P98(各地柳壇)下段2行目「感性の差からイバルがジャンプする紫香」↓作者は源一の誤り。

■6月号P100上段16行目「新家元治」↓「新家元司」▽P10第5段12行目「：和歌山氏」↓「和歌山市」

▼計報▲

■三輪通彦氏(同人・岸和田市)5月25日、肝臓ガンのため死去、68歳。告別式は27日土生会館で行われた

■永田帆船氏(川柳文学社会長)全日本川柳協会顧問)5月26日、肺結核のため死去、82歳、本名春雄。

▼訂正▲

■5月号P98(各地柳壇)下段2行目「感性の差からイバルがジャンプする紫香」↓作者は源一の誤り。

■6月号P100上段16行目「新家元治」↓「新家元司」▽P10第5段12行目「：和歌山氏」↓「和歌山市」

竹原川柳会

〒725 広島県竹原市竹原町4535-5

小 島 蘭 幸 方

暑中お見舞い申し上げます

創立40周年記念川柳大会を9月8日に開催致します
皆様のご出席をお待ちして居ります

平成八年 盛夏

会 監 会

計 査 長

山 古 古 岩 藤 古 石 岡 三 森 岩 時 小

内 田 田 本 解 谷 原 本 宅 井 本 広 島

ほ 房 比 太 文 静 節 淑 清 不 菁 笑 一 蘭
か 呂
同 子 子 虚 晴 風 夫 子 水 朽 居 子 路 幸

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

											主幹	顧問
桑原道夫	黒瀬登紀夫	北山好笑	柿花紀美女	尾田綾子	小倉アサ	大野武太	内芝登志代	岩倉天彦	伊賀政一	牛尾緑良	野村太茂津	

中後清史	中井栄美子	富上光代	天満三千代	寺田裕美	千原淳太郎	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信子	田中輝子	杉山精子	塩谷佐代子	坂部紀久子	坂口公子
------	-------	------	-------	------	-------	-------	------	------	------	------	-------	-------	------

ほか 会員 一同	横垣忠翁	森三枝子	宮口克子	松原寿子	堀端三男	細川稚代	福本英子	福田和子	西口忠雄	中根勇太	中島正博
----------------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

TEL 0734-46-2855

暑中お見舞い申し上げます

夏バテになりませぬよう

1996年 盛夏

第17回“川柳塔鹿野みか月”記念川柳大会は、今秋
11月17日(日)、県の後援を頂戴して開催いたします。
皆様のご支援を心からお待ちしております。

※詳細は後報にてお誘い申し上げます。

川柳塔鹿野みか月

☆事務局 〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原 諷人方
電話 (0857) 84-2100

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

柴	清	児	黒	栗	北	奥	岡	梅	上	井	井	稲	泉	中	高	橘
田	水	玉	田	谷	田	田	本	田	田	上	上	本	田	西	杉	高
英	絹		真	春	綾	み	久	宣	佳	源	照	凡	た	兼	鬼	薫
壬	子	蛙	砂	子	子	つ	峰	司	秋	一	子	子	子	治	遊	風
子														郎		

渡	米	山	堀	堀	古	藤	藤	西	中	天	寺	津	田	竹	高
部	田	本	江		谷	村	井	出	村	正	井	村	中	田	杉
さ	恭	希	光	良	ひ	宏	正	楓	叡	千	東	志	正	み	千
と	昌	久	子	江	子	子	雄	楽	子	梢	雲	子	坊	ず	歩
美														き	

南大阪川柳会

会 員 一 同

暑中お見舞い申し上げます

うみなり川柳会

鳥取市相生町 3 丁目 204

電話 (0857) 23-4672

暑中お見舞い申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 一 同

月例会会は第三木曜日

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-01 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

暑中お見舞い

申し上げます

岸和田川柳会

福浦勝晴

岩佐ダン吉

島崎富志子

原さよ子

古野ひで

田中文時

寺田甚一

林春恵

内田一弥

村垣鹿太郎

井齋一齋

柿花昭二

長谷川呂万

藪野ケイ子

高須賀金太

芳地狸村

暑中お伺い申し上げます

ほたる川柳同好会

松本	古川	中田	玉置	滝北	嵯峨根	岡本	江口	上田	池田	一瀬	稲葉	月原	湯浅	井上	橘高
ただし	喜美子	純次	英子	博史	保子	吉太郎	明光	佳秋	善守	福一	眞郎	方郎	馬洗	直次	薫風

定例会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛍池公民館

暑中御見舞

サークル 檸檬

暑中お見舞い申し上げます

富	笠	奥	松	竹	藤	川	松	辻	阿	黒	正
山	嶋	山	川	内	村	島	川		萬	川	本
ル	恵	美	芳	花	ノ	諷	杜	白	萬	紫	水
イ	美	智	子	代	云	児	的	溪	的	香	客
子	子	子	子	子	女	女	的	子	的	香	客

暑中お見舞い申し上げます

平成8年夏 会員一同

川柳塔おおとり事務局

〒680 鳥取市相生町1丁目110 小林由多香

西	西	室	山	大	勝	録	近	福	原	中	岸	岸	上	小
原	原	余	本	谷	原	沢	藤	田	み	澤	本	本	田	林
艶	真	志	崇	幸	悦	風	佳	登	さ	伝	孝	宏	俊	由
子	一	身	郎	次	子	花	子	美	を	住	子	章	路	多

(順不同)

申し上げます

京都塔の会

本 山 高 山 渡 松 都 松
莊 田 沢 海 辺 川 倉 川
福 葉 友 圭 芳 求 杜
子 子 栄 熙 坊 子 芽 的

暑中お見舞申し上げます

とっとり川柳会

池本山人
岩田輪多朗
岩原喬水
石上悦子
坂田和歌子
武田帆雀
武田粗粒
谷口侑里
春木圭一郎
橋本孝由
前田一枝
宮木一夫

申し上げます

川柳クラブ

わたしの花

高杉鬼遊	川崎友甫	服部春子	平川幸枝	松葉君江	小沢泰成	宮崎シマ子	田中トシエ	二瓶道子	粂山隆	生嶋ますみ	吉村一風	山下美津留	内田龍
高橋明子	大内朝子	村上剛治	村上ミツ子	牧戸きみ子	神原まさと	中島春江	西村幸子	奥田けいこ	山本宏	八倉知佐子	乾美代子	花柳吉五進	

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

ペン皿の会

暑中お見舞申し上げます

他	兄	中	高	福	武	楠	赤	高	川	大	福	中	高	吉	笠
島	原	田	田	部		木	津	端	槻	元	島	田	岡	原	原
一	与	比	治	悦	敦	昭	和	三	六	一	み	志	美	美	吸
同	呂	呂	子	子	子	子	子	郎	点	屯	の	洋	子	房	江
	志	志									る				

川柳藤井寺

暑中お見舞い申し上げます

川柳 ささやま 社一同

代表 遠山可住

暑中お見舞い申し上げます

連絡先

〒675-01

加古川市平岡町新在家二〇〇六―八

吐田公一方

電話(〇七九四)二二―三六八一

城北川柳会

坂本	坂上	小糸	喜多	川久保	神夏磯	叶岡	柏木	太田	上田	上田	今西	井上	池田
仙高	高昭	昭津	佐乃	睦子	典子	史風	八重	とし子	柳影	登美子	静子	白峰	寿美子
吉郎	栄	子	乃	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
吐田	森本	松岡	松田	町間	本東	板川	長谷川	野呂	野村	中田	高橋	鈴木	鈴木
公扇	た	久	達	満	倫	春	右	美	あ	一	ト	政	子
一帆	だし	留美	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子

木	菊	亀	門	小	小	奥	奥	上	浅	秋	黒
村	池	岡	谷	倉	熊	山	田	田	野	元	川
貴代子	トミエ	哲子	たず子	藍	江美	美智子	みつ子	佳秋	房子	てる	紫香
吉	山	山	丸	牧	藤	春	春	林	西	黒	久
田	本	崎	山	渕	村	城	城		口	田	保
笑	義	君	よし津	富喜子	メ	武庫坊	年	はつ絵	いわゑ	能子	まさお
女	子	子			女	坊	代				

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 社

主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 理 事 長
常 任 理 事

橘 高 薫 風	西 田 柳 宏 子	小 出 智 子	板 尾 岳 人	河 内 天 笑	岩 佐 ダン 吉	榎 本 吐 来	奥 田 み つ 子	川 島 諷 云 児	河 内 月 子	小 池 し げ お	田 中 正 坊	高 須 賀 金 太
---------	-----------	---------	---------	---------	----------	---------	-----------	-----------	---------	-----------	---------	-----------

高 杉 鬼 遊	宮 口 笛 生	西 口 い わ ゑ	西 出 楓 楽	春 城 武 庫 坊	宮 崎 シ マ 子	宮 園 射 月 芳	山 下 美 津 留	吉 岡 美 房
---------	---------	-----------	---------	-----------	-----------	-----------	-----------	---------

川柳塔社常任理事会

7 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	4日(木)午後1時から 叫ぶ・茶・うろうろ・礼儀	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎いくしま	5日(金)午後1時から 爪・転ぶ・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
西宮北口川柳会	8日(月)午後1時から 竹・釣る・笑う・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
ほたる川柳同好会	9日(火)午後1時から 腹・甘い・焼く	豊中市立池田公民館 阪急宝塚線池田駅西へ150米 〒560 豊中市池田中町3-10-28 井上直次
八尾市民川柳会	10日(水)午後6時から 浜・尽くす・マジック・夜	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川柳塔まつえ	13日(土)午後1時から 中年・足す・奇跡	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔わかやま	14日(日)午後1時から 船・回る・晴れる	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
もくせい川柳会	15日(月)午後1時から 浴衣・沸く・怪しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳サークル卯の花	18日(木) 正午から 疑う・港・スランプ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島凜児
南大阪川柳会	19日(金)午後6時から 羨む・愚問・素直・罪	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
川柳ねやがわ	21日(日) 正午から 風・迷う・スタート・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岸和田川柳会	21日(日)午後1時半から 味噌・無茶・免許・目次	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
富柳会	25日(木)午後1時から 箱・端・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池森子
京都塔の会	25日(木)午後1時から 船・閃く・中心	ラポール京都 阪急西院駅東へ400米 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下弁財天町 都倉求芽
東大阪市川柳同好会	27日(土)午後6時から 古い・包丁・誰・どっこいしょ	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの市川柳民会	28日(日)午後1時から 気合い・構える・アドバイス・いざこざ	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★この欄も、たまには役に立つことを書きたい。昔、新聞社の編集局には、連絡部というセクションがあり、原稿はすべて電話で送られていた。その時に使用されていたのが、フォネティック・コードである。これは今も電話局やアマチュア無線あるいは航空・船舶間の連絡に用いられていることを『川柳大阪』に掲載された中原比呂志氏の文章で読んだ。私もつろ覚えで知ってはいたが、コードの全部を見るのは初めてであり、参考になると思うので、転載させていただく。

★ア：朝日のア／イ：いろはのイ／ウ：上野のウ／エ：英語のエ／オ：大阪のオ／カ：為替のカ／キ：切手のキ／ク：クラブのク／ケ

…景色のケ／コ：子供のコ／サ：桜のサ／シ：新聞のシ／ス：すずめのス／セ：世界のセ／ソ：そろばんのソ／タ：煙草のタ／チ：ちどりのチ／ツ：鶴亀のツ／テ：手紙のテ／ト：東京のト／ナ：名古屋のナ／ニ：日本のニ／ヌ：沼津のヌ／ネ：ねずみのネ／ノ：野原のノ／ハ：はぎのハ／ヒ：飛行機のヒ／フ：富士山のフ／ヘ：平和のヘ／ホ：保険のホ／マ：マツチのマ／ミ：三笠のミ／ム：無線のム／メ：明治のメ／モ：もみじのモ／ヤ：大和のヤ／ユ：弓矢のユ／ヨ：吉野のヨ／ラ：ラジオのラ／リ：りんごのリ／ル：留守居のル／レ：れんげのレ／ロ：ローマのロ／ワ：わらびのワ／ン：おしまい

★この一覧表、最もポピュラーな日本語と地名によって構成されている。(正)

ひとこと

携帯電話の功罪

このところ、目ざわり・耳ざわりなもので携帯電話がある。たいへんな勢いで普及し、今やヤングのファッションにまでなっている。なんでも新しい物にすぐとびつく私だが、これだけは買おうとも持とうとも思わない。

車内でも雑踏の中でも、あたかもまわす大きな声で話しかくる。聞いているとあまり緊急な用件で代物だと思ふ。

(島江 一夫)

☆麻生路郎先生は作品を引用する時には原句を正確に、と厳しく指導されたと同つて、本誌の校正でもミスのないよう一生懸命努めているつもりである。私も最近、他誌で二ヶ所間違つて掲載された。冬の雲が冬の雪に、言葉遊びが言葉遊びとなっていた。次号で訂正されても効果は薄く、すつきりしないものである。

☆気をつけているつもりで

も、辞書にない新しい言葉を使う方もあり、原稿に忠実にと考えるといういろいろ深読みをしてしまふ。「三娘が合格」とあるので三人の娘さんが中学・高校・大学に合格されたのかと思つたが、念のため電話で聞くと三浪の間違いであった。孫の補修とあるから、わざと孫を物にたとえて修理するのかと考えたが、補習のこたであった。方言もある。

た怖いものもある。(み)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（9月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

作品募集

初歩教室 「困る」(3句) 吐田公一担当	課題吟 (3句) 「みがかく」 「気まずい」 西村早苗選	「夜」 中山雅城選	茴香の花(3句) 八木千代選	渺湖抄(3句) 小出智子選	水煙抄(8句) 西田柳宏子選	川柳塔(8句) 橘高薫風選
----------------------------	--	--------------	-------------------	------------------	-------------------	------------------

9月号発表(7月15日締切)

10月号
課題吟「兄弟」「待つ」「珍しい」
初歩教室「白」

路郎忌 本社7月句会

会費 500円	席題 1題 当日発表 各題2句以内	兼題 「招待」 「丸い」 「人問」 「港」 「俺」 「入間」 「橋高薫風」	とき 7月8日(月)午後5時半	ところ メンズファッションセンター3F 中央区内本町1-1 電話06・941・1918 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
------------	-------------------------	--	--------------------	---

本社8月句会 7日(水)予定

兼題 「指」「勇気」「毎日」
「崩す」「好き」

NHK川柳作品募集

アトランタのオリンピック放送のため、7・8月中のNHKの川柳の放送ならびに作品募集は中止、9月から再開いたします。

夜市川柳募集

題選者	締切
①「煙」高杉 鬼遊	6月末
②「無駄」西出 楓楽	7月末
③「控え」小島 蘭幸	8月末
④「大人」小池しげお	9月末
⑤「錯覚」木野由紀子	10月末
⑥「油断」林 荒介	11月末
⑦「飢え」田頭 良子	12月末
⑧「本能」藤本静港子	1月末
⑨「癖」小松原爽介	2月末
⑩「遊び」岩井 三窓	3月末
⑪「いたずら」中尾 藻介	4月末
⑫「役」橘高 薫風	5月末

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑方 堺川柳会

〒545

定価 六百元(送料84円)

半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百元(同)

平成八年七月一日発行

編集兼 発行人 橘 高 薫

印刷所 藤 原 童 心 社

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06)六九一四番

振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番



泣いて笑って……

夜を通り過ぎたら

また陽がのぼっていた

男のロマン



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 941-8018

月刊 オール川柳

毎月25日発売!!

A5判 定価830円(税込)

大好評!!

句会、投句の必勝法!

入選句の条件

こんな句が抜ける!

投句募集!

読者柳壇/選者・大木俊秀・八木千代・山本翠公
ジュニア柳壇/選者・卜部晴美・江畑哲男
誌上吟行会/選者・野口初枝

話題の連載!

忘れがたき柳人たち

古川柳講座

現代川柳入門講座

川柳賞読

川柳はみだしある記

うめぼし柳談

難波利三の行雲随話

弥平の或る風景

時事川柳我楽多ノート

連載随筆 柳言悲語

快談私論 華乱小論

東野 大八

渡邊信一郎

片岡つとむ

高峰 一郎

田中 佳宏

大野 風柳

難波 利三

石丸 弥平

柏原幻四郎

岩井 三窓

横村 華乱

お申し込みは書店、または、当社直接定期購読をお願いします。

〒556 大阪市浪速区恵美須西2-9-15 (株) 齊藤編集事務所内

月刊オール川柳社

TEL 06-634-5548 FAX 06-636-3832

郵便振替 00980-2-22728

雑誌 05703-7